Dance of Aether's !

Leonids

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄａｎｃｅ　ｏｆ　Ａｅｔｈｅｒ'ｓ！

【Ｎコード】
Ｎ２２１０Ｅ

【作者名】
Ｌｅｏｎｉｄｓ

【あらすじ】
「あんた今日から私のご主人様だから」普通（？）に暮らしていたはずの青年、片桐悼矢の元にいきなり現れたのは大剣を振り回す金髪の少女と獰猛な化け物。異界と現界の運命に巻き込まれた主人公の物語

BeginDance

ポタ……ポタポタ……。

滴り落ちる水音。

そこはビル街の路地裏だった。普通に生きていたら用もなくそんな所に入り込むことなどないだろう場所。ゴミやら新聞紙やらが落ちていて非常に不愉快極まりない。

人間の住む世界というのはもっと美しくのどかな場所だと思っていた。しかし、来てみてびっくりだ。いや驚いたというよりも失望といった方が合っているかもしれない。

とにかくそこに私はいた。

ビルの壁を背もたれにしてなんとか立ててはいる。が、もうほとんど足に力はないし今倒れたとしてもおかしくはない。

ああ、なんてか弱い私……。白馬の王子様はさっさと私を見つけるべきだ。

天を見上げる。まだ夕方だというのにビルの影のせいで辺りは暗い。とその時、首をあげたせいでお腹の傷がずきりと痛んだ。

「ぅ……くうぅ……」

思わず唸ってしまう。もう泣きそう。

そう、私は傷を負っていた。なぜかと問われると説明に困ってしまう。話すと長くなるし、何より面倒くさい。なので簡単にまとめてみる。

化け物に襲われて逃げてるのよ！

うむ。我ながらうまくまとめられたと自負したい。『何を言ってるんだ、こいつ』と思われるかもしれないけどマジなんです。いや、ホントに。

血が流れていく。まるで自分の生命力がそこから抜け出ていくようだ。当たり前だがこの感じは慣れるものではない。慣れたいとも思わないが。自分の名誉のために言っておくが当方は決してマゾヒ

ストではない。どちらかというと――とそんなことはどうでもいい。
服を捲り上げてお腹の傷口を確認してみる。そこからはおびただしいほどの血が出ていて、ちぎれた肉がてらてらと朱色に光っている。
（うっわぁ、グロっ！）
見なきゃ良かったと服を下ろす。しばらくはお肉がおいしく食べられないだろう。それにひどい傷を見てしまったせいか、さっきよりも傷口が痛く感じるようになった。
（まずいわね……この傷は深いわ……。どこかで休まなきゃ……）
普通の人間なら致命傷になるはずの傷だ。三十分もほったらかしていたらぽっくりとヴァルハラへと旅立つことになるだろう。だけど私ならこうしてじっとしていればそのうち傷口が癒えるのである。まるで私だけが特別な体をしているみたいな言い方だが、間違ってはいないと思う。
理由はあまりにも簡単。
なぜなら私は人間ではないからだ。
エーテル――私たちのことはそういう風に人間に呼ばれる。と言っても私たちの存在を知っているのは一部の人間だけなのだが。
まあ、詳しい説明はまたもやおいておこう。今もっともやらなきゃいけないのはどこか隠れる場所を見つけることなのだ。
このままこんな所で傷が癒えるのを待っていたらいつかは奴らに見つかってしまう。奴らというのはもちろん恐れおおくもこの私を襲った化け物のことだ。私の性格上やられた分は倍にして返さないと気がすまない。その復讐を果たすためにも、こんなところでくたばるわけにはいかないのである。
それに人目について騒ぎになるのも馬鹿らしい。それでなくても私は可愛いから人目につくというのに……。あ、大丈夫。熱とかないよ？
私は朱い空を再び見上げた。
自分の中に流れている力を活発化させる。

瞬間、私の周りに陽炎が立ち昇った。
（行っくわよ！）
どばんッ！
地を蹴ると私の体は地面に弾かれたように宙空へ飛び出す。その後を轟ッと風が取り巻いて、地面に転がっていた新聞紙などを巻き上げる。
人間から見ればどれだけ異常な脚力だろうか。私はその一蹴りだけでその建物の高さを超える跳躍を見せていた。
そして、建物の屋上にすたっと着地する。
屋上からは夕日がよく見えていた。
もう三〇分も経てば夜になる。奴らが本格的に活動する時間がきてしまう。それまでにはなんとかして隠れる場所を見つけないと。
私はビルから隣のビルへと跳躍した。
そうやって移動しているとやがて景色が変わってくる。
住宅街に入ったのだ。
その頃には辺りはすっかり真っ暗になっていて、いよいよ私は潜む場所を見つけなければならなくなった。
家の屋根から屋根へと移動していると、ふと行く手に広くて古そうな建物が見えた。私は吸い寄せられるようにその家に近づく。するとその家の全景が見えてきた。純和風の建物で、中庭なんぞがある。って、中庭ですってっ!?　なんと豪壮な！
だがしかし、その家には人気がなかった。電灯もついていない。この時間帯なら一人や二人は人がいてもおかしくないと思うのだけど……。
そこで私はふとある事を思いついた。
もしかしてこの家は空き家だったりするんじゃないだろうか。見てみればかなり古い建物。いつ崩れてもおかしくないような古家だ。こんな所に果たして人が住むだろうか。いや、住むはずがない。と、散々けなしてはみたがその古家はどことなく懐かしい感じがしていた。

キュピーン、と自分でも眼が光ったのが分かる。
これはいい場所を見つけてしまった。私の日頃の行ないが万を辞して報われたのである。いつも慈悲の心を忘れない女神のような私に感謝したい。
（よぉーし、しばらくはこの家で休ませてもらおう。こんな美しい私に住まれるんだから家も本望よね）
屋根から二階のベランダへとうつり、窓を開けようとするが、当然のごとく鍵が閉まっていた。かといってガラスを割ると大きな音がしてしまう。この家に人がいなかったとしても、隣の家から人が見にくるかもしれないし。あまり大きな音をたてることはしたくない。
なので窓ごと外すことにした。非常識だとかそういうツッコミは聞かないことにする。だってそんなこと言い始めたら私の存在自体が非常識ってことになっちゃうし。納得のできない人にこれだけは言っておきたいのだが、なるほど確かにこの世界で私みたいな存在はちょいと珍しいかもしれない。だがしかし、私の世界ならばむしろエーテル能力を使えない生物の方が珍しいのだ。かといって私がこの世界で非常識なことをしていい理由にはならないかもしれないが……そこはそれ！　笑っとこう！
「えい」
ゴキャッ！
私は窓を掴むと上に持ち上げてレールから脱輪させる。というか捻じ曲げる。そしてベランダに窓をたてかけておく。
部屋には何も置いていなかった。これはいよいよ空き家の線が濃くなってきた。しかし意外に綺麗である。もしかしたら管理人がいて度々、掃除に来ているのかもしれない。
その部屋を出てみると長い廊下。廊下には等間隔に私が出てきた扉を含めて三つの扉があった。その扉を一つ一つ開けてみるが部屋の中はからっぽ。人が住んでいるような気配はない。
私はとことこと歩いて廊下を右に曲がる。するとまた廊下が伸び

ていて右側には一階へと続く階段。左側には二つの扉があった。廊下の先にも扉が見えて、私が来たほうと同じ造りになっているようだ。外でも見たがこの家は『凹』の形で建てられているようだ。

ふーん、いっぱい部屋があるのね。これだけあるなら一つくらい借りてもいいわよね。

見れば見るほど良い発見をした。傷が癒えるまでと言わずに、ここを活動拠点にすることも視野に入れておこう。

私は一つの部屋に入り、猫のように体を縮めて床に寝る。

今日はもうこのまま寝てしまおう。

と、その時だった。

良い発見をして浮かれていたのか、それとも単に疲れていたのか、私はその気配に気がつかなかった。

「こより、帰ってきてたのか？」

男の声がして――

ガチャ、と部屋の扉が開いた。

「え？」

扉を開けた男と私の目が合う。

「……」

「……」

身長は一七〇後半くらい、ハネ返りの多い黒髪の男。歳は一五、六くらいだろうか、私と同年代に見える。少し鋭い眼をしているが悪い人間には見えない。

これが私とそいつとの出会いだった。

もしこれが運命だとかそんなものだったとしたら私はイデアの神たちに文句を言わざるをえない。

Ｄａｎｃｅ１　其の１

春。

片桐悼矢は目を覚ました。

片桐悼矢。一六歳。私立青原高校に通う高校二年生だ。ハネっ返りの多い黒髪に少し鋭い眼をした青年。それが悼矢だった。

といっても今は春休みなので学校に行く必要もない。

時計はといえば一〇時を回ったところである。

どたんっ！　ばたんっ！　どんっ！

なんだか家の中が騒がしかった。この物音のせいで目が覚めてしまったのかも知れない。

（何を暴れているんだ、あいつは……）

この大きな建物内に住んでいるのは悼矢をいれて二人だけだ。なので悼矢には誰が大きな音をたてているのかが分かっている。

ベッドから出ると、ちゃっちゃと服に着替える。白のＴシャツに青いジーパン。それが悼矢のデフォルトな服装である。

大きな音は悼矢が着替えている間も絶えていない。

一階へと降りてみると、その廊下をばたばたとモップを持った少女が駆け抜けていった。

こよりだ。年齢は一一歳。可愛らしい女の子。くりっとした大きな瞳は歳相応の幼さが見える。肩くらいまである髪を両側で結んだ少女。ツインテールというには短すぎる髪型だが、あまり見かけないこの髪型をこよりは大変気に入っている。だからだろう、その髪型である時が多い。

「あ、悼矢ちゃん、おはよー」

こよりは悼矢に気づくとモップの手を止めた。

「おう、おはよう。朝から掃除とは精が出るな」

「んー、だって家が広いから一気に掃除しようと思ってもできないんだもの。だから小まめに掃除しておかないと」

悼矢とこよりが住んでいるのは共同賃貸を経営している建物だ。二人の両親はこの家の大家なのだ。しかし、家賃でよく旅行にでかける――というか昔から放浪癖のあったらしい両親は大家としての仕事もそこそこに年がら年中どこかへ旅立っていた。その結果なのか住んでいた人間たちも去り、今では一人も入居していない状態。とは言うものの悼矢が物心ついた時にはもう開店休業状態であったが。

その両親はといえば数年前から音信不通になってしまっている。通帳に生活費などのお金が振り込まれているので生きているのだとは思うのだが、こよりだって心配しているし電話くらいはして欲しいものである。

「朝ごはん作ってあるから温めて食べてねー」

「うーい」と適当な返事をしてリビングに入る。

「ご飯が食べ終わったら悼矢ちゃんもお掃除手伝ってよ?」

廊下からそんな言葉が聞こえてきたが、悼矢はあえて返事をしなかった。安請け合いをして今まで良いことがあった試しがないからだ。決して面倒くさいとか思ったわけではないと心の中で自分を擁護する悼矢。

食卓には一般家庭の朝食に見られるような料理が並んでいた。豪華でもなく貧相でもなく、いつもどおりの朝食。しかし一一歳の料理と侮るなかれ。身内の眼だからかも知れないがこよりの料理の腕は良いのだ。

「いただきます」と呟いて一人で食事を始める。

学生の春休みというのは気が抜けがちになるものだが、こよりにはそういった雰囲気は感じられない。それどころか休みのうちにやれることはやっておこうという感じさえ受ける。

(こよりは良い嫁になるだろうなぁ。お兄ちゃんは嬉しいよ……。まあ、嫁になどやらんがねっ!)

ご飯を呵責しながらそんなことを思う。

悼矢がだらしないからこよりが家事をこなせるようになったのか、

こよりが家事をこなすから悼矢がだらしないことになったのか。どちらにせよ悼矢は炊事、掃除、洗濯どれも満足にこなせい。せいぜい買出しに行くくらいなものだ。

「悼矢ちゃん、私お昼から買い物にでかけるから、買っておかなきゃいけないものがあったら今のうちに言っておいてねー。もうそろそろ学校始まるんでしょー？」

ところがその買い物さえこよりは自分でしようとするではないか。唯一、活躍できそうな場をとられるわけにはいかない。

悼矢は慌てて食事を終わらせ、食器を洗い場まで運んだ。

いくら生活面にだらしのない悼矢とて兄としてのプライドというものがある。しかしこのままでは兄の威厳が危うい。元からそんなものはない、という説もあるがここだけは譲れない。譲ったら兄どころか人間として駄目な奴だと認めてしまうことになるからだ。

なので悼矢は兄貴ぶった感じで言った。

「こより、買い物は俺が行くからお前は家でゆっくりしてろ」

「んー、でも……悼矢ちゃん、買い物できるの？」

「何言ってるんだ。買い物くらいできるに決まってるだろ」

悼矢とていくらなんでもそこまで落ちぶれているわけがない。

「だって悼矢ちゃんスーパーで全部買うつもりでしょ？」

「それの何がいけないんだよ」

「スーパーで全部買っちゃだめだよ。店によって安い物と高い物ってあるんだから、ちゃんと安いお店で買わなきゃ。でも悼矢ちゃんが買い物に行ったってにんじんが今日は安い～、なんて分からないでしょ？」

まったくもってその通りだ。どうやら買い物もろくにできないことが発覚してしまった。これは非常にまずい事態である。いよいよどっちが年上か分からなくなってくる。

「じゃ、じゃあ、買い物は任せる代わりに掃除は俺がやるよ。こよりは必要な物を買うついでに好きな物を買ってくるといい」

「え？　いいの？」

「ああ。たまにはこよりも休日を楽しんでこいよ」
爽やかで優しいお兄ちゃんを微笑んで存分にアピールする。
こよりはうーんと少し悩んだが、笑顔になって頷いた。
「分かった。じゃあ、掃除は悼矢ちゃんに任せるね。私、買い物に行く準備してくる」
そう言うとこよりはパタパタと自分の部屋に走っていった。
（なんとか兄の威厳は守れたか……）
額の脂汗をぬぐいつつため息を吐く。
できる妹というのはいいものだが、あまりできすぎると兄は肩身が狭くなるのだと悼矢は思う。
ぱたぱたぱた、と軽快な足音がしてこよりが階段から降りてきた。
その手にはお気に入りの赤いポーチを持っている。
「それじゃあ、いってきまーす！」
「おお、いってらっしゃい。車に気をつけろよー」
「はーい！」
こよりは跳ねるように玄関から出かけていった。手をふりふりそれを見送って、悼矢は掃除道具に視線をやった。
「よし、掃除するか」
わざと目的を口から出すことで決意を固める。こよりが帰ってくるまでに掃除を終わらして『悼矢ちゃん、凄―い！　さすが私のお兄ちゃん！』と言わせたいものである。
気合を入れると悼矢はもくもくと掃除をし始めた。

◇◇◇

夕日を見ていた。いや今の表現は正しくない。言い直そう。夕日が見えていた、と。しかも、もうあと数分で沈みきってしまいそうな夕日である。

時刻は午後六時。だが記憶があるのは午後一時頃までだ。気づくと六時になっていた。

おかしい。自分はいつの間にか時間軸の異相空間に捕らわれていたのだろうか。などと現実逃避してみる。

ちょっと休憩するつもりで畳の上に寝転がったのがいけなかったようだ。どうやらそのままぐーぐーと寝入ってしまったらしい。

しかし幸いまだこよりは買い物から帰ってきていないようだ。せめてこよりが帰ってくるまで悪あがきをしてみようと思う。そして自分が掃除したところを見て回る。掃除は目標の半分もクリアしていなかった。

（ファック！　タイムマシンがあれば五時間前の俺を殴りに行きてぇ！）

タイムマシンがあるのなら自分を殴る前に掃除をすればいいじゃないか、というツッコミは悼矢の尊厳のためにもしないであげて欲しい。

と、その時だった。

ガタン、ガタッ！

二階から物音がした。

（ありゃ？　もしかしてこよりはもう帰ってたのか？）

だとしたら悼矢が昼寝してしまっていたことがバレている確率が高い。そしてこよりにこう思われるのだ。『やっぱり悼矢ちゃんは駄目なお兄ちゃんだなぁ』と。

想像してブルブルと体が震えた。

（ああ、まずい、まずいぞ。とにかく様子を見に行くか）

悼矢は二階へと階段をあがる。すると、誰かが空部屋に入っていく後姿が見えた。

（こよりか？　その割には背が高かったような……）

それにあそこはこよりの部屋ではない。

悼矢は怪訝に思いながらもその部屋の扉を開けた。

「こより、帰ってきてたのか？」

扉を開けた悼矢は思わず固まってしまった。
なぜならその部屋には見知らぬ女の子が猫みたく丸くなって寝転がっていたからだ。
しかもその格好がちょっとおかしい。なんというか今風ではない。じゃあ昔風なのかといわれれば返答に困る。どっちかと問われれば間違いなく昔風なのだが、あまりにも昔すぎる。彼女が着ている服装はまるで中世ヨーロッパのような赤と白を基調にしたドレスだった。まるで歴史巨編の映画からそのまま抜け出してきたような格好。金色の髪がまたそんな感じを引き立てていた。しかし、彼女の着ているもののおかしさはそれだけに留まらない。なんと彼女の左腕、肩から指の先まで銀色の甲冑に包まれている。赤いスカートからのびた両足も銀色の甲冑がきらめていた。なんとも部分的な甲冑であった。
上質の金を溶かしたような長い髪は畳に広がって月光を反射していた。ちょっと吊り眼で気が強そうな風に見えるが明らかに日本人ではない顔立ちをしている。彼女も悼矢が現れたことに驚いたようで寝転がったまま悼矢を見て固まっていた。見たところ年齢は一五、六。悼矢と同年代に見える。
「な、ななな、なんなんだ、おまえ!?　どっから入っ――」
驚きのあまり声が大きくなる。
その瞬間。少女が動いた。
ふわっと悼矢の頬を緩やかな風が撫でる。
少女は悼矢の胸ぐらをガッと掴むとそのまま畳に悼矢を引き倒し、馬乗りになって片手で悼矢の口を塞いで、もう片方の手で悼矢の腕を固める。
ほんの数秒の早業であった。
「もがっ、もがもがもがっ！」
悼矢は必死に暴れるがまったく抜け出せる気配がない。
（こいつ……！　なんてバカ力だ……！）
悼矢は格闘番組をよく見るのだが、それに触発されて体を鍛えて

いた時期があった。なので力にはちょっと自信があったのだが。この少女、悼矢より腕が細いというのに力は悼矢以上とはこれいかに。

（納得できねぇ！）

ばたばたと暴れる悼矢に少女が声をかけてきた。

「ちょ、ちょっと落ち着きなさいよ！　なにもとって食おうってわけじゃないんだからっ」

その言葉を悼矢は怪訝に思い、暴れるのをやめる。格好から見るに物盗りではなさそうだ。芝居がかった怪盗という線もないわけではないが、こんな古家に盗みにくるとも思えない。

「手を離すけど大声だして騒がないでよね。いい？」

こくこくと頷く悼矢。

すると少女はすっと悼矢から離れた。

瞬間、悼矢の眼がキュピーンと光る。

ここで素直に大人しくなる悼矢ではなかった。悼矢は昔から負けず嫌いなところがあるのだ。だというのに自分の気づかぬ間に組み伏せられた（しかも女の子に）とあっては――

「黙ってられっかよッ！」

「へ？」と間抜けな声を出す少女。

悼矢は起き上がると畳を蹴って少女を組み伏せようと迫る。その行動に驚いていた少女だが悼矢の手を少女はあっさりとかわした。そしてその腕を掴むと足を払い、背中を向け悼矢の懐に入るように体勢を低くする。少女に巻き込まれるように悼矢の体勢も前になる。

（これはまさか――）

悼矢は直感でまずいと思った。

「やあっ！」

気合一発。少女は悼矢の腕を引き、そのまま悼矢を一本背負いで投げ飛ばす。

ふわっと浮遊感が悼矢を包み込み、続いてドンッと背中を鈍痛が襲った。

悼矢は押入れのふすまを破いて畳に転がる。そこへふすまに入っ

てあった布団が雪崩れて悼矢の上にどさどさと落ちた。
しーん、となる部屋の中。
少女はそれを見て、あちゃーという顔をした。
「……。あー……死んだ？」
「まだ生きてるっつの！」
少女の問いに悼矢はばさっと布団を跳ねのけて姿を現す。
「一瞬だけ気が遠くなったけどな……」
と首をゴキゴキ鳴らす。
少女は腕を組んでため息を吐いた。
「言っておくけど自業自得だからね。私は投げ飛ばす気なんてなかったんだから」
「そいつは悪かったな。こちとらやられっぱなしは嫌いな性質なんでね……」
悼矢はぱんぱんと埃を払って立ち上がった。今ので悼矢は力でこの少女には勝てないと理解した。どうにもならないなら少女がなぜこんなところにいるのかその理由を聞いてみようじゃないか。
「それで……おまえは誰なんだ？　泥棒って類じゃないみたいだが」
「あったり前じゃない！　私は誇り高きエーテルよ！？　その私がどうして盗みを働かなきゃならないのよ！」
なんだか分からないがどうやら気に障ったらしい。少女は憤慨して怒った。
「なんだって？　ディーゼル？　車？」
「違うわよっ！　私は――」
言いかけて少女は何の前触れもなく前のめりに倒れ、片ひざをつく。
「あ、おい……どうした？」
「――あっ……くっ……」
少女はお腹を押さえていた。よく見ると少女のお腹から何か液体がぽたぽたと畳に落ちているではないか。
その赤い液体を見て悼矢の顔がサーッと白くなる。

「……血じゃないか。おまえ怪我してるのか？」
「っるさいわね……。あんたがバカみたいに突っかかるから傷が開いちゃったじゃないのよ……」
少女はガシャリと甲冑を鳴らしてゆっくりと立ち上がる。だがすぐにふらりと倒れそうになった。さすがに心配になったのか悼矢は思わず腕をとって肩を貸す。
「おい、無理すんなよ……」
その刹那だった。
何の前触れもなく“それ”が襲いかかってきたのは。
――殺ス
それは単純で直情的な欲求だった。その破壊的な衝動が二人を襲ったのだ。その時、悼矢は生まれて初めて殺気というものを身に受けた。
身がすくむ。身が縮む。がくがくと震えが止まらなくなる。なぜかは分からないが恐怖している。これが本能というものなのだろうか。今すぐここから離れたい。逃げ出したい。しかし恐怖で体が動かなかった。
少女は殺気が送られてくる方向。窓の外を見た。
いる。
少女の敵。
ただ殺戮を繰り返すだけの生物。
少女はその化け物の名を吐きだすように呟いた。
「――禍魂（マガタマ）ッ……！」

Ｄａｎｃｅ１　其の２

禍魂。少女を追っていた化け物。
舌なめずりをしてこっちを見ている。あれは獲物を見る眼だ。あいつには分かっているのだ。今の少女では自分に勝つことができないのだと。
瞬間、化け物がぐっと背を反らした。すると急激に禍魂の周りをエネルギーが包む。そしてそれが口先の一点に収束していく。
（――まずいっ！　あれをやる気！？）
少女は自分の腕を持っている悼矢を見た。だが悼矢は窓の方に視線をやったままガクガクと震えているだけだ。
「避けて！」
「なんだよ……あれ……」
悼矢の視線の先。隣の家の屋根には見たこともない巨体のシルエット。あれが地球上の生物だっていうのか。いや、あれが生物であるはずがない。あんな残酷で残忍さを隠そうともしない紅い眼ができる存在が。
「避けろって言ってんのよ、このバカっ！」
少女が悼矢の横腹を蹴飛ばす。
「ぐがっ」
悼矢は蹴られてまた布団の山に顔から突っ込む。そして少女は悼矢と逆方向に跳んで倒れ込む。
その刹那。化け物が口をガパッと開け悼矢たちに向かって何かを吐き出した！
視界を光が覆い、少女と悼矢が立っていた場所を何かが駆け抜ける！
ィィィイズドゴォオオオオンッ！
凄まじい轟音と土煙が舞う。
悼矢は布団から顔をあげてあたりを見回した。そして驚愕する。

開いた口が塞がらないとはまさにこのことを言うのだろう。
まるでレーザー砲。窓は融解してどろどろになっていた。振り返ると廊下の方の壁にも穴が開いて、しゅぅ～～と白い煙がその穴から立ち昇っている。
もしあんなものを食らっていれば骨も残らず蒸発していたことだろう。
（お、おいおい……っざけんなよ……。なんだよ、これ……一体、何が起こってるってんだよ……！）
半ばパニックになって呆然とする悼矢。そんな悼矢に少女が起き上がって叫んだ。
「ちょっとあんた！　ボケっとしてないでさっさと逃げなさい！　死にたいの！？」
そんなことを言われても動けるわけがない。蹴られた痛みもあったが、恐怖で体が動かないのだ。
ふと溶けた窓からの月光が遮られる。気づけばベランダに“それ”は移動していた。巨体の割りになんと軽やかな身のこなし。それはまるで猫の俊敏さを思わせた。
（ば、化け物……！）
その姿を肉眼で見て悼矢は息を呑んだ。
あまりにも動物的な肉体。身長は二メートルはあるだろうか。その筋骨隆々の体は人を殺すために研ぎ澄まされたものだ。頭には天にはむかうように反り返った二本の角。肉を噛み千切るのに秀でた牙。そしてその肉を引き裂くための鋭い爪。背中には首から腰にかけて一筋の黒い毛がぼうぼうと生え、さらにはふさふさの尻尾が生えている。その紅い眼は少女を見ていた。どうやら化け物の目的は少女らしい。
それもそうだろう。悼矢にこんな野生的な知り合いはいない。
少女の頬を一筋の汗が流れた。
（まずいわね……。こっちは痛手を負っているっていうのにお荷物つきだなんて戦いにくいったらないわ……。でも――）

「私は最強のエーテル……！　ここでやられるほど落ちぶれてないわよ……！」

化け物が腕を一薙ぎした。

ズガァン！

それだけで壁がバラバラになって飛び散る。そしてそのぽっかり開いた穴から巨体が部屋にのっそりと入ってくる。

それに相対するは血が流れるお腹に手をあて、足取りさえ覚束ない少女。

悼矢の眼から見ても勝敗は明らかだ。おそらく少女は一撃で化け物に八つ裂きにされてしまうだろう。

化け物の口がにたりと笑みを作った。そしてよだれのしたたる鋭い牙がずらりと並んだ口を開いて人の言葉を発した。

「ぐるるぅ……鬼ごっこは終わりか？　リタ＝ルクライル……」

地の底から響いてくるような低い声だった。

リタと呼ばれた少女はぎりっと奥歯を鳴らす。そして化け物の言葉に抗うようにリタの体が発光しだした。

その仄かな赤色の光が徐々に輝きを増す。だがその光を見た化け物はハッと鼻で笑った。

「弱々しい光だな、ルクライル。その怪我がなければ俺といい勝負ができたかも知れないがな……グァッハッハ！」

「どうかしら？　あんたにはこれで充分よ」

不敵な笑みで返すリタ。だがその言葉が強がりでしかないことは悼矢でさえ感じていた。

「グハハハ！　ならば……確かめてみるか」

化け物が腕を振り上げる。

それだけで化け物の手が天井を貫いていた。バラバラと天井のクズが畳（タタミ）に落ちる。

「イデアに還れ。リタ＝ルクライル」

轟ッ！

うなりをあげて振り下ろされる化け物の爪。人間があれを受けれ

ば一瞬で肉塊へと変貌することになるだろう。その一撃をリタは顔の前にばつを作って受け止めた。

ズガアァァン！

畳がリタの足の型に凹み、パカッと割れた。

背の高い化け物が体重をかけるように少女を下に押さえつけようと力をさらに込める。

「っ……！」

それを見た悼矢は唖然とした。まるで特撮やアニメを目の前で見ているような状況。あまりにも現実離れし過ぎている。だがその現実感の無さが逆に悼矢を冷静にさせた。

（あの化け物……！　なんてバカ力だ！　あの女もバカ力だったが比じゃねぇ！　殺されるぞ！　どうにかしないと……！）

化け物の攻撃はそれで終わらない。今度は横から薙ぐようにして左拳が繰り出される。

ゴォゥンッ！

それだけで辺りの土埃が巻き上がるほどの強烈な一撃。

だがリタは畳を蹴って後ろに退がることで左拳を避ける。

（素早さなら私の方が断然に上！　なんとか避け続けて好機を呼び寄せるしかない……！）

しかし、リタはここが部屋の中だということを失念していた。化け物がリタに追撃を加えようと前に出ただけで――

（！？　しまっ、退路がない……！　追い詰められた……！）

ぶわっとリタの背中に嫌な汗が噴き出る。

「ルクライル！　これで終わりだアァ！」

化け物の強烈な右ストレートが放たれた。

本来ならその一撃でかたはつくはずだった。

「させるかぁ！」

ドンッ！

だがその時、あろうことか悼矢が化け物に体当たりをした。なんとかしなければならない、と考え思いついた方法が体当たりなのだ

から悼矢も自分で笑ってしまう。
　これには化け物どころかリタも予想していなかった。人間が自分たちの戦いに割って入るなど非常識も甚だしい。それは恐竜同士の喧嘩に割って入るようなものだ。
　化け物は不意を突かれたこともあってか、横から来たいきなりの衝撃にバランスを崩す。振るった右拳は標的を大きく反れてリタの背後にあった壁を突き破っていた。
（あのバカ……！　だけど助かった！）
　そのチャンスを見逃すリタではない。
「はあああぁぁっ！」
　リタはすっと姿勢を低くすると、全力で畳を蹴ってバック転の要領で蹴りを放った。
　そのムーンサルトは化け物の顎を直撃し、脳を揺らす！
「ぬぐぅ……！」
「もう一撃っ！」
　リタはその場でくるりと体を横に回転させて後ろ蹴りを化け物の顔面に放つ。遠心力を利用した唸りを上げるリタの脚が化け物の顔面に直撃した！
　ズガァン！
　当たった瞬間に何かのエネルギーがぶつかりあったのか、光が弾け、一瞬部屋が白くなる。
　化け物はよろめいて後ろに数歩下がる。だが頭を振ると意識がはっきりとしたのかニヤリと口を笑みに変えた。
「ククク、軽いねェ。お前が手負いじゃなく全力を出せていたらそれなりに効いたかもしれんが……」
「くっ……」とリタはお腹をおさえて膝をついた。
　ポタポタ、と紅い血が畳を彩る。
（血の出がひどくなってやがる……！　あいつ、もう限界だ……！）
　とっさに悼矢はリタの前に立って化け物と対峙した。
「!?　ちょっと、何してるのよ！　逃げろって言ったでしょ……

！」

「おい、人間。なんのつもりだ？」

助けてるはずのリタからも文句を受けて悼矢は不気味な笑みになる。

「さぁてな……。こっちが訊きたいぜ。こんな人間離れした殴り合いを見て俺の頭がおかしくなっちまったのかもな……！」

なんてちゃかしてはみるものの悼矢の内心は恐怖と焦燥で渦巻いていた。それもそのはず。こんなまともじゃない状況にはち合うなんて誰が想像できただろう。ついさっきまで昼寝なんぞして日常の生活をしていたのだ。だっていうのに次の瞬間には自分が死んでもおかしくないこの状況。もうずっと足はがくがくと震えているし、背中なんて冷や汗でＴシャツが張り付いている。

そのことに化け物もリタも気づいていた。

「……その勇気は認めてやる。褒美と言ってはなんだが楽に死なせてやろう」

「やれるもんならやってみろ！」

悼矢の足がぐっと床を踏み込む。

「だめっ！　やめなさい！」

リタの声など無視して悼矢が化け物に飛びかかった。だが――

ズガンッ！

化け物が軽く腕を払っただけで悼矢は吹っ飛んで畳に転がった。

「あっ、あがぁ……っ！」

一撃だった。あまりに大きな力の差。

悼矢が畳で痛みに苦しみもがく。

だがそれは当たり前の結果。

水が下流へ流れるのと同じように当然のことだ。人間が禍魂を傷つけることなどできはしない。

それを見た禍魂が狂ったように笑う。

闇の中で赤い眼がギラギラと光を放っている。

「ハッハッハ！　脆い……！　脆いよなァ！　見たか、ルクライル

？　軽く撫でてやっただけでこれだ！」
その言葉にリタは怒りの表情で禍魂を睨みつける。
「アンタの目的は私でしょう！　無関係なやつを巻き込まないで！」
「っ、誰が……脆いって……！？」
悼矢は腕を押さえながら立ち上がった。
「っ！　あんた！？」
「……ほう？」
化け物は少し驚いて悼矢に向き直る。
「力の差が歴然だと分かっていても立ち上がるか……。その意気込み、人間にしておくのはもったいないな……」
「あんた、何考えてるのよっ！　もうやめなさいっ！　人間が戦えるような相手じゃないのよ！」
リタが悲痛に叫ぶ。
だがそれが悼矢の我慢の限界だった。
「つるせええええええええええええええええええええええええええええーっ！！」
悼矢がいきなり天に向かって大声で叫んだ。その声は空気を震わせてびりびりと窓を揺らす。この街全体に響き渡るんじゃないかと思うほどの大声だった。
突然のことにリタだけでなく禍魂まで呆気にとられていた。
「どいつもこいつも言いたいこと言いやがって……！　自分で自分の限界ラインを引くならいいさ！　けどな！　勝手に俺の限界を決めてんじゃねぇ！」
「だが人間よ。おまえに何ができるというのだ。お前では俺に手傷を負わせることなど夢のまた夢。吼えたところでこの差は埋まりはしない」
「闘って勝てる相手じゃないことは俺も馬鹿じゃねぇ。理解してるぜ……！　でもな、逃げられるわけねぇだろ！　必死に戦って傷ついてるやつを放って逃げるなんてそんな格好悪いこと男ができるかよ！」

少女はハッと息を呑む。
いつの間にか眼が離せなくなっていた。偶然入った家で偶然出会った男はとてつもなく真っ直ぐな男だった。
彼が持つその眼光は未知の化け物に見下ろされていてるにも関わらず衰えていない。
普通の人間ならなりふり構わず逃げ出してしまうほどの恐怖のはずだ。それをこの男は自らの意志で跳ね除けていた。
その意志の力を禍魂も気づき始めていた。
まじまじとこちらを睨んで見上げる人間の眼を見てしまう。
（なんなのだ、この男は……。圧倒的に不利な立場にあるというのに……！）
禍魂にとってこんな人間は初めてだった。どれだけ殴っても、どれだけ牙で引き千切ってもこの男は立ち上がってくる。そんな不気味な予感にまで囚われる。
（いや予感ではない……！　この男は……！）
（私は思い違いをしていた……！　禍魂の言うとおり人間は儚く弱い。その肉体を壊すことは私たちにとっては容易かもしれない。でも、人間の心は……魂は……！　人間というのはこんなにも――
――こんなにも強い！）
ぐっと握った拳を胸にあてる。
力が沸く。何か言葉で表せないものが体の奥底から込み上げてくる。
（立たなくちゃ……！　立つのよ、私！）
少女は足を叱咤した。
自分を見上げてくる一対の眼光。
それから逃れるように禍魂はついに一歩退いてしまう。そして体が動いてから自分が後ろに下がったことに気づいた。
（恐れてる……!?　禍魂の俺が!?　人間ごときに!?　片手で握りつぶせるというのに!?　こんなことがあってたまるか！　あってなるものか！）

恐怖を振り払うかのように化け物が腕を振り上げた！
（潰してくれる！）
次の瞬間に待ちうけるのは確実な悼矢の死。
だが悼矢の表情は変わらない。
禍魂と悼矢の視線が真っ向からぶつかり合っていた。
（だめ……！）
殺されてしまう。自分の目の前で。禍魂を傷つける力もないくせに立ち向かった人間が！　自分を守ろうとした人間が……！
（嫌だ……！　力が欲しい……！　守りたい……！　彼を守りたい……！　殺すなんてそんなこと……！）
「――させないッ！」
刹那！　部屋の中に光が溢れた！
リタが畳を蹴って禍魂へと肉薄した。
「なっ！？」
背後からの逆るエネルギーに驚く禍魂。そして振り返るとそのエネルギーの塊がすぐそこまで迫っていた。
ドガアアアアアアアアアアアアアアアン！
禍魂の視界が地震でも起こったかのように激しく揺れた。
禍魂の大きな体が吹っ飛び、畳を引き剥がし壁を突き破って隣の部屋へと吹っ飛んでいく！
禍魂の巨体は隣の部屋の押入れをぶち破ってやっと止まった。
遅れて畳が細切れになったものが中空をふわふわとただよって床に落ちる。
辺りをもうもうと土煙が覆っていた。
禍魂は一体、何が起こったか理解できなかった。どうやら自分は殴られたらしいということだけが頬の痛みからやっと理解できた。
リタは拳を振るったままの格好で立っていた。その拳からはしゅ～～っと白い煙が立ち昇っている。
リタも自分が何をしたか理解できていなかった。なぜこれほどの力が出せたのか。何かに突き動かされるように気づけば禍魂を殴り

飛ばしていた。
そしてふとその光に気づく。
「この光は……？」
発光しているのはリタの右肩であった。リタがドレスをめくると肩の部分に奇怪な紋章が刻まれていた。エーテル個別に存在する紋章。発光しているのはその紋章だった。
（私の紋章が……反応している？　まさか……！）
リタは驚いた表情のまま悼矢に視線をやった。
化け物は押入れに埋まった体を起こしてチッと舌打ちした。
呆然と事の成り行きを見ている悼矢にちらりと化け物は視線をやった。
注目を受けている悼矢はといえばその場で尻餅をついてぽかーんとしていた。
リタと禍魂が気がついたのは同時だった。
（こいつ……エーテル使い……！）
「あの男……エーテル使いか……！」
リタが禍魂に向き直り、悼矢の前に立ち塞がる。
まるで主を守る騎士のように。
できると思った。今なら呼び出せるとリタは思った。こちらの世界に来てから一度も呼び出すことのできなかった彼女の武器。
右手のひらを天に掲げる。部屋の中を暴風が渦巻く。その強風にあおられ悼矢は両手で防いだ。
「なんだよ！　今度は何が起こってんだよ！」
そんな悼矢を無視してリタはその名を呼んだ。
「来なさい！　アルデヴァイン！」
光が剣の型を作っていく。
でかい。
大剣の中でも相当大きな部類に入るだろう。リタの身長よりも長い上に、重量的にもリタの体重よりあるだろう。リタの細い腕で扱えるのか疑問に思えるほどド級の大剣。だがその大剣をリタは軽々

と振り上げている。大剣の装飾など細部は光に包まれていて分からないが業物だというのは間違いない。いや業物なんてものではない。リタの大剣は輝きと共にそれだけの存在感を放っていた。

「ぐるるぅ……」

化け物は唸り声をあげて一歩さがる。一瞬で力関係はくつがえっていた。化け物も不利になったことを理解していた。

（こうなってしまっては仕方がない……！）

禍魂は隣の部屋の窓を突き破って外へ飛び出す！

リタはキッと化け物を睨んで叫んだ。

「逃がすか！　一瞬で滅びなさいっ！　アルデ・ブレイバアアッ！」

リタが大剣を化け物に向かって振り下ろすと光と風の濁流が大剣から放たれて化け物を飲み込む！

キュゴォオオオオオォォォォォォォォォンッ！

「るぐぉおうぁあああああっ！！」

その光は化け物を飲み込む。化け物だけでなくリタのすぐそばのベランダをも吹き飛ばしている。なんという破壊力。片桐家から光が一筋、空に向けて放射されていた。

悼矢は尻餅をついたままその光景に見惚れていた。

光り輝く大剣から光の波動を放ち、金色の髪を揺らす凛々しい少女の姿を見て、こんな異常な状況の中、悼矢は彼女を美しいと思ったのだった。

光がおさまるとリタが大剣を振り下ろしたままの格好で立っていた。その手の大剣が光の粒子に分解されていく。

「流石にエーテル化するまでにはいたらなかったわね……」

リタは手から消えていく大剣を見て呟いた。

「……倒したのか？」

悼矢は痛む腕を押さえながらリタの元まで歩いていった。

化け物の姿は空にない。

「逃げられたわ……。でも深手を負わしたから当分は出てこないは

ずよ」
　悼矢はほっと胸を撫で下ろす。あんな化け物とはできれば二度と関わりを持ちたくないところだ。
　リタはくるりと振り返って悼矢を見据えた。
「ところであんた……名前は？」
「俺は片桐悼矢。おまえはリタ……だったか？」
「ええ、そうよ。ふーん、トウヤ……ねぇ」
　リタは悼矢を上から下まで観察する。まるで品定めをしているようだった。そんな視線で見られて少し悼矢の体が固くなる。
「な、なんだよ？」
「私の紋章が反応したのは間違いないし……。うん、決めたわ」
　何か納得したようにこくりと頷く。
　リタは改めて悼矢に向き直り、コホンと咳払いをした。そしてとんでもないことを平然と言い放った。
「トウヤ。あんた、今日から私のご主人様だから」
　数秒間の沈黙。
　悼矢がかろうじて言えたのは
「……は？」という疑問の言葉だけだった。

Ｄａｎｃｅ１　其の３

「だからあんたは私の主になるの。そしてさっきの化け物と戦うのよ」

リタの眼は軽口で返せないほど真剣だった。

（何言ってんの、こいつ。今、戦うって言ったか？　俺が？　あの化け物と？）

さきほどの禍々しい存在を思い返す。まさに化け物と呼ぶに相応しい存在。その体のどの部分もが人間を殺すために作られた凶器のような存在。

あれはまるで人間の天敵のようだった。

「冗談じゃねぇ！　さっきみたいなのはもうこりごりだ！　命が幾つあっても足りないっての！　それに何で俺なんだよ！？」

「理由は簡単よ。私の紋章が反応したから。私たちエーテルは主人にふさわしい人間を探している。エーテルを超えた上位存在になるためにね。この紋章はその探知機みたいなもんなのよ」

リタは右腕の肩にある紋章を見せた。その細く白い華奢な肩には確かに奇怪な赤の紋章が刻まれている。

「紋章があんたを選んだ。それは私があんたを選んだってことよ。光栄に思いなさいよ」

「ああ、光栄だね。光栄すぎて俺の身には余りそうだ」

悼矢は関心がなさそうに肩をすくめてみせる。

しかしリタとしてはここで悼矢を逃がすわけにはいかない。やっと見つけたエーテル使いの素質がある人間なのだ。

「とにかくさっさと契約しましょ」

近づいてくるリタの肩を悼矢は掴んで止めた。

「待て待て。俺は一言もおまえの主とやらになるなんて言ってないぞ。つか、この惨状を作っておいて他に言うことはないのか！　まずはおまえが何者であの化け物がどうしておまえを狙ってるのか、

そのあたりを説明したらどうなんだ！」
　リタは半壊した部屋を見回した。そしてポリポリと頭をかく。
「あー、まあ、これは悪かったとは思っているわよ。まさかここまで追ってこられるなんて予想の範囲外だったわ。でも命を救って貰った代償だとすれば安いものじゃないかしら」
　そうしれっとした感じでのたまう。
「助けてもらったことには感謝してるさ。だけどあの化け物はおまえを狙ってきたんだろ。なら俺はただ巻き込まれたってことじゃないか。これ以上関わりを持つのはごめんだっての！」
「ふーん、それは残念。
　でもね、どっちにしてもあんたはさっきの化け物に姿を見られているのよ？　それにあいつは私の主があんたになることも予測するだろうし。例えあんたが関わるのを嫌がっても向こうから接触してくるわよ。
　ああ、ちなみに接触っていうのはもちろん殺しにくるってことよ。つ・ま・り、あんたの最善策は私と契約して私に守ってもらうことってわけ♪」
　音符マークなど言葉の最後につけて笑うリタに悼矢の体はくらりと傾ぐ。
「……。……最悪だな。目眩がしてきた」
　頭をおさえつつ悼矢は唸った。
　と、その時だった。
『ただいまー』
　がらがらと玄関の引き戸が開く音。こよりが帰ってきたのだ。
「まっずい！　こよりだ！」と悼矢の顔が焦りに染まる。
　どたどたっ！　がしっ！　ばさっ！
「えーっと、何してるの、それ」
　あたふたと慌てて畳の剥がれた床に布団をひき始める悼矢を見てリタは怪訝な顔で尋ねた。
「見て分からないか！？　畳が吹き飛んだとこを隠してるんだよ！

ああ、くそっ、いつからこの部屋はフローリングにリフォームしたんだ！」

そんなことをしたところで窓やベランダはぶっ壊れているし、壁には隣の部屋へと続く大穴が穿たれているのだからこの惨状自体はどう足掻いても隠しようはないのだが。

そんなパニクりながらも隠蔽工作に必死になっている悼矢を見てリタはやり過ぎたかな、と頬をかいた。

「それで、こよりっていうのは誰？」

「俺の妹だよっ。買い物にでかけていたんだが帰ってきたらしい……！　ああ、まずい。まずすぎる。まずすぎ、やばすぎ、やりすぎの三冠王だ」

こよりのおかんむりな姿が容易に眼に浮かんだ。

「妹……？　ちょうどいいわね。挨拶してくるわ」

リタは部屋の扉を開けて出て行こうとする。それを悼矢は後ろから羽交い絞めにして止めた。

「こらこらこらっ！　どこ行く気だ、おまえ！」

「どこって……だからアンタの妹に挨拶をしに――」

「行くなよ！　ちったぁ自分の格好を考えて行動しろ！？」

『悼矢ちゃん？　二階にいるの？』

とっとっと、とこよりが階段を昇ってくる足音。もうあまり時間はなさそうだ。

「とにかくおまえはここにいろ！　絶対にこの部屋から出るなよ！」

ときつく言い聞かせる。

「ちょっと待ってよ。風が吹き抜けて寒いんだけど。それに雨が降ったらきっとびしょびしょになるわよ」

リタは窓際の屋根を見た。そこからは月が綺麗に見えている。

「知るか！　おまえがやったんだろ！」

悼矢はリタの文句に文句で返して扉を開け廊下に出た。

悼矢が廊下に出たのとこよりが二階に上がってきたのは同時だった。

こよりは悼矢を見つけると駆け寄ってきた。
「お、おかえり、こより」
悼矢は笑顔に見えなくもないひきつった笑みをつくる。
「ただいま、悼矢ちゃん。空部屋で何してたの？」
悼矢は背中で部屋の扉を隠していた。それをこよりは体を横に折って覗くように扉を見る。
その時、ガタンッと部屋から音がした。
（あのバカ……！　バレるだろうが！）
「いや、別に何でもないぞ。それより買い物はどうだった？　いい物買えたか？」
悼矢は背中で部屋の扉を押しながら話題を変えてこよりの意識をこっちに集中させる。
「えへへー、見てー。この服、気に入ったから買ってお店で着替えちゃったんだ」
こよりは春物のワンピースを着ていた。くるりと回転すると、それにあわせてスカートがふわりとひるがえる。ちょっとスカートが短い気がするが明るいこよりによく似合っていた。
「ああ、よく似合っているな。可愛いぞ」
「えへへー」と照れたように頬を赤くするこより。
「へぇー、あんたの妹とは思えないわね」
不意にリタの声がした。だが扉は悼矢が背中でおさえているので開くはずがない。
（一体、どこから見てるんだ、あいつ！）
「今……女の人の声が……」
こよりが周りを見回して、ある一点でびくりと止まる。悼矢もこよりの視線を追って理解した。
そこには穴が開いていた。化け物が放った光線で開いたあの穴だ。
リタはそこから顔をだしてこちらの様子を見ていたのだった。
「ふわぁー、綺麗な人……。悼矢ちゃん……この人、だれ？」
「だ、誰なんだろうな。お兄ちゃんにも分からん」

悼矢はあさっての方向を見てこよりの視線から逃れた。
リタは穴からひょいと廊下に出てきて、にこりと爽やかに微笑む。
「初めまして。私はリタ＝ルクライル。お兄さんの友達よ」
凛とした声でそう言って右手を差し出す。
「あ、はい。初めまして。片桐こよりです。兄がお世話になってます」
こよりはちょっと戸惑っていたが、照れながらリタと握手する。
「お世話するのはこれからだけどね」
ぼそりと呟いてリタはこよりの頭を撫でた。するとこよりはくすぐったそうに眼を細めて笑う。人見知りの激しいこよりがすぐ他人に心を許すのは珍しいことだ。
と、そこでこよりは何かを思い出したかのようにリタが出てきた穴を見た。
「……」
無言で穴を見つめているこより。
「……ごくり」と悼矢の喉が鳴る。
「……」
無言のままこよりは悼矢を見た。
「……あ、あの穴はだな、こより！　なんていうかその……非常口？」
「……。入り口と同じ方向に非常口を作っても意味がないと思うの、悼矢ちゃん」
こよりは天使のような笑顔だった。あまりにもにこにこしているので逆に怖い。というか悼矢はこよりの額に青筋がたっているのを見逃していなかった。
「悼矢ちゃん、ちょっとそこどいてくれないかな？」
静かに優しく大地母神のように慈愛に満ちた声で言うこより。
「あ、いや、しかしだな、この部屋は何というか――」
じりっと迫られて悼矢の背中と扉がぴたりと張り付く。
「――いいから、どけ」

地の底から響くような声とともにこよりの眼がすっと細くなる。
「……ド、ドウゾ」
悼矢はホテルの案内係の人みたく道を譲った。
（ひさしぶりのブラックこより降臨……）
悼矢の体は恐怖でがくがくと震えていた。
ガチャ。
こよりが扉を開けてその惨状を見た瞬間。
「……ふ」
ぽてんとこよりは横に倒れた。
「あら、気を失っちゃったわよ、トウヤ」
「うぅ……眼を覚ましてからが怖い……」
眼の幅涙をどばーっと流す悼矢と泡をぶくぶくと吹いて白目になっているこよりを見て、リタは流石に悪いことしたと改めて反省するのだった。

◇◇◇

しばらくして片桐家の食卓には悼矢、こより、そしてリタの三人の姿があった。
ちなみに悼矢はこよりにこってり油を絞られたせいで肩身狭そうに小さくなっていた。
「へぇ～、こよりは料理が上手なのね。これとてもおいしいわ」
「うん。私、料理には自信があるんだ。こっちのも食べてみて」
なんだか和気藹々と団欒風景が目の前に広がっていて悼矢は非常に気に食わなかった。いや団欒自体はもちろん悪いことではないし、むしろ一人で食事を済ませてしまう家庭の多い今の日本には見習って欲しいくらいだ。ただそこに無関係な人間が入っているのが悼矢にとって気に食わないだけだった。その無関係な人間（いや人間じ

ゃないのか）とはもちろんリタのことなのだが。
（なんでこよりはあいつの格好にツッコミを入れないんだ……。ドレスの上に甲冑だぞ、甲冑！　おかしいだろ、どう考えても！　しかもずっとリタと話してるし！）
がつがつがつ、とまるで八つ当たりするかのようにご飯を口の中にかき込む。
「こより、ご飯おかわり！」
何だか楽しそうに談笑しているのを割って入るようにことさら大きな声で言って、こよりに茶碗をさしだす。
だが、こよりはにこりと微笑んで
「自分で入れたら？　悼矢ちゃん」
ガクガクガクガク……！
悼矢は震える手で茶碗にごはんをもりつけた。
「リタさんは日本人じゃないみたいですけど、どこの国の人なんですか？」
「あー、そうね……えーっと何て言えばいいのかしら……」
リタは困った表情で悼矢を見た。その視線が『助けなさいよ』と言ってるのは明らかだった。さすがに『異世界から来ました』とは言いにくいようだ。が、悼矢はキッとリタを睨むだけだった。
「遠い国なんですか？」
「え、ええ、そうね。とても遠いわ。……とてもね」
「どんな国だったんですか？」
「ん～～、そうね。自然が多くてとても活気がある国よ。こう……丘の上にのぼると街が見渡せてね。……とても綺麗だったわ」
感慨深そうに遠い故郷に想いを馳せるリタ。
「へぇ～～っ」
他国に興味があるのかこよりはリタの話に興味津々だ。食事をする手も止まっている。その時、ふと何か思いついたようにこよりは顔をあげてとんでもないことを言いだした。
「あ、そうです！　今日、泊まっていったらどうですか？　うちお

部屋ならいっぱいありますし！　リタさんの国のお話も聞きたいですし！」

「お、おい、こより……！」

止めようとした悼矢の言葉を遮ってリタは頷く。

「それはいいわね！　お言葉に甘えさせてもらうわ」

「やった！」とこよりは大喜びだ。

なんてこった、と悼矢は頭を抱えた。どんどん悪い方向に話が転がっている気がする。こよりはリタを気に入ってしまったようだ。だがリタと一緒にいるということは危険がすぐそこにあるということだ。こよりを危険にあわせるわけにもいかない。

（ああもう……どうすりゃいいんだ……）

“判決・おかず抜き”というこよりの必殺技を受けた悼矢は涙を流しながらひたすら白ご飯を口に含むのだった。

Ｄａｎｃｅ１　其の４

「ごちそうさまでした」
「ごちそうさま」
「はい、お粗末さまでした」
悼矢とリタが完食したのを見てこよりは笑顔をみせた。そして三人分の食器を回収すると台所に持っていって洗いはじめる。食事を作る、食べる、食器を洗うというのはこよりにとって一連の動作となっている。もとから綺麗好きな性格なので彼女は食べ終わるとすぐに食器をぴかぴかに洗ってしまうのだった。
そんな妹の様子を見ながら悼矢は身を乗りだし小声でリタに問いかけた。
「それで……おまえ、これからどうするつもりなんだ？」
するとリタも身を乗りだしてきて悼矢と同じように声のトーンを低くして答える。
「どうって決まってるわよ。あんたと契約して禍魂と戦うのよ。言ったでしょ」
リタの眼は真剣だ。
「禍魂――あの化け物と戦う、か。俺はごめんだからな」
「あんたは私をサポートしてくれるだけでいいのよ？」
「いやいやいや、サポートなんて簡単に言うなよっ！　普通の人間なんだぞ！」
「あんたがこよりに危険が及ばないかって心配してるのは分かってるわ。
大丈夫。私が守るわ。あんたもこよりも」
「うーむ、それなら……なんてあっさり了承すると思ってんのか、このバカ！」
「バ、バカァ！？　武器も持ってないのに禍魂の前に立ったアンタに言われたくないわよ、このドバカ！」

「んだと、この……！」
悼矢がむんぎゅとリタの頬っぺたを掴む。
「にゃによ……！　ひゃるっての！？」
それに対してリタも悼矢の頬っぺたを捻りにかかる。
どたっばたっ……。
「さ、さっさとはにゃしなさいよ……！」
「そっちこそはにゃしたらどうなんだ……！」
「ど、どうしたの？　悼矢ちゃん、リタさん。頬っぺたつねりあったりして……」
食器を洗い終えたらしく、こよりはこちらにやってきていた。
「あ、いや、何もないぞ！　そ、そうだ、こより！　もう風呂沸いてるんじゃないか？　先に入ってきたらどうだ？」
「そ、そうね！　先に入ってきなさいよ、こより！」
悼矢とリタは相手の頬からさっと手を離すと『それがいい』と頷きあいながら風呂をすすめる。
「そ、それじゃあ先に入ってこよう……かな？」
二人の押しを怪訝に思いながらもこよりはリビングから出て行こうとして、ふと立ち止まる。
「あ、そうだ。お風呂に入る前にリタさんの部屋、案内しておきますね」
「そ、そうね。お願いするわ」
リタは何か言いたそうにちらっと悼矢を見たが、結局何も言わずこよりと一緒にリビングを出て行った。
（結局、ちゃんとした説明をしてもらってないじゃねーか……）
ふぅー、と長いため息を吐いて悼矢は机を突っ伏した。

◇◇◇

こよりがお風呂に入ったのを確認すると悼矢はすぐにこよりの部屋へと出向いた。深い話をするなら今しかない。

コンコン、とノックする。

「俺だ。話があるんだが、いいか？」

『開いているわ。入って』

悼矢が部屋の中に入ると、リタは服を着替えていたらしく赤と白のドレスをたたんでいるところだった。寝台には銀色の甲冑が乱雑に積み重ねてあった。さすがに甲冑を着けたまま寝ることはしないようだ。

「って、おまえ、その服どうしたんだよ」

リタはへそ丸出しの黒のタンクトップにジーンズの短パンというラフな姿だった。短パンからは白く長い足がすらりと伸びていて何だか艶かしい。

「こよりに貸して貰ったのよ。戦闘服で寝たらしわになっちゃうじゃない」

「ああ、こよりの服だったのか。道理で……」

サイズが小さいせいかリタの体にぴっちりとフィットしていた。リタの体のラインが鮮明に浮き出ている。特にジーンズの短パンに関してはお尻のラインがはっきり見えていて放送ラインぎりぎりだった。

そんな際どい服装に思わずごくりと悼矢は生唾を飲んでしまう。

「で、話ってなに？　私と契約する気にでもなったの？」

話をふられて悼矢は慌てて頭を切り替えた。

「それも含めて話をしにきたんだ。だけどその前に、ほら」

悼矢はリタに包帯を投げてよこす。リタは包帯をキャッチしてそれを見つめ、にやりと意地悪そうに笑った。

「ふふーん、心配してくれたんだ？」

「ああ、まあ、その……なんだ。腹の傷が開いちまったのは俺にも原因があるみたいだからな……」

悼矢はあさっての方を見ながらポリポリと頬を掻く。

「謝りたいのなら素直に謝ればいいのに……。不器用な男ね」
ぼそりとリタが呟いた。
「あん？　なんだって？」
「なんでもないわよ。
包帯、助かるわ。それで悪いんだけど巻くの手伝ってくれる？
一人で巻くのは面倒なのよ」
「はいはい。ほら包帯かせよ」
包帯を渡すとリタは悼矢に背中を向け、タンクトップを胸元までめくり上げる。きゅっとしまったウェスト、その白く綺麗な肌に思わずドキリとする。それに本当にあんな大剣を振れたのかと疑いたくなるくらいに腕や肩が細い。リタは気に食わない女だが、美人だ。どきどきしないわけがない。だが――
「後ろを向いてたら傷口が見えないし巻きにくいんだが……」
「っるさいわね。前からは恥ずかしいでしょ！？」
気づけばリタの耳が真っ赤になっていた。
確かに考えてみれば前から巻くとお互いの視線が間近でぶつかり合うわけで。想像するだけでも悼矢は気恥ずかしい気持ちになった。
仕方なく後ろからリタの体の前に手を回して包帯を巻き始める。手探りなだけに少し手間取る。リタに近づくといい匂いが鼻をくすぐった。
（性格は乱雑なのにちゃんと体の手入れはしてるんだなぁ）
と妙に関心してしまう悼矢。
「ちょ、ちょっと……！　鼻息が首筋にあたってこそばゆいんだけど……！　あんた、いやらしいこと考えてるんじゃないでしょうね！？」
「か、考えてねぇよ！　つか、嫌ならこっち向けよ！　包帯巻きにくいんだよ！」
「……分かったわよ」
むすっとした感じで振り返るリタ。その顔はりんごのように赤くなっていた。

「なによ」と上目遣いに睨みつけてくる。
「なんでもねぇよ」
悼矢は包帯を巻くことに集中した。でなければ何かが弾けてしまいそうな気がした。
「よし、これでいい」
包帯をピンでとめてリタから離れる。
「……。……ありがと」
ぼそりと呟く。いつになく殊勝な態度だった。そんな恥ずかしそうなリタを見てむくむくと悪戯心が悼矢の中で膨らんだ。
「しかしなんだな。おまえ……意外に胸小さ――」
瞬間、リタの眼がすっと鋭くなった。そしてぐっと体勢が低くなったと思ったら右拳が下から上に伸びてきて――
ゴッ！
鈍い音をたててリタのアッパーが悼矢のあごにクリーンヒットしていた。
「ぎょべっ！」
リタの怪力にたまらず吹っ飛び、床に大の字になって倒れる悼矢。
「最っ低！　あんたにはデリカシーってものがないわけ！？」
リタは握った右拳をぷるぷると震わせて怒りをあらわにしている。放っておいたら追撃もといトドメをさしかねない。
どうやら彼女の胸に関する話題は地雷だったようだ。
「い、今のは俺が悪かった！　だからおまえのバカ力で考えなしに殴るのはよせ！」
床を這ってずりずりと後ろに下がる悼矢。その様は映画なんかでよくある必死に命乞いをする人そのものだ。
「まったく……人を暴力女みたく言わないでよね」
鼻息も荒くどさっとベッドに腰をおろすリタ。
「で、話があるんでしょ？」
「ああ、そうだった。ここに来たのは他でもない。色々と説明して欲しいんだ。おまえが一体何なのか。そしてあの化け物が何なのか

な。それくらいはしてくれるんだろ？」
　悼矢は部屋の隅に置いてあった椅子を引っ張ってきて座る。
「もちろん。私の主になるんだから知っておいてもらわなくちゃ困ることだし」
「ならねぇよ！」
「はいはい、そうだったわね。それじゃあ、何から話そうかしら」
　あごに人差し指をそえ考えるそぶりを見せる。
「まずはおまえのことから聞きたいな。エーテルとかいう存在についてだ」
「ＯＫ。あんたも分かっていると思うけど私は人間じゃない。この世界の住人でさえないわ」
「だろうな。薄々は気づいていたさ。漫画は好きだが、俺自身が異世界の住人に会うなんて設定で巻き込まれることになるなんてな。自伝にでもして売り出してみるか？」
「ちゃかさないで真剣に聞きなさいよ」
　じとっと睨まれる。
「……悪かった。続けてくれ」
「私のいた世界は人間に“イデア”と呼ばれているわ。名前の由来は――」
　悼矢はイデアという単語に聞き覚えがあった。何か考え込むように顎に手をあてる。
「イデア論……。――プラトンか」
「……驚いたわね。思っていたより馬鹿じゃないみたいじゃない」
「……お前が俺をどういう風に見ているか理解できたよ」
「あははは、まあ私があんたをどういう風な眼で見てるかはおいて、話を戻すわよ。
　哲学者プラトンが唱えたイデア論。この提唱はこの世界の真実を暴いているのよ」
　イデア論。哲学者プラトンが提唱した一種の世界の見方だ。プラトンはすべてのものに“一つの真”つまりイデアがあるというので

ある。
「だけどイデア論ってなんだ？　名前は知っていたが内容は知らないな」
「そう。なら分かりやすく説明しましょ」
リタは紙とえんぴつを持ってくると紙に三角を書いた。そして悼矢に三角を見せる。
「ここに今、三角があるわね。誰がどう見てもこれは三角よ」
こくこくと頷く悼矢を確かめてリタは紙に書いた三角を消しゴムで消した。そして再び紙を見せる。
「この紙の上から三角という存在は消え去った。でもあんたは三角がどういう形をしているのか、どういう性質のものなのか分かっているはずよ。三角を書いてみて」
言われ悼矢は紙にリタと同じように三角を書いた。
「今、どうしてこれが三角だと分かったの？」
そう問われて悼矢はぽかんとした。どうしても何も“三角”とはこういうものだ。三つの辺で作られた図形。
「どうしてって言われてもな……なんでだ？」と悼矢は頬を掻く。
「その理由がプラトンのいうイデア論なわけよ。この世には“一つの真”が存在する。“三角”という概念……イデアが存在するからあんたはこの紙に三角を書くことができたってこと。つまり、あんたはイデア界から“オリジナルの三角”をコピーして紙に三角を描いたってことね」
「ふーむ、“一つの真”……。オリジナルの存在か。哲学者ってのはよくこんなものを思いつくもんだよな」
悼矢は腕を組んで考え込む。哲学者のように物を色んな方向から見て考え、それを理屈にして証明することのできる人間などそういないだろう。
「でもここからが本題よ。確かに人間たちが考えたイデアはそこまでだわ。でもイデア界をこういう考え方もできないかしら？　イデア界には現界で想像できるものすべてが存在する、と」

リタのその言葉に悼矢はぴんときた。
「なるほど、そうか……。イデアにあるものを現界にコピーしているっていうなら、逆に考えて現界で考えられるものはすべてイデアにはあるってことになる！」
「そう。イデア界はオリジナルを現界にコピーしているわけじゃなく、現界の想像が実物として創造される世界。それがイデア界の真実よ」
「それじゃあ、もし俺が“こんな空飛ぶ車があればいいなぁ”と想像したら……」
「今頃イデア界ではあんたが想像した通りの空飛ぶ車の概念が創造されているでしょうね」
何か感入るものがあったのか、悼矢はぎしっと椅子の背もたれに深く身を預ける。
「それがイデア界。おまえが住んでいた世界か。なんて世界なんだ……」
もし事実だとしたら素晴らしくもあり、恐ろしいものだ。なにせ頭で思い描くだけでそれが存在するという概念が出来てしまうというのだから。
「そしてイデア界にはそのシステムを可能にする不思議なエネルギーで満ちている。それがエーテル・エネルギーと呼ばれるエネルギーよ。エーテルたちは皆、その特徴ともいえる何らかの“能力”を持っているの。私たちがエーテルと呼ばれるのはエーテル・エネルギーを変換して“能力”として発現できるからなんでしょうね」
「ちょっと待てよ。そのエーテルのおまえがどうして現界にいるんだ。本来ならイデア界にいるはずなんだろ？」
「その疑問ももっともだわ。だけどこの答えは至極単純なものよ。私たちエーテルが現界に訪れている理由、それは現界に行かざるを得なくなったから」
「行かざるを得なかった……だと？」
悼矢の眉が怪訝そうに曲がる。

「元々、エーテルは現界に対する憧れを持っているの。なんたって現界には人間がいるもの。エーテルたちはみな強さにこだわるわ。それがイデアでの一種のステータスになっているから……。イデアでは強くないと何もできない。弱い者は虐げられて搾取される……そんな弱肉強食の世界なのよ。だから強くなりたい……いいえ、生きるためには強くならなきゃならない。ここで出てくるのが人間たち。無意識とはいえ人間はイデア界を動かすことができる。エーテルにできなくて人間にできる唯一の特徴。それはエーテルに多大な影響を与えることができるってことよ。エーテルは人間と契約することで強くなれるのだから現界に行き人間と契約し、更なる強さを手に入れたいと思うのは当たり前よね」

「エーテルたちが現界にくるのは自分と契約する主を見つけるため、ってことか……」

「それが理由の一つでもある。だけど最も重要な理由は人間――詰まる所の自分の主になるかもしれない人間が殺されるかもしれない状況になったからよ」

「おっと、ここで化け物の登場か。たしか禍魂だったよな」

「ええ。禍魂たちはまるでそれが当たり前であるかのように人を襲う……。そうしなきゃいけない、と……まるで何かにそう迫られているみたいにね」

何かを思い出しているのかリタの表情が沈み込む。

「禍魂が人間を襲うのに何か特別な理由があるってことか？」

だが悼矢の問いにリタは首を横に振る。

「分からない。やつらに何の目的があって人間を狙うのか。何か理由があるのか、それともただの気まぐれなのか……。何にしてもやつらがエーテルにとって、もちろん人間にとっても敵であることに間違いはないわ」

「気まぐれで狙われたんじゃかなわないぜ。

まとめるとエーテルは禍魂が人を殺すのを防ぐために……強いては自分の主になる人間が殺されないために現界へと訪れた、と。筋

は通ってるな。だけど、この世界にどうやってきたんだ？　そんな簡単に世界を渡れるもんなのかよ」

悼矢のその問いにリタはポリポリと頭を掻いた。

「うーん、それに関しては私もよく分からないわ。これが行きたいと思ったら着いてたのよね……」

「んな、適当な……」

悼矢は呆れてしまう。

「でも事実なのよ。気がついたらこの世界に来ていたから詳しいことは私には分からないわ。それ以外に何か質問は？」

言われて悼矢は一番訊きたかったことを口にした。それはおそらく直に自分と関係のある質問。

「禍魂が言っていたエーテル使いってなんだ？」

「エーテル使いはエーテルと契約した人間、もしくはできる人間のことよ。エーテル使いはエーテルをサポートして共に戦うのが役目……なんだけど、私はあんたに迷惑をかけるつもりはないわ。もちろんこよりにもね。契約さえすればエーテルとしての格は飛躍的に上がる。それだけで充分よ」

どちらにせよ悼矢は禍魂に見られている。例えリタがこの家から去っても悼矢を襲うかもしれない。悼矢の選択肢はもう既に一つしかないのだ。それでも――

「それでもそんな簡単に主になんてなれるかよ」

エーテル使いとしての契約。それは日常を捨てることと同意義だ。いくらリタが迷惑をかけないとは言っても、いつエーテルの主となった自分に火の粉が降りかかってくるとも限らない。そして自分の性格から考えても契約したら関わらざるを得なくなるだろう。禍魂がなぜ人を襲うのか。そしてリタが本当は何をしたいのか――

悼矢は気づいていた。まだ会って間もないがリタはただ強くなるというそれだけのためだけに世界を渡ってくるような奴ではない。元々、最強を自負しているエーテルだ。イデアでも生きるだけなら何とでもなっただろう。だというのに現界にきた。おそらく何か強

くならなければいけない理由があるのだろう。それもリタの様子からしてかなりさし迫った理由。しかしそれを訊くのはまだ早いように思えた。

（ま、話したくなったら話すだろう……）

「私が無理を言っているのも分かってるわ。だから強制はしないし、あんたの意思は尊重する。でもよく考えてみて。こんなことを言うのは卑怯かも知れないけど禍魂は現界にどんどん増えてる。止めなくちゃいけない。誰かが戦わなくちゃならないのよ」

一拍おいて悼矢は言った。

「……あんまり良い返事は期待するなよ」

「いいえ、期待しているわ」と信頼の眼差しで見つめてくる。

悼矢は苦笑すると、部屋から出た。もうそろそろこよりが風呂から上がっているころだろう。

廊下に出てもリタとした話が悼矢の頭の中をぐるぐると回っていた。

あまりにも非現実的でリアリティのある、そんな矛盾した感覚の話。

（リタの話を信用していないわけじゃない。俺はあの化け物を自分の眼で見ているし、あいつの話には信憑性がある。実際、紛うことなき真実だろう。俺に嘘をつくメリットも思いつかない……）

廊下を歩いていると思ったとおり風呂あがりのこよりが向こうから歩いてきた。少し肌が火照ったように赤くなっていて色っぽい。

「悼矢ちゃん、お風呂あがったよ」

「ああ。今からあいつの部屋か？」

「うん。色んなお話聞いてみたいから」

「そうか。あまり迷惑はかけるなよ」

「分かってるよぉ」

ぷくっと頬を膨らませてこよりはリタの部屋の方に歩いて行った。

少しジェラシーを感じてしまう。悼矢とこよりはとある事情により、どんなに悼矢が努力してもこよりが悼矢とコミュニケーション

を取ってくれない時期があった。今ではそんなことはないのだが、ここまで早くこよりに懐かれるリタを恨めしく思うのだった。

（異性の兄より同性の姉的存在の方が話しやすいのかもな……。もうこよりも異性を意識し始める頃だろうしな……）

「はあ……」

悼矢の口から色々なものを含んだ重いため息が出た。

Ｄａｎｃｅ１　其の５

翌日の朝。

悼矢が洗面所で顔を洗ってリビングに行くと、先に起きていたらしいリタがソファに座ってテレビを見ていた。もう既に我が物顔で居座っているあたりリタの図太さを感じる。

「こよりはまだ寝てるのか。俺より起きるのが遅いなんて珍しいな……」

「こよりなら私の部屋でまだ寝ていると思うわよ。昨日は遅くまで話していたから」

「まったくこよりの奴……。迷惑じゃなかったか？　早く休みたかっただろ」

「別にいいわよ。こよりと話をするのは楽しかったし」

リタはテレビに視線をやったままで答えた。そんなリタを見ながら悼矢は思う。どう見ても人間にしか見えないのに、こいつにはとんでもない力があるんだよな、と。そこでふと気になったことを尋ねる。

「おまえさ……俺が主でいいのか？」

その問いに驚いたのか、リタはテレビから視線を外して悼矢の方に振り返った。

「なによ、急に……」

「いや……エーテルにとって契約は重要なことなんだろ？　契約する相手が俺みたいなのでお前は納得できるのかと思ってな」

リタは肩を落としてため息を吐いた。

「……愚問ね。確かにエーテルにとって人間と契約することは人間界の結婚みたいに神聖なものよ。契約した人間とエーテルのほとんどは一生の付き合いになってる。簡単に決めるものじゃないわ」

「だったらなんでだよ」

リタはあごに指をそえて天井を見る。

「そうね……。もちろん紋章が反応したことも理由の一つだけれど……。あえて言うなら……あんたの眼かしら」
「はあ？　眼？」
思わぬことを言われ悼矢のその眼が点になる。
「アンタの眼はエーテル使いの眼をしているわ。エーテルを寄せつける眼と言い換えてもいいわね。その眼が気に入ったのよ。ま、私が選んであげてるんだから自信持ちなさいよね」
ずず、と紅茶を口にするリタ。
「そんな理由で自信なんて持てるかよ。そういえばどうしてお前、あの空き部屋にいたんだ？」
「うっ……」と痛いところをつかれたようなリタの顔。
「もしかして寝床でも探してたのか？」
「そうよ。悪い？　こっちの世界に私の住む家なんてないんだから仕方ないじゃない」
「これだけ多くの家がある住宅街でよく我が家をピンポイントに選んでくれたもんだな」
「私もどうしてこの家に惹かれたのか疑問に思ったわよ。でも調べてみて納得したわ」
「調べたって……いつの間に……」
「今朝よ。それで分かったことが二点。まず一点目はこの家の周りには結界があることよ」
その言葉に一瞬、沈黙が空間を包んだ。
「はあ！？　結界だって！？　結界っつーとあれだよな……漫画とか小説の……」
「もう何年も前のものだからほとんど効力は落ちてて意味をなしていないけど、修復は簡単にできるから復旧するのに時間はかからないわ。今日にでもやっておくつもりだし。
結界さえ治せばこの家に禍魂が侵入できないようにすることもできるはずよ」
「この家に結界だなんて信じられないな。一体、誰が……」

思い当たる節を探そうと頭の中を巡らせてはみるが誰かの顔が浮かぶ気配はない。それもそうだろう。悼矢は今まで“日常側”で暮らしてきたのだ。結界なんてものは“非日常側”であって、悼矢の知るはずもない。

「二点目はこの家にエーテル・エネルギーが溢れているってこと。人間界にもエーテル・エネルギーがないわけじゃないし、人間自身だって多かれ少なかれエネルギーを含有しているわ。でも普通、一般家庭にこんなエネルギーがたゆってるなんて考えられないわよ。私みたいなエーテルからすればぬるま湯に浸かっているみたいに心地いい空気よ、この家。

この二点から導き出される答え。ここに住んでいた人間……まあアンタの両親でしょうね……がエーテル使いであった可能性が高いわ」

そんなリタの言葉に悼矢は腹を抱えバシバシと机を叩いた。

「はっはっは！　ないないない！　ひぃーっひっひ！　いくらなんでも冗談キツいぜ、そりゃ！　ひぃーくるしい……！

あー、呼吸困難になるところだった」

馬鹿にしたような悼矢の口ぶりにリタはむっとした様子で立ち上がった。

「そう思うなら確認しましょ。私もどういう理屈でここにエーテル・エネルギーが溢れているのか知りたいし」

「おいおい。何もそこまでしなくても」

「うるさいわね！　さっさと来なさい！」

「あ、こら！　俺、まだ朝ごはん食べてないんだって！」

悼矢はリタに引っ張られてずるずるとリビングを後にした。

そして悼矢とリタは悼矢の父親、司の部屋の前に立っていた。リタはこの部屋から濃いエーテル・エネルギーを感じているらしい。

「入るぞ」

キィ、と音をたてて扉が開く。誰も使ってないので埃が溜まってるかと思えばそうでもなかった。こよりが日頃、こまめに掃除をし

ているおかげなのだろう。
二人は部屋の物色を始める。だがこれと言って珍しい物は見当たらない。
「何も変わったものなんて見当たらないぞ」
一〇分ほど探すと悼矢は飽きてきたのかばふっと書斎の椅子に座る。
「そうね。でもこの部屋になんらかの仕掛けがあるのは間違いないわ。エーテル・エネルギーが充満しているもの。ってなにアンタ休んでんのよ！　探しなさいよ！」
本を投げられ悼矢の顔にばしっと当たる。
悼矢と打って変わってリタは次から次へと部屋の中を調べていた。積まれた本を掻き分け、棚の中をごそごそと掻き回している。
「って言われてもなぁ……」
ぼりぼりと頭を掻く悼矢。そんな悼矢の視界にふと一枚の風景画が目に入った。そこに描かれているのは緑に囲まれた湖だった。遠くに山が見えていて、湖にその山が反射しているのが何とも幻想的だった。悼矢はなぜかその風景を見て“懐かしい”と感じた。無意識のうちにその絵を壁から外す。
「この絵……俺、どこかで見たことがあるぞ」
「何言ってるのよ。あんたの家にあるんだから見たことあるのは当たり前でしょ」
「……。……それもそうか」
至極当然な理由を言われ納得する。
「って、ちょっとあんた……それ……」
リタは悼矢の後ろを指差した。
リタの驚いている顔を訝しがりながら振り返ってみると、風景画の後ろに隠れていたのだろう黒い金庫が姿を見せていた。
「おお、こんな金庫があるなんてな。だけどどこの家庭にも金庫くらいあるもんだろう」
「よく見てよ。これ鍵で開くようになってるわ。普通、金庫といえ

ばダイヤル式が主流でしょ？」
　言われて見てみれば確かに金庫には鍵穴がついていた。それは鍵穴というよりも何かカードでも差し込むように作られた細い裂け目だ。
「変な形の鍵穴だな。カードキーで開くのか？　こんな金庫の鍵なんて預かった覚えないぞ」
「あんたの両親が鍵を持っているのか、もしかしたらどこかに隠してあるのかも知れないわよ。どちらにせよ、この金庫が異彩を放ってるわねー」
　リタは金庫を持ち上げて振ったり眺めたりし始める。
「特殊な造りの金庫だってのは分かるけどよ。そんな注目するものでもないんじゃないか？」
　と二人で言い合っていると、
「なにしてるの？」
　物音で目を覚ましたのか、こよりが眠気眼をこすりこすりやってきた。
「おはー、こより。起きたか」
「おはよう、こより」
「おはよー、リタさん、悼矢ちゃん。何か探しもの？」
「こより。おまえ親父から何か鍵を預かったりしてないか？」
「鍵？　鍵……うーん……裏庭にある倉庫の鍵なら預かってるけど……」
　どうやらこよりも金庫の鍵に思い当たるふしはないようで、首を傾げている。
「だよなぁ。謎は深まるばかりだ」
「それらしいのが見つかっただけ良しとしましょ。それよりこよりも起きたことだし朝ご飯にしない？　もうお腹ぺこぺこよ」
「おまえも食べてなかったのかよ。ってよく考えたらリタが料理できるようには見えないもんな」
　悼矢の呟きが聞こえたのかリタが悼矢の背後から首に腕を回して

締め上げる。
「なんなら特別にあんたを料理してあげようか？」とニコニコ顔なリタ。
「ぎゃああ！　死ぬ！　ギブギブ！」
「あははは。じゃあ私、朝ご飯作ってくるね」
こよりはとてとてと階下に降りて行った。
「ったく、朝から疲れさせないでよね」とリタも髪を掻き揚げて出て行く。
それに倣って悼矢も部屋を出ようとして、ふと振り返る。
視線の先には例の風景画。
（あれはどこの景色なんだろう）
悼矢はそれが少し気になった。

◇◇◇

ご飯を食べてから悼矢は縁側に出ていた。少しこれからのことを落ち着いて考えたかったのだ。
天気は快晴。春の陽気がぽかぽかと庭の雰囲気を暖かなものにしている。そんな暖気に誘われたのか一匹の猫が塀をとことこと歩いてくるのが見えた。
その猫は真っ白だった。ここから見ても分かるほどさらさらとした毛並みをしていて、睫毛の長い綺麗な顔、すらっと伸びる足で塀を歩く様は優雅ですらある。
その白猫はちらりと悼矢を見ると、すたっと庭に降り立って近づいてきた。
「こより～！　しらたまが来たぞー！」
悼矢が家の中に向かってそう叫ぶと、たったったと軽やかな足音が近づいてきた。

「あ、ほんとだっ」
こよりは白猫を見ると庭におりて抱き上げた。
「ふわぁ～、ふさふさで暖かい～～」と白猫に頬擦りするこより。
そんな暑苦しいだろう抱擁に嫌な顔一つしない白猫。
この白猫は時々この庭にやってくる。誰かに飼われてる様子もなく、どうやら野良らしい。こよりはこの白猫を白玉団子のように真っ白なので“しらたま”と名づけて可愛がっているのだった。
しらたまはするりとこよりの腕から降りると縁側にのって丸くなり、眼を閉じる。どうやら昼寝にきたらしい。
「お前は呑気でいいよなぁ」
悼矢は隣でぽかぽか陽気を楽しんでいる白猫に言った。
するとしらたまは片目を開けて悼矢を見る。
「？　なんだよ？」
悼矢が問うと、しらたまは『別に』とでも言うようにふいと逆方向を向いて眼を閉じた。
「しらたまお昼寝しに来たんだぁ。それじゃあ、寝かせてあげないと可哀相だよね」
こよりはしらたまと遊べなくて少し残念そうだった。
「したらまに場所をとられちまったな。こより、少し出かけてくる」
「はーい。夕飯までには帰ってくるよね？」
こよりはしらたまの横に寝転んでしらたまが昼寝しているのを嬉しそうに見つめながら尋ねた。
「ああ。ちょっと散歩してくるだけだから」
「んー、分かったー。いってらっしゃーい」
本当に分かっているのか、いないのか。悼矢はやれやれとため息を吐いて、街へとくりだした。

◇◇◇

駅前というのはどの街でも発展しているものだ。悼矢が住んでいる波科町の駅近くも例外ではない。カラオケ、ボーリング、デパート、パチンコ、ゲーセン、ショッピングモールなどなど。欲しい物があればここに行けば大抵は手に入るし、時間を潰すには最適な場所なのである。

悼矢はそんな人がごみごみとした大通りを歩いていた。

――こんなことを言うのは卑怯かも知れないけど禍魂は現界にどんどん増えてる。止めなくちゃいけない。誰かが戦わなくちゃならないのよ。

思い返されるのはリタの言葉。

そりゃ禍魂をこのまま放っておくのは危険だろうし、リタの協力はなるべくしてやりたい。だが自分に何ができるというのだろうか。今まで普通に生活してきたのに、いきなり化け物だの異世界だの常識を超えることばかりで頭が痛くなる。

（あー、くそっ）

悼矢はわしゃわしゃと頭をかく。

だが知ってしまった以上このままではいられない。

（もしあんな化け物が街に溢れるようになったら……）

人類の滅亡。それも冗談ではなくなる。何の理由があってかは分からないが禍魂は人間を親の仇のように狙っているようだった。

だが悼矢には人類の滅亡よりも怖いことがあった。それよりも何よりもこよりに危害が及ぶ可能性があるというこの一点だ。

悼矢にとってこよりはただ一人の大事な妹。

悼矢とこよりの関係は普通一般的な兄妹のそれとは違う。両親が離れていることもあるからかお互いのことをよく理解し、支えあっているのは言うまでもない。が、それよりも深い絆が悼矢とこよりにはあった。それは兄妹以上の信頼からくる関係だった。悼矢とこよりだからこそ成り立った関係が二人にはある。

――こよりを頼むぞ

それはかつて父親に言われた言葉だ。
（そんなこと言われるまでもない！）
そこまで互いを想い合っているこよりと悼矢だ。悼矢が何かを決める時には自然とこよりのことが頭をよぎる。
（リタと一緒にいればこよりの安全性が増すんじゃないか……。いや、逆に禍魂に狙われるようになるかもしれない……）
悼矢は立ち止まった。
（うじうじ悩んでても仕方ないか……）
と顔を上げると見覚えのある顔を発見した。
髪の毛を真っ赤に染めた軽薄そうな少年。
名を俵衛助と言う。悼矢の一つ上の先輩で、今年三年生になる。
俵先輩はその外見にぴったりと合う行動をとっていた。つまりナンパである。
しきりに同年代の女の子に声をかけ、断られて、がくりと肩を落としている。そこで顔を上げた俵先輩と眼が合ってしまった。
（しまった。気づかれる前に逃げるべきだった）
そう思った時には既に遅い。俵は悼矢のところまでやってきていた。
「かっちゃんやないかー！　えらい偶然やなー！」と関西弁丸出しの俵先輩。この人通りの多い中で名前を叫ばれてかなり恥ずかしい。しかし俵先輩は全然気にしていない様子。
何でも生まれも育ちも関西の人らしい。その底が抜けるような――というか抜けてる明るさはその言葉と相まってえらく目立つ。
「先輩。俺忙しいんで来年にしてくれますか」
「なんやー？　えらい辛気臭い顔やなぁ。って、来年になったら俺もう卒業しとるやんけ！」
と豪快にツッコミを入れてくる俵先輩。
「……。先輩は悩みとかなさそうですね」
「なに言うてんねん。そりゃもーぎょーさんあるでー！　いつになったら恋人ができるんやとか、こっちじゃ吉本新喜劇が見られへん

とか、本気でお笑い芸人目指すべきかもしれへんとか」
「俵先輩、お笑い芸人になるんですか？」
「ならへんよ？　なんでや？」
眼をぱちくりさせてる俵先輩。
（だめだ……。この人、早く何とかしないと……）
悼矢は質問を質問で返されて頭が痛くなった。
「なんやー？　かっちゃんはえらい悩んでるみたいやけど……。わいがあてたろか？」
「面白いですね。当ててみてくださいよ」
「よしきた！　当ててみせたろーやないか！　あ～～～ん～～～」
先輩は腕をひねって両の掌を組むとぐるりとひっくり返し、その穴から悼矢を覗き込む。
「見えたで！　かっちゃんは“異世界から来た化け物と戦う金髪の女の子に契約を迫られて悩んどる”んやろ！」
「ブフゥゥゥウゥゥッ！」
思わず噴出す悼矢。
「ま、まさか本当に見たんですか、先輩！？」
あたふたと尋ねる悼矢。
「なにをや？」
だが先輩は再び眼をぱちくりさせていた。
（当てずっぽうで言っただけかよ……）
「あ、いえ、何でもないです。っていうか、そんな漫画みたいなことあるわけないじゃないですか、先輩！」
「そんなことは分かっとるよ。そこまで必死に否定せんでもええやん。ただの冗談に決まっとるやないか」
（冗談で的確に核を突くこの人って一体……。相変わらず謎な人だ……）
「あー、なんだか一気に疲れました。俺、帰ります」
「なんやもう帰るんかいなー。ほな、また学校でなー」
「はい……」

とぼとぼと歩き出すと後ろから大きな声がした。
「かっちゃん！　何を悩んでたんかわいには分からん。でもな気張らなあかんで！　気持ちが沈んだら悪いことが向こうからやってくるさかいな。幸せはな……勝ち取らなあかんねん！　元気出しや！」
そう言ってグッと親指をたて爽やかな笑みを浮かべている俵先輩。
（……疲れるけど俵先輩っていい人だよなぁ……。疲れるけど）
一気に体力が激減した悼矢は肩をだらんとさせたまま帰路についた。
そんな背中を見送り、俵衛助は振り返ると呟いた。
「そうや。頑張って貰わなあかんねん。なんせかっちゃんは“特別”なんやからな……」
そう言った衛助の口元がニヤリとなる。それは悼矢の前で見せていたようなへらへらしたものではない。衛助はその眼光を鋭く光らせ、空を見上げた。
それは暗雲が立ち込め、一雨来そうな空模様だった。

◇◇◇

夕方になると悼矢は自宅に戻ってきた。
「話がある」
悼矢の真剣な表情からリタはその内容がどういうものであるか理解した。
「決心したみたいね。待ちくたびれたわよ」
「ああ。俺なりに色々と考えてみた」
「それで……どうするつもり？」
「俺は……」
悼矢は拳をぎゅっと握った。
「俺は……おまえと戦うことはできない」

「……」

「よく考えてもみろよ。俺は普通の人間なんだよ……！　そりゃお前の手助けはしてやりてぇさ！　でも無理なんだよ！　エーテル使いって言っても俺にお前をサポートしてやる方法もない！　足手まといになるだけだ……！」

一気にそう叫んで悼矢は少し冷静になる。

「それに俺たちの親はもう何年もこの家に帰ってきてない。俺が家を空けるようになったら、こよりはこの広い家で一人になっちまう」

「それがアンタが私の主になれない理由？」

「ああ」

「そう……。アンタはもっと自分勝手な奴だと思ってたけど……。私の見込み違いってわけね」

「なんだよ、それ……！　どういう意味だ！」

「アンタが言った理由。全部アンタの理由じゃないじゃない。私の足手まといになるとか、こよりが一人になるとか。笑っちゃうわね。アンタは勝手に人のせいにして逃げてるだけでしょ」

「逃げてる……だと……！」

「私を狙ってた禍魂の話だけど……この家の結界はもう復旧させたからアンタたちに危害が及ぶことはないわ。そもそも私がいなくなればアンタを狙うことなんて最初からないと思うけど……」

言ってリタは立ち上がった。

「結構アンタのこと気に入ってたんだけど仕方ないわね。こよりによろしく言っておいて」

「待てよ！　どこ行くんだ！」

すたすたと玄関へ向かうリタを引き止めようとする。するとリタは顔だけこちらに向けた。

「アンタが私の主にならないって言うなら私がここにいる理由はないわ。私は主を見つけて戦わなくちゃならないんだから」

「……っ！」

思わず伸ばした手を引っ込めた。

引き止められるわけがなかった。悼矢はリタと違う道を選んだのだ。なのに引き止めるなんて矛盾したことできるわけない。

そんな悼矢を見てリタが何か言葉を紡ぐ。だがその声は小さく悼矢の耳に届かなかった。そしてそのままリタは玄関から外へ出て行ってしまった。おそらく彼女がここへ戻ってくることは二度とないだろう。

（これでいい。俺は普通の毎日を送ることしかできないんだ。化け物と戦うなんて……そんなことできるわけないッ）

「あれ？　リタさん、どこかに出かけたの？」

二階からこよりがやってきた。

「あいつは出て行ったよ。こよりによろしく言っておけってさ」

悼矢はリビングへと戻る。

「え～！　まだ聞きたいことといっぱいあったのに～！」

こよりは残念そうで、それでいて不満そうだった。

「仕方ないだろ。あいつにも事情があるんだから」

悼矢はソファにどかっと座る

「むー。せっかく今日のご飯は豪華にしようと思ってたのに……」

こよりはそう言いつつキッチンの中に入っていった。悼矢はテレビを点けるとごろんとソファの上で横になる。

（もう忘れよう……。俺は日常を送るんだ）

悼矢の意識は深い眠りの中へ落ちていった。

Ｄａｎｃｅ１　其の６

しばらくして悼矢は目を覚ました。
時計を見るともう十時を指している。
ふと『ザアァァ』という音が外から聞こえカーテンを開けてみる。
外は大雨だった。
（雨か……。あいつ、大丈夫かな……。どこかで雨宿りしてればいいが……）
そう思ってハッとなってしまう。
（俺は何を考えているんだ。あいつのことはもう忘れるんじゃなかったのかよ！）
思わずため息を吐き、首を振る。
（矛盾してるぜ、まったく）
「悼矢ちゃん起きたの？」
「ああ。ご飯もう食べたか？」
「まだだよ。悼矢ちゃん全然起きてくれないんだから……」
腰に手をあててぷくっと頬を膨らませるこより。
「俺に気にせず食べても良かったのにな。こよりはそういうとこ律儀だよなぁ」
「二人だけの家庭だから一人で食べるのは寂しいもん。それじゃあすぐ机に並べるね」
こよりの言うとおりだ。両親は生きているとはいえ、この家に住んでいるのは悼矢とこよりの二人だけ。だから悼矢はしっかりと“お兄ちゃん”してやらないといけないのだ。
「いただきまーす」
二人で食事を始める。
「そういえば……」とこよりは何かを思い出したかのように言葉を紡ぐ。
「悼矢ちゃん。リタさんと何かあったの？」

内心ドキリとする。しかし悼矢は平静を装って返した。
「どうしてだ？」
「だって変だよ。リタさんが何も言わずに出て行っちゃうなんて」
「……。そうか？」
「そ・れ・に、悼矢ちゃん、寝言で言ってたもん。ごめんって。それってリタさんに対する言葉じゃないの？」
まさか寝言でそんなことを言っているとは思いもしなかった。いや、違う。それもそうなのだろう。気にせずにいようとは思うがどうしても気になってしまうのだから。
（外は雨だしあいつには寝床さえない。助けてやれる奴だっていない……！）
「？　どうしたの？」
悼矢の手が止まってしまっていることにこよりは箸を咥えたまま首を傾げる。
「いや……なんでもない」
かろうじて悼矢はそう言うことができた。
「うーそ」
「あん？」
「悼矢ちゃん嘘ついてる」
「ついてない」
「ついてるよ。悼矢ちゃんは嘘つくの下手だからすぐ分かるもん。リタさんと何があったか知らないけど、謝りたいならちゃんと本人に会って言った方がいいと思うなぁ、こよりは」
「いや……でもな……」
「でも何もないのっ！　リタさんがいなくなってから悼矢ちゃん変だよ！」
そんなことは悼矢自身も分かっちゃいるんだ。本当はリタのことが気になって仕方がないこと。それに加えて何か言い知れぬ不安が込み上げていた。それは第六感とも言うべきか。それが何からくる不安なのか……。掴もうとしても雲か霧のように自分の手をすり抜

けていくのだ。不安の根源が分からないからこそ余計に不安になる。
（こよりの言うこともっともだ。不安になるくらいなら自分の側において見守ってやればいい……。そんなこと分かってる！　俺だって助けてやりたいさ！）
自然と悔しさから手が拳を握っていた。そう、悼矢の中にある感情は悔しさだった。
（でも仕方ねぇだろ！　俺には無理なんだよ！　俺が禍魂と戦うことになったらこよりはどうなる……！　どちらかを切り捨てるしかないじゃねぇか！）
――アンタは勝手に人のせいにして逃げてるだけじゃない。
リタに言われた言葉が頭の中に蘇る。
（……っ！　ちくしょう！　そういうことかよ！　俺は逃げてるのか……！？）
その時、リタが出て行くときに放った言葉が思い返される。言葉としては聞こえなかったが、唇の動きで何と言ったか悼矢は分かっていた。
――いくじなし
「悼矢ちゃん？」
こよりがずっと箸を止めたまま深刻な顔をしている悼矢を怪訝そうに呼ぶ。
「すまん。こより、俺少し出てくる！」
そう言うと立ち上がって玄関へと走っていった。
「あ！　待って、悼矢ちゃん！」
靴を履き、既に扉のノブを掴んでいる悼矢をこよりは呼び止める。
「何だよ。今急いで――」
振り返るとこよりは笑顔で上着をさしだしていた。
「がんばってね」
何をとは言わない。こよりは悼矢が何をしに出かけるのか気づいているのだろう。だから悼矢も上着を受け取ると『ああ』とだけ答えた。

雨はまだ衰えていなかった。風も強いせいで雨は斜めに降っている。こんな雨じゃ傘もあまり意味をなさないだろう。

「行くか」

そう言葉にすると悼矢は雨の中に飛び込んでいった。

◇◇◇

状況は最悪だった。

まず雨というのがまずい。

雨のせいで体力は奪われ、傷も痛むし、視界も鮮明ではなかった。あれからリタはあてもなく街を彷徨った。だが目立つ格好をしているせいもあり、人目を気にして人気のない路地へと入った。そんな場所にちゃんとした屋根なんてあるはずもない。業務員用の出入り口なのか、ちょっとした屋根があるにはあるが何せこの豪雨だ。斜めに降る雨に成す術もない。冷たい壁に背中を預け、ただ雨風に曝されること数時間。服も濡れ、体は凍えるように冷えていたし、吐く息も白かった。

本当に最悪な時というのは悪いことが重なって起こったりするものだ。

そんな時だったのだ。

禍魂がリタの姿を見つけたのは。

禍魂という奴らはよほど鼻が利くのか、それともリタの運が悪いのか。

まさに最悪の状況。最悪のタイミング。

リタを見つけた禍魂の殺気とエーテル・エネルギーが一瞬で膨張する。その激しい敵意にリタが気がつかないわけがない。

リタは路地の奥。その闇の中に獣のような赤色の鋭い目を見つけ、すぐに臨戦体勢に入った。

禍魂が奇襲のつもりで手の平から光の球を放つ。だがそれをリタは上空へ跳んで避けた。その光球は雨を蒸発させ、白い煙をあげて突き進み、ビルの角に当たった。

ドゴォオオンッ！

爆発し、その一角が砕け散る。リタは空中でビルの壁に拳を放ち、腕をめり込ませて張り付く。そしてキッと禍魂を睨む。

「ルクライルゥ！　決着をつけようじゃないか！」

その禍魂は悼矢の家で戦った禍魂だった。

表通りにいた人々はいきなりの爆発にパニックになっていた。

「なんだ！？　爆発！？　事故か！？」

「消防車を呼べ！　火の手が広がるぞ！」

燃え上がる一角。群がる人々。だが彼らは彼らが注目しているその炎の奥で起きていることにまでは気づいていないようだ。

（こんな人の多いところでやる気なの！？　これだから禍魂って奴は……！　これ以上被害が広がらないうちにどこか人気のない場所に移動しないと……！）

リタは壁を蹴ってさらに上を目指す。ビルの屋上、そこならば戦うのに十分な広さがあって人気もない。被害も少なくなるはずだと考えてのことだった。

「逃げるのか、ルクライル！」

禍魂がリタを追って跳躍する。

リタが屋上に着地してすぐに禍魂も着地した。

周りを見回しフンと鼻を鳴らす禍魂。リタの狙い通り屋上には人っ子一人いなかった。

「この状況で他人の心配とはな。お優しいことだ」

ピシャーン！

雷が鳴った。相変わらず豪雨が続いていて地面はぐしょぐしょだ。こういう状況の中での戦闘はやりにくい。滑る足場、悪い視界、奪われる体力。だがそれは相手とて同じこと。決して不利というわけではない。

「うるさいわね。さっさときなさいよ」
リタの周りを仄かな赤色が包む。
（昨夜の一撃で与えた傷はまだ癒えてないはず……。今ならあるいは……！）
禍魂が床を蹴った。なんという脚力だろうか。それだけで床はヒビ割れ、水飛沫が飛び散る。戦車のようなガタイが猛スピードでリタに迫る。
「潰れろォ！」
禍魂が右拳を握ってハンマーのように振り下ろす！
人間が受ければぺしゃんこにされてしまうような強烈な攻撃。
だがそれをまともに受けるほどリタは馬鹿ではない。
リタは禍魂の腕にぷらさがるように、絡みつくようにして腕の下から上へと体ごと回転して回避した。驚異的な身体能力だ。生半可な運動神経では真似事もできないだろう。
ズゴォオゥウゥゥンッ！
禍魂の手が地面を叩き割る。コンクリート破片が辺りに撒き散らされる。
（俺の腕を軸にしていなした……！？）
そしてその回転を利用して踵を禍魂の顔側面めがけて繰り出す！
「だが甘い！」
その踵を禍魂は背中を反らすことで避けていた。踵が禍魂の鼻先をかすめていく。そして左手で通り過ぎたリタのか細い脚を掴む。
「！？」
「いくらすばっしこいとは言えこうして捕まえられちゃ逃げられないだろう！」
再度、右拳を天高く振り上げる。
「ええ、そうね。アンタもこんな至近距離からじゃ避けられないでしょ！」
禍魂はそこで気づいた。リタの左手に光り輝く紅い球が出現していることに。

「くらいなさい！」
リタが光球を放った。
「ぬぅっ！」
ズドォオォンッ！
禍魂の上半身を爆発が包んだ。爆風にあおられリタは濡れた地面に叩きつけられる。だがすぐに起き上がって体勢を立て直した。
見ると禍魂の上半身から白い煙がもくもくと立ち上っている。あれぐらいでやられる禍魂ではないだろうが、果たしてどれだけのダメージを与えられたか。
しばらくして煙が晴れる。そこには焼きただれた顔の禍魂の姿。
「許さんぞ、エーテルごときがァ！」
禍魂は鬼のような形相で吼えた。

◇◇◇

悼矢は大通りを走っていた。
するといきなり騒がしい一角を見つける。
（なんだ？）
見てみるとビルの一階が炎上していた。
周りにはざわざわと野次馬たちが群れている。その野次馬たちの話している言葉に耳を傾けてみる。
「いきなり爆発したんだってな」
「俺、何か光ってるのがあそこにぶつかって爆発するのを見たぜ」
「なんだよ、それ。ミサイルか？」
不安が更に増す。
（まさかリタか……？）
思って辺りを見回す。だが野次馬しか視界に入らない。
（ちくしょう！　どこにいやがるんだよ！）

と天を仰いだ時、そこから見える緑のフェンスの屋上に影が見えた。
黒い獣のようなものと赤い人型が躍っている影が。あの赤い影は間違いなく――
「リタッ！？」

◇◇◇

禍魂が地を蹴った。蹴った床が吹き飛び土埃が舞う！
（さっきより速い！）
これが禍魂の本気なのだろうか。降り注ぐ雨を弾き飛ばして突き進んでくる。その予想外の脚力にリタですら目で追うことしかできない。かろうじて禍魂が右腕を振りかぶったのが見えた。反射的にリタはしゃがむ。リタがかがんだすぐ後を鋭い爪が生えた豪腕が通り抜けた！
当たれば真っ二つに切り裂かれる。リタはそう確信した。その荒ぶる力故か禍魂は踏みとどまることができず、右腕を振りぬいた格好でリタに背中を見せる。
（チャンスッ！）
しかし次の瞬間、リタの左わき腹にかつてない衝撃とともに鈍痛が走った！
一瞬、何が起こったか理解できなくなる。
（これは……尻尾！？）
リタはやっと気づいた。禍魂は右腕を振り抜いた後、そのまま体を回転させて尻尾で攻撃してきたのだと。決して踏みとどまれなかったわけではなかったのだ。
声もあげずに吹っ飛ぶリタ。リタの体はそのまま一直線に吹っ飛び、濡れた床で何度かバウンドして屋上の金網にぶつかり、止まっ

た。
　人間ならば骨を砕き内臓を破裂させ死に至らしめているだろう一撃。そんなものを受けてリタとて無事ではいられなかった。
（……った……まずいわね……あばらが折れたかも……）
　リタはやられた箇所を押さえ、凹んだ金網を支えにして立ち上がろうとする。しかし脚に力が入らず、膝をつく。
「……っく！」
　どうやらさっきの一撃でまたお腹の傷が開いたらしい。あの男が巻いてくれた包帯に血が滲むのを感じられた。
　あの男。片桐悼矢。前回、禍魂と戦った時に自分を奮い立たせて力を与えてくれた人間。
（あいつがいれば……！）
　だが浮かんだその望みは首を振ることで消し去る。
　禍魂がゆっくりとリタに近づいてきた。
（こんな時に何考えてるのよ！　あいつは来ないのよ……！　自分で立つのよ……！　立たなきゃやられる……！）
　リタの呼吸は荒い。
　意識も朦朧としていて、視界がかすんでいた。
「気分はどうだ？　ルクライル」
　リタは答えない。いや、答えられない。
　禍魂はリタの頭を掴んで持ち上げた。
「ぐっ……！」
「どこからちぎって欲しい？　右手か？　それとも左足か？　ああ、急ぐなよ……。頭は最後だからな」
　言って大笑いする。だがリタもにやりと笑った。
「やれるもんならやってみなさいよ……！」
　リタの眼はまだ死んでいなかった。
　そんな生意気な視線に禍魂は気に食わなそうな表情になる。
「そうか……それなら……」とリタの左手を掴んだ。ぎちぎちと力が加わって甲冑がみしみしと軋み、リタの左腕に伝わる痛みが強く

なっていく。
リタはぐっと眼を瞑った。
思い浮かぶのはいけ好かない男の顔。
なぜこんな時に何度もヤツの顔が浮かぶのか自分でもその理由が分からない。
（なに期待してるのよ……）
来るわけはない。なぜなら今しがた決別したばかりなのだ。彼は日常の中で暮らすと決断したのだ。そう思っていながらも考えずにはいられなかった。
あいつの驚いた顔が浮かぶ、あいつの怒った顔が浮かぶ、あいつの笑った顔が浮かぶ、あいつの真剣な顔が浮かぶ、奮い立たせてくれた凛々しい顔が浮かぶ。
出会ってまだ二日も経っていないというのに、彼は様々な表情を見せてくれた。
そしてそのどの表情もがリタの胸には深く刻み込まれていた。
「トウヤ……」
いつの間にかその名がぽつりと口から出ていた。
「トウヤ？　ああ、片桐悼矢……か。安心しろ。お前の後をすぐに追わせてやる。
では、左手とお別れだ」
禍魂が引き千切ろうとした。
「トウヤ……トウヤ……！　トウヤ！　トウヤアアァァァ！」
リタがその名を叫んだまさにその時。
ドギャ！　ゴンガラガン！
屋上の扉が勢いよく蹴り破られ、地面に大きな音をたてて転がった。
「ハァハァハァ……。大声で、人の名前、呼んでんじゃねーよ」
「む？」
禍魂が振り返り、その人物を見て眼を見開く。
リタもまた口をぽかんと開けて彼を見ていた。

その青年の姿を。
「ったくよ、何してんだろうなぁ、俺は……。こんな雨の中……」
彼は大雨と汗で泥まみれになっていた。何をそこまで急ぐことがあったのだろうか、ぜぇぜぇと肩で息をしている。
リタが見間違うはずがない。彼の姿を見間違うはずがない。
それはリタが待ち望んでいた者の姿だったのだから。
リタは口をぽかんと開けて驚いた表情のまま固まっていた。そんな視線を受け、悼矢は荒い息のままニヤリと口元を歪める。
「呼んだか？　相棒」

Ｄａｎｃｅ１　其の７

「あ、あいつ……どうして……」
リタが悼矢を見て驚いている。ここにいるはずのない人間が、そこにいた。そしてハッとすぐに我に返る。
「やあああああああああっ！」
体をしならせ禍魂の顔を両足で蹴る。
「ぬうッ！？」
悼矢に気をとられていたというのもあり、禍魂はその衝撃でリタの頭を離してしまった。リタはすぐさま悼矢の方へ跳んで禍魂と距離をとる。だが尻尾を受けたダメージが大きかったのか、がくりと片膝をついてしまう。
「大丈夫か！？」
駆け寄る悼矢をリタは睨んだ。
「アンタ……！　何しにきたのよ！」
「な、何って見てわからないかよ。お前を探しにきたに決まってんだろ！」
「ふざけないでよ……！　アンタは私と契約しないことを選んだんでしょ！　それなのに探しにきたですって！？」
「嫌な予感がしたんだよ！　どうやら的中したらしいがな……！」
悼矢は禍魂を見据えた。
禍魂は首をこきこきと鳴らし、こちらに振り返る。
「冗談じゃないわ！　アンタ何様のつもりよ！？　アンタと私はもう何の関係もないのよ！」
リタは悼矢の胸ぐらを掴んだ。リタの表情は今まで見たことのないほど怒りに染まっている。
「そういうアンタの優しさをありがた迷惑って言うのよ……！　私と契約するつもりもないくせに……！」
目の端に涙さえ滲ませて叫ぶ。

「っるせーな！　ならさっさと契約とやらをしろよ！」
「そうよ！　だからさっさと契約しないと――」
とリタが胸ぐらを掴んだまま固まる。
「アンタ……いま何て言った？」
「だから早く契約をだな！」
悼矢はなんとかリタの手から逃れようとするが、一向に逃げられる気配がしない。
「アンタ、私と契約するって言うの？」
リタが胸ぐらから手を離す。
「ああ、そのつもりできた。お前に言われたことがやっと分かったんだよ。結局のところ俺の思ってたことは誰のことも考えてない一人よがりだったってことがな！　お前に迷惑をかけたくない、こよりを一人にしたくない！　だから俺は契約しないことを選んだ。だけどそれは逃げだ！　ちっとも俺らしくねぇ！　だから決めたんだ！　俺は欲張りで勝手な人間だからな！　リタ……おまえと契約する！　だがこよりも一人にしない！　まとめて俺が面倒見てやるッ！」
その眼には“決意”という名の意志の光が灯っていた。
その強い眼差しにドキリとする。
「ト、トウヤ……」
知らず知らずに胸の鼓動が高鳴っていた。そして今気づいたかのように胸をおさえた。
（ああ、そうなんだ……。私は……こいつが来てくれて嬉しいんだ……）
刹那！　リタの右肩がカッと輝く！
「……紋章が……」
リタはゆっくりと自分の右肩をなぞり、その輝きを確かめる。すると何か決心したように顔をあげ、王に仕える騎士のようにいきなり悼矢の前に片膝をつく。そして悼矢の手を両手で包み込み、眼を閉じた。

いきなりのことに戸惑う悼矢。
「お、おい……！　おまえこんな時に何やって――」
「契約に決まってるじゃない。少し黙って」
リタの冷たくなったしなやかな指が悼矢の指に絡みついてくる。
リタのその行動は否応なく悼矢の心拍数を上げた。
こぉおおお……。
優しい風が二人を包み込む。
その風はさやさやとリタの長い髪を揺らし、悼矢の元へ彼女の香りを運んでくる。
すぅーっと二人の足元に赤い紋章が浮かび上がった。
それはリタの肩に描かれた彼女の紋章。
「――私、リタ＝ルクライルは我が主トウヤのため盾となり矛となり、生き死にを共にすることを誓います」
まるで婚約の言葉を紡ぐように眼を閉じたリタが囁く。
瞬間！
紋章が真っ赤な光を四方八方に放った！
悼矢の中を電流のようなものが駆け抜ける。何か――いや誰かが入ってくる。だが嫌な気分ではない。むしろ暖かく心地良くすらある。それは体の芯まで到達すると自分の周りに膜を張った。
そんな包み込まれる感覚。
それを感じたのは悼矢だけでなかった。リタもまた包み込まれるような暖かさに驚いていた。そしてその現象以上にある確かな感覚が膨れる。まるで一心同体になったかのように相手のことが分かる。
悼矢は感じた。リタが誰でもない自分のものになったということを。征服感と言ってもいい。自分がリタに命令し、従わせる絶対的強制力を得たということが理解できる。
エーテルにとって契約がどれほど重く神聖なものなのかを悼矢はやっと理解した。
（こりゃ生半可なことはできねぇ……。しっかりしないとな……）
リタもまた悼矢のものになったということを感じていた。自分の

体を見て、触り、具合を確かめる。
「……ふーん、これが契約……。悪くないわね」
リタはそう言って笑う。
気づけば雨が止んでいた。下のボヤ騒ぎはといえば消防車がきて消化活動にあたっているらしい。
「契約はできたようだな。これで少しは楽しめそうだ」
不意に禍魂が発した言葉に二人はその存在を思い出す。
「そういや戦闘中だったな。契約するのを待ってくれてたなんて余裕の表れか？」
「禍魂はそれだけ強敵なのよ。本来、一対一で戦うような相手じゃないわ。でも……これならちょうどいい腕試しになるわね」
くるくると右腕を回すリタ。
「腕試しだと？」
轟ッ！
殺気という名の圧力がピリピリと二人に突き刺さる。
「トウヤ、できるだけ下がって」
「ああ、負けるなよ、リタ」
「あっれ～？　もうご主人様気取り？」
リタは意地悪そうな顔で振り返った。
「そんなんじゃねっつーの！　こんな時に冗談言ってる場合か！」
「あはは、ごめんごめん。ま、ドンと後ろで構えてなさいよ。あんたは私の主なんだから……！」
「ああ！　いけ、リタ！　今までの分をやり返してやれ！」
「オッケー！」
スタンッ！
言葉だけをその場に残してリタが駆ける。速い。禍魂のような暴力的な速さではなく、線の細い流麗な速さだ。
リタはジグザグに禍魂へ迫る。そしてある瞬間でリタの姿が掻き消えたように悼矢には見えた。
（速いな……どっちからくる……。右か？　左か？）

禍魂が眼でリタの姿を探す。
ぶぉんっ！
その時、背後から風を切る音がした。
（後ろォ！？）
振り返るとリタが蹴りを繰り出していた。
ズガァッ！
蹴りを顔側面に受け、禍魂は二、三歩後ろに下がる。禍魂がひいたのを見てリタは前に出た。
「やあっ！」
唸りを上げてリタの右ストレートが禍魂の顔面めがけて伸びる！
だが禍魂は体を左に傾けて避ける。さすがに真正面からの打撃をまざまざとくらうほどではないようだ。
禍魂は拳を放って空いたリタの右わき腹に左フックを繰り出す！
ぐぉん！
フックは狙い通りリタのわき腹に直撃し、リタの体はボールのように吹っ飛んだ。
「リタッ！」
思わず悼矢は叫んでしまう。
「ハッハァッ！　俺をナメているのか！？　契約したところでエーテルと禍魂の力量差は埋まりはしない！」
倒れているリタを見て下卑た笑みをみせる禍魂。だが禍魂の予想に反してリタは何もなかったかのように起き上がった。
「なっ！？」
これにはさすがに驚く禍魂。
（バ、バカな、どうなっているんだ……。今のは悶えるくらい強烈に鳩尾に入っただろうが……！）
リタは殴られたわき腹の辺りをパンパンとはたいて言った。
「その様子だとナメてるのはアンタだったみたいね」
「このクソがああアァッ！」
禍魂の筋肉が膨張して血管が浮き上がる。そしてジュバッと音を

たてて鋭い爪が伸びた。禍魂にとってその長く伸びた爪は強力な武器だ。自在に操り敵を切り裂くのである。
「シャアアッ！」
禍魂がリタに跳びかかった。空中で爪を一薙ぎする。
　すると空間が裂けた！
「！？」
不穏な空気を読み取りリタは横に跳ぶ！
刹那ッ！
ジャキィイィンッ！
リタの立っていた場所に五本の爪痕が疾る！
リタの赤いドレスのスカートが破け、リタの右足がのぞく。
「なんだ、今のは……！？」
物理法則を無視したその攻撃に悼矢が戸惑いの声をあげる。
「よ、よくも私のドレスを……！」
驚いている主とは打って変わってリタはぷるぷると破けたスカートを見て震えていた。
「ハッハァ！　よく避けたな！　だが次はどうかなァ！　シャアアァ！」
禍魂は着地すると再びリタに向かって跳んだ。しかも驚くべきことに今度はドリルのように体を回転させてだ。禍魂が突き進むに従って下のコンクリートが砕け散っている。こんな体当たりをされてはいくらリタでもひとたまりもない。
　だというのにリタは避けようとしていない！
「リタ！　何やってる！　避けろッ！」
「覚悟を決めたか、ルクライルゥ！」
悼矢はリタが微塵になるのを想像して思わず視線を反らす。だが――
ジャギィゴォォォオォオオオオオォオォォオォンッ！
甲高い金属音が夜の闇に響き、得体の知れない波動が屋上に吹き荒れる！

悼矢は何が起こったのかとリタを見た。そして背筋がぞくりとなる。

「あ、あれは……！」

前に一度見たことがある。

家のベランダごと吹き飛ばした武器。

なんとリタの手にはあの大剣が握られていたのだ。しかも前のようなおぼろげな姿ではなく、完全にエーテル化されているではないか。その長さは一メートル半ほど、幅は四〇センチもありそうなシャープな洋風の大剣。その重さがリタ自身以上であることは明白。至るところが装飾され、何語か分からない文字が刀身に彫られていた。

バヂッ！　バヂバヂバヂッ！

禍魂の爪とリタの大剣の接触面から青い雷が迸り、あたりの床を破壊する！

禍魂の爪とリタの大剣の接触面から暴風が吹き荒れ、床のタイルを剥がし飛ばす！

飛ばされたタイルは悼矢の横を通り過ぎ、フェンスに当たって砕けた。

なんという非現実的な光景だろうか。悼矢の体がぶるっと震える。それは恐怖か、それとも武者震いなのか本人にも分からない。

ただ分かるのはエーテルという存在、禍魂という存在。そのどちらもが人知を超えたものだということだけだった。

リタと禍魂は決着がつかないと判断したのか、同時に後ろへ跳んで鍔迫り合いをやめる。だが下がった瞬間、二人は再び間合いを詰める。

ジャギィオォオォオン！

二人が激突すると爆発でも起きたかのように夜の闇に光が弾ける。おそらく物理的な攻撃だけではなく、ぶつかった瞬間にエーテル・エネルギーが衝突しているのだろう。

ジャギィンッ！　ジャン、ズゴォォン！

右から左から上から下から、様々な方向からリタが斬撃を繰り出す。それを鋭い爪で受け止め反撃する禍魂。
その交わされるすべての攻撃が互いに一撃必殺。一発あたれば致命傷は免れない。
「やあああああああッ！」
「シャアアアアアッ！」
止めどなく続く攻防。まるで雪崩れのような鋭く重い斬撃を繰り出すリタもリタなら、それを止めている禍魂も禍魂だ。
（これが……！　禍魂とエーテルの戦い……！）
「はあああああああっ！」
リタがまるでジャイアントスウィングをするかのように体を一回転させて大剣を横に薙いだ！
斬ッ！
だが禍魂はそれを上に跳んで避けていた。禍魂の背後にあった金網のフェンスが裂ける！
「もらったァ！」
上空から自然落下して迫る禍魂！
（全体重を預けた一撃を繰り出す気だ！）
「やばいぞ、リタ！」
リタはアルデヴァインの遠心力を抑えきることができず大剣に体が振られていた。だがリタはそこで禍魂を迎えうつため、機転をきかせ遠心力に逆らわず更に一回転する！
ギャッギャギャギャギャギャッ！
大剣の切っ先が地面に摩れ、派手に火花を散らす！
「アルデヴァィィィィィンッ！」
リタが愛剣の名を叫んだ。するとそれに呼応するかのように大剣アルデヴァインが燃え上がる！
火炎に囲まれ、長い金髪を靡かせて回るリタは神々しくすらあった。
そしてリタが跳んだ！

大剣の重さと遠心力を利用した強烈な斬撃を放つつもりなのだ。
上から禍魂、下からリタ。
その二点が激突する！
「これで終わりだ、ルクライルゥウ！」
「終わりなのはアンタの方よ！　くらいなさい！
アルデ・ブレイバアアァァァーーーーーーーーッ！！」
ズゴォオオオオオオオオオオォオォンッッ！！
爆発と閃光が炸裂する！
まるで花火のように夜の空を彩る。
「おわあああああっ！？」
悼矢はその爆風にあおられて吹っ飛ばされごろごろと地面を転がった。
これにはさすがにビルの下にいた人々も驚いた。いきなりビルの屋上が爆発したのだから当然だろう。
悼矢は起き上がってどうなったのか確認しようとした。するとちょうどリタと禍魂が着地したところだった。
なんとあの爆発でもなお二人は現存していた。
リタの大剣はしゅ～～と音をたてて白い煙をあげているものの傷一つつかず、月の光を反射している。そのことからもあの大剣が決して現界に存在するような類のものではないことが分かる。
だがしかし、その大剣を扱うリタははぁはぁと肩で息をしていた。あんな見るからに派手な大技を使ったのだから当たり前だろう。
対して禍魂の爪はどろどろに溶けていた。
それを見て禍魂はチッと舌打ちする。
「どうやら今夜は痛み別けのようだな」
「あーら、私はまだイケるわよ」
「ほざけ。これだけ派手に暴れたのだ。すぐに人がくる。騒ぎになるのはそちらとて嫌なはず。俺は退く。義理も果たした」
「義理？　アンタ……一体、どうして私を襲ったのよ！」
「……いいだろう。俺と渡り合えるとは将来が有望だからな。一つ

目の理由くらいは教えてやろう。もう一度やり合えるまでに殺されては面白くない。

ルクライル、お前えらく面倒なエーテル使いに好かれてるようだな……」

「……。……そういうこと」

リタは大剣を背中にかついだ。どうやらリタは禍魂の言葉で納得できたらしい。

「気づいたか。俺がお前を狙ったのはあの野郎にお前を生け捕りにしてきてくれと頼まれたからだ。あの野郎があれほどに執着するとはどんな奴か興味があってな」

「そう。ならそいつのとこに帰って伝えなさい。私はもうトウヤのものよ」

「ククク、奴が嫉妬で狂乱する姿が見える。じゃあな、ルクライル。次こそ決着をつけよう」

「待ちなさい」

「なんだ？」

「あんた、名前は？」

「グラントス」

そう名乗ると禍魂――グラントスは隣のビルへと跳んだ。

その姿が夜の闇に溶ける。

「逃がして良かったのか？」

「禍魂には二つのタイプがいると私は思ってるわ。殺すことを生き甲斐にしてひたすら虐殺を続ける本能タイプと強さを求めて殺し合う理性タイプ。あの禍魂は後者ね。いたづらに人間を襲ったりしないと思うわ。あくまで私の持論だけど」

禍魂の気配がなくなったのか、リタの手から大剣アルデヴァインが光の粒となって掻き消える。

「そうか……。

で、面倒なエーテル使いって誰だよ？」

悼矢は気になったことを問う。

「たぶん私が現界に来た時に最初に接触してきたエーテル使いのことでしょ。私を自分のエーテルにしようとしてたみたいだけど……。まさか禍魂とつるんでるなんてね。たしかに頭のネジが取れちゃってるような危なそうな奴だったけど」

「他のエーテル使いがお前を欲しがっていたのか……」

ふぅむと腕を組む悼矢。その事実に少し胸がもやもやとする。

「そいつだけじゃないわ。他に何人も私を自分のエーテルにしようとやってきたわ。どいつもピンとこなかったから断ったけど。中には力づくで自分のものにしようとする奴もいたけど、そんな信念のないエーテル使いに私が捕まるわけないわよね。

まあ、エーテル使いが私に寄ってくるのも当たり前じゃないかしら。美人で強くて頭もキレる、なんて天が三物も与えちゃってる私だし」

「要するに俺はとんでもない奴と組んじまったってわけか」

「恨まれるわね」

くっくっと楽しそうに笑う。

「そうだな……悩みの種が増えた。んで、これどうすんだ？」

悼矢は巨人が暴れた後のように破壊された屋上を見渡す。

「決まってるじゃない。逃げるのよ！」

リタがトウヤの手を掴んだ。

「お、おい……！」と悼矢が文句を言う前にふわっと体を浮遊感が襲う。

リタが跳んだのだ。

悼矢の手を掴んだまま。

「ぎゃあああああ！　こえええええええ！」

「っるさい！　手離すわよ！？」

悼矢は空中で思った。

もしかして自分はとんでもなく早まったことをしてしまったのではないか、と。

◇◇◇

少女はリタたちが戦っていた屋上の隣のビルの上に立っていた。
「……遅かったか」
悲惨な屋上の様子を見下ろして、ちっと舌打ちする。
少女が来た時には既に誰もいなかったのだ。
少女の隣には獣がいた。きらきらとした金色の鬣、指を通すとするりと抜けてしまうほどさらさらな毛並みのライオンだ。
「まだエーテル・エネルギーの残り火を感じるな。分かるか？」
少女の言葉にライオンは鼻をひくひくとさせ、口を開いた。
「禍魂とエーテルだ」
「どっちが勝った？」
「分からん。だが禍魂がイデアに還った臭いはない。しかしエーテルの臭いも残っている」
「どっちも生きているのか……珍しいパターンだな」
少女は腕を組んだまま、再度屋上の光景を見た。その破壊されたもろもろからしてかなりの激戦だったと予想される。
「どちらを追う？」
「決まってる。行くぞ」
少女がライオンに跨るとライオンはエネルギーの残り火を辿って跳躍した。

◇◇◇

「うっぷ。気持ち悪ぃ……」
悼矢は自宅の前で俯いた。

「ったく、だらしなわいねー。たかが五分の空中散歩くらいで……」
「あいにく俺は普通の人間なんでな。あんな高さを上下して脳みそシャッフルされたら吐き気くらいもよおすんだよ……」
悼矢はリタに肩を支えられて玄関を開ける。
「ほら、しゃんとしなさいよ！」
と、二人が帰ってくるのを予想していたのか玄関にはこよりが立っていた。
こよりは二人を見るととびっきりの笑顔になる。
「おかえりなさい」
その笑顔につられて二人も笑みになった。
「ああ、ただいま」と悼矢。
「ただいま、こより」とリタ。
悼矢は頬をぽりぽりと掻きつつ言った。
「あー、それでこより。リタが一緒にこの家に住むことになったんだが……」
「うんっ！　いいよ！」
こよりは即答した。
「い、いいよって……こいつ金も持ってないし掃除洗濯なんてきっとできないぞ？」
「そ、それぐらいできるわよっ！」
瞬時に反論するリタ。
「いいよー。だってそうなるんじゃないかなぁって予想してたし。リタさんみたいな家族が増えるなら大歓迎だよっ！
それより！　ご飯の途中だったでしょ？　すぐに温めるから食べようよ！」
言ってこよりはリビングに駆けてゆく。
「……あっさり許可が出て良かったな」
「ふふーん、あんなに嫌がってたのに私がここに住んでいいわけ？」
リタはむすっとしている悼矢の頬をつつく。
「っるせーな。契約した以上、なるべく近くにいないと不便だろう

がっ。
ほら、飯食うぞ！」
「は～い」
ずんずんと歩いていく悼矢の後ろをリタはまるでスキップでもするように浮かれた足取りでついて行った。

Ｄａｎｃｅ２　其の１

ちゅんちゅん……。
窓から眩しい光が入ってきていた。
「朝か……」
といっても春休みなので学校に行く必要はない。二度寝を決め込むのも悪くない選択ではないが、すぐにこよりが起こしにくるに違いない。
なので結局悼矢は身を起こすことにする。
ベッドで『ふあぁぁ』と伸びをして、眼をこすりこすり扉を開ける。
ばきばきっ！
と、不意に変な音がしてドアが外れてしまった。
「あちゃー。ついに壊れたか」
この家は古いのでいつかはこういう時がくるとは思っていたのだ。
蝶番を見ると完全に外れてしまっている。
（はあ……どうせ暇だし飯食ったら直しちまおう……）
悼矢は階下へ降りてリビングに入った。すると――
べきんっ！
とリビングの扉も壊れ、次いでばたーんっと床に倒れる。
「こっちもかよ！」と思わず叫んでしまう。
「ああっ！　悼矢ちゃん！　何してるのさ！？」
リビングにいたこよりが怒った表情でやってくる。
「いや、なにって俺は普通に開けただけだって！」
「もう……！　いつも物を乱暴に扱ってるからこういうことになるんだよ！」
「はい、すいません……」
悼矢はしゅんとなった。
「何よ……朝から何の騒ぎ？」

そこへ寝起きな感じのリタがやってきた。心なしか寝癖で髪の毛がくしゃくしゃになっている。

倒れている扉を見るとリタは納得した顔になる。

「この家、古いもんねー」

「そうだよ！　古いからこそ大切に使ってあげなきゃいけないのに！」

こよりはぷんすか怒っている。リタはしゃがみ込んで扉を見た。そしてあることに気づく。

「ちょっと……これ……蝶番が錆びてて壊れたってわけじゃないみたいよ」

「へ？　どういうことだ？」

しょぼんとしていた悼矢だが、それを聞くとリタと同じように扉の側にしゃがみ込む。

「ほら見て。錆びてない。それにこの取れ方は何か強い力で……」

リタは悼矢を見た。そして見るうちにリタの表情が驚愕の色へと変わる。

「トウヤ……あんた、それ……どういうことよ……」

「はあ？　それ？」

指をさされ思わず自分の体を見る。だが特に変わったところはない。そんな悼矢の様子を見てリタはテーブルの上に置いてあったリンゴを手に取った。すると無造作に悼矢に向かって放る。

「お、おい……！？」

悼矢は慌てて放物線を描いてとんできたリンゴをキャッチした。

その刹那！

どばんっ！

音をたててリンゴが爆発した。

「うおっ！？」

リンゴの汁で手をべとべとにしたまま呆然としている悼矢。それを見たこよりもまた唖然としている。ただ一人リタだけが何が起こったか分かっているようだった。

「やっぱり。信じられないわ。こんなことが起きるなんて」
何やらうーんと腕を組んで悩む素振りを見せる。
リタには見えているのだ。悼矢から立ち昇るエーテル・エネルギーが。
「何がやっぱりなんだよ？　黙ってないで教えてくれよ」
「トウヤ」
「おう」
「アンタ、今、すっごいバカ力の持ち主になってるみたいね！」
あっはっはと爽快に笑って悼矢の肩を叩く。
「うぉおい！？　なんだそれ！？　笑ってごま――」
文句を言おうとした悼矢の耳元にさりげなくリタがささやく。
「深い話をこよりに聞かれたくないでしょ。後で私の部屋に来て」
その声には真剣さが含まれていた。
「さあー、ご飯にしましょー。こより～、私もうお腹ぺこぺこよー」
「あ、は、はい！　すぐ並べますね」
「私も手伝うわ」
こよりとリタは台所へ消えて行った。その時、こよりが心配そうな、それでいて何かを言いたそうな視線でちらりと悼矢を見た。だがその視線に気づく者はいなかった。
その場に悼矢だけが残る。悼矢は自分の両手を不思議そうに見て呟いた。
「どうなってんだ……」

◇◇◇

ご飯を食べてこよりがせっせと掃除を始めた頃。
悼矢はこっそりとリタの部屋の前にいた。ちなみにこれは余談となるが食事中に悼矢は箸を折ったり、コップを握り潰したりと四

苦八苦していた。
　悼矢はそんな怪力になってしまった理由を訊きに来たのだ。
「おい、リタ……！　来たぞ！」
　小声で扉の向こうにいるはずのリタを呼ぶ。するとカチリと鍵が開く音がして、扉の隙間からリタが顔を出した。
「よく来たわね。さ、入って」
　促されるままに部屋に入る。
「それで俺がこうなった理由を話してくれるんだろ？」
「ええ。アンタがそんなことになったのはおそらく私と契約したことによる共鳴が発生したんだと思うの」
「共鳴だって？」
「立ち話もなんだし、座ったら？」
　言われ悼矢はカーペットにあぐらをかく。リタはテーブルを挟んだ向かい側に座った。
「エーテル使いが契約したエーテルの特徴を得たなんて前例は聞いたこともないけど……そうとしか考えられないわ」
「つまり俺がこんなバカ力になったのはお前と契約したからってことか」
　悼矢はそっとテーブルを掴んだ。徐々にだがどれくらいの力を使用すればいいのか分かってくる。しかし、どちらにせよ当分は慣れるまであまり物に触らないほうが良さそうだ。
「それにしてもこれでアンタの両親がエーテル使いって線が更に濃くなったわね」
「なんでそうなるんだよ」
　悼矢は怪訝そうな顔になる。
「あんたはエーテル使いの親から生まれた特異体質の人間。そう考えると辻褄は合うからよ」
「むりやり理由をはめ込んでるようにしか感じねぇよ」
「そうかしら。私は結構当たりだと思ってるんだけど……」
　リタはふと何かを思い出したかのように悼矢の腕を見た。

「そうそう。アンタに私と同じような怪力が宿ったのなら試さなくちゃいけないことがあるわ」
「？　なんだよ？」
リタはテーブルにどんっと肘をついた。
「腕相撲よ。私とアンタ、どっちの力が強いのかしらね」
好戦的に笑うリタ。
「お、おまえ……俺が勝てるわけないだろ！　つーか、お前も自分が勝つことくらい分かってんだろ！」
悼矢はリタがあの大剣アルデヴァインをぶんぶか振り回しているところを見ている。簡単に勝敗が想像できた。
「ふふふ……さあ？　どうかしらねぇ？」
（こ、こいつ、怪力を見せつけたいだけかよ……！）
仕方なくリタの自慢に付き合うことにする。テーブルの上で両者の手が組まれた。
「分かってると思うけど本気できなさいよ」
「ああ。やるからには全力を出すさ」と言いつつもあまりやる気になれない悼矢。
（どうせ一瞬で勝負はつくだろうし）
「ふふ、いい心意気ね。それじゃあいくわよ。レディ……ゴー！」
ギャン！
力と力がぶつかり合う音が聞こえたような気がした。しかし互いの位置から腕は一向に動かない。
「ちょわあああっ！」
リタはというとなんだか奇声を発しながら悼矢の腕を倒そうとしている。
（ん？　あれ？）
悼矢はすぐに違和感に気づいた。いつまで経ってもリタの押してくる力がこない。まるでクラスの女の子と腕相撲をしている感覚。
「ぬぬぬぬっ！　なにこれっ！　どうなってんのよ！」
リタがどんなに押しても悼矢の腕は動かない。

「リタ……それ力入れてんのか？」
「な、なんですってぇっ！？　入れてるわよっ！」
入れてるらしい。その顔を真っ赤にしていることから見ても、それは確かなようだ。
悼矢はクラスの女の子と腕相撲した時のようにひょいと腕を倒した。
リタは倒れた自分の腕を少し放心しながら見ていた。
「も、もう一度よ！　今度は本気を出すから！」
「あ、ああ」
再度、手が組まれる。
「いくわよ！　レディ……ゴー！」
しかし結果は同じだった。どんなにリタが力を込めようが悼矢の腕を動かせない。
とその時だった。
悼矢とリタが置いている肘のところから机にぴしりっと亀裂が走り、バキャッと音をたてて割れる。
「ぎゃああ！　テーブルがあああ！」
悼矢は頭を抱えて立ち上がった。
「こんなの有り得ないわ！　私が人間のあんたに力で負けるなんて！」
リタはリタで頭を抱えて嘆く。
「だけどよ……俺にエーテル能力がうつったっていうならこの結果も当たり前じゃないか？」
「どうしてよ！？」
「だって……エーテルによる筋力強化って面では俺とリタは同等なわけだろ？　なら後は俺とリタの基礎筋力の違いってだけになるんじゃないか？」
悼矢は割れたテーブルを部屋にあったセロハンテープでくっつけながら言う。
そんな悼矢を見ながらリタはベッドに座る。

「なにそれ。エーテル能力抜きなら元から私に勝てたって言うの？」
「まあ……そういうことになる。ってことはエーテル能力が使えなきゃリタもそこらにいる女子高生と同じってことか。そう考えると色々と納得できる面もある。あんな怪力なのに腕は筋肉質じゃないこととか。そりゃ多少は引き締まってると思うがな。
それと同時にエーテル・エネルギーがどれだけ強力なものかも理解できるな」
悼矢の言っていることはエーテル能力の的を射ていた。リタたちエーテルは普段からエーテル・エネルギーを使うことに慣れているせいで自分の基本運動能力を把握できていないきらいがあるのだ。
リタは手をあごに当て唸る。
「エーテル能力がなければエーテルも人間と一緒……。なんだか不思議な感じだわ。エーテル能力がない自分なんて考えたこともなかったし」
ぺたぺたとセロハンテープを張って無駄な努力をしていた悼矢がふと顔をあげる。
「待てよ。リタよりも力が強いということは俺も一緒に戦えるってことか？」
「頭がキレるかと思いきやそんな馬鹿なこと言って……。守る対象が最前線に出てどうする気よ。例えアンタが戦えるようになったとしても、自ら危険に飛び込むような真似をするべきじゃないわ」
「言われてみればそうだよな……。じゃあさ、エーテル使いはどうやってエーテルをサポートしてるんだよ。
お前、前に言ってたことあったよな。エーテル使いの役目はエーテルをサポートすることだって」
「……あら、庭の桜の花が開き始めてるわよ。もう春なのねぇ」
「おい、コラ」
ふらふらと窓の方へ行きかけたリタの肩をがしっと悼矢は掴んで止める。

「おまえ、まさか知らないんじゃないだろうな！」
「ええ、そうよ！　知らないわよ！　悪い！？」
「うっわ、開き直りやがった、コイツ！　信じられねぇ！」
「でもアンタの言うことにも一理あるわよねぇ。最前線で戦うとまではいかなくても自分の身を守るくらいしてくれたら私がだいぶ楽になるわね。これから危険も増すでしょうし」
何か考え込むリタ。
「よし、決めた。悼矢、あんたに強くなってもらうわ」
「おいおい……強くなるって言ったってどうやって……」
「決まってるじゃない。特訓するのよ」
リタはパチリとウィンクした。

Ｄａｎｃｅ２　其の２

悼矢とリタは庭に出てきていた。
「格闘技でもやるのか？」
「格闘技は一朝一夕で身につくものじゃないわ。それにエーテル・エネルギーをうまく扱えてないあんたに格闘技教えたって宝の持ち腐れでしょ。だからまずはエーテル・エネルギーに慣れてもらうわ。それだけでも生存率は格段と上がるはずよ」
「なんだ……特訓って言うから『ベスト・キッド』みたいなことすると思ってたのに……」
「べすときっど？　なによ、それ」
「昔の洋画だ。で、エーテル・エネルギーに慣れるのは分かったが、どうやって慣れるんだ？」
「エーテル・エネルギーに慣れてもらうのは急を要してる。次、いつ禍魂が襲ってくるとも分かってないんだから……。だから少し荒っぽいけど――」
ゴォオォオオォオ……！
リタの周りに陽炎が立ち昇る。
「私の攻撃を防ぐか避けなさい」
「おいおい、冗談だろ」と笑う悼矢。
しかし、そんな悼矢を無視してリタが地面を蹴る！
「って、こら！　せめてスタートの合図くらいしろべぎゃるば！？」

◇◇◇

「あー、夕日が赤い……」
悼矢は庭に仰向けになって倒れていた。

「気がついた？」
縁側にはリタとしらたまが座っていた。
体の節々が痛む。どうやら気を失っていたらしいことを理解する。
「このヤロウ……。本気でやりやがって……いててててっ……」
体を起こすと体のあちこちが悲鳴をあげた。
「本気？　まさか。ちゃんと手は抜いたわよ。自分の主を殺すわけにはいかないでしょ」
「ああ、そうかよ。それじゃあ感謝しなきゃな。おかげ様で傷だらけになるだけですんだ」
悼矢は生傷がついた体を見て肩をすくめる。
「嫌味を言う元気はあるみたいね。でもこれで分かったでしょ？　エーテルには勝てないって」
「まあな。俺がいくらエーテル並の運動能力を持っていても逃げ惑うのがやっとだ」
「それが分かればよし。生傷だらけになった甲斐があったわね」
「けどよ、もっと良いやり方ないのかよ。特訓の度にボコボコにされちゃかなわない」
と悼矢はリタを見る。だがリタは何かに気が付いたかのように空を見上げていた。
「？　聞いてるのか、リタ？」
「戦ってる」
不意にリタがそう呟いた。慌ててリタの見ている方向に視線をやる悼矢。
「戦ってる？　禍魂か？」
「分からない。でもかなり近いわ。行きましょ」
「行くってまさか見に行くのか！？　わざわざ自分から危険に近づくことないだろ！？」
「こういうの『虎穴に入らずんば虎子を得ず』って言うんでしょ。行くわよ！」
リタが悼矢の手をつかみ、地を蹴った。

体を襲う浮遊感。その地上で生きてればまず味あわない感覚に悼矢は叫んだ。

「またこれかあああああ！」

跳んでいく二人をしらたまは片目で見て『ふわあぁ』とあくびをし、また眠りだす。

◇◇◇

その方向に向かうとすぐに建設途中のビルがリタの眼に止まった。その人気のない中からエーテル・エネルギーの放出が見える。

「あれね！」

リタはそのビルの屋上に着地する。足が床についた瞬間、悼矢はその場で膝をついた。

「き、気持ち悪い……」

そんな悼矢を無視して下の階へと階段を走る。

そしてその光景を見た。

戦っているのは禍魂と金色のライオン――エーテルだ。ライオンの後ろには少女が立っている。

おそらく彼女があのエーテルのマスター。

戦況はライオンの方が圧倒的に有利だった。まずその熟練度からして違う。ライオンはかなり禍魂との戦闘経験があるようだ。余裕すら見え、戦いを楽しんでいる。

禍魂がライオンに蹴りを放つ。しかしライオンはあっさりとそれを上に跳んで避け、天井を蹴り、禍魂の顔面に頭突きを入れた。たまらず数歩下がる禍魂。

少女は言った。

「もういいだろ。かたをつけるぞ」

少女は腰につけた革のポシェットから紙切れを取り出した。

ライオンはまだもう少し戦いたそうだったがマスターがそう言うのでは仕方ない。

少女は体内に眠るエーテル・エネルギーを呼び覚ます。すると少女のサラサラの黒髪がゆらゆらと揺らめき、彼女の周りの空間が陽炎のようにぼやける。

そして少女は取り出した紙切れを宙に投げ、右手を禍魂にかざした。

「エーテル・カード、オン！　“ダブラトスの呪縛”！　あの禍魂を押さえつけろ！」

瞬間、紙切れからもくもくと闇色の煙が放出され空間が弾けた！

その歪んだ暗い空間から無数のねずみ色した手が伸びて禍魂の手を足を頭を首を、その体の節々を掴む！

禍魂は必死にその手から逃れようとするが無駄なことだった。どんなに手を引き千切ろうと、手は一瞬で再生し増殖する。ついには禍魂の自由を奪ってしまった。

「やれ」

少女が短く命令した。するとライオンがとんっと背後の壁に向かって跳んだ。壁に着地するとぐぐぐっと全身のバネを収縮させるように体を縮こませる。そしてその貯めた力を一気に解放した！

ドバンッ！

壁が粉砕される。それほどの脚力から生み出されたスピードは凄まじいものだった。今まで戦っていたスピードとはまるで違う。リタにでさえライオンが消えたようにしか見えなかった。

ライオンの体が金色に発光し、光の線になる！

リタが見えたのはその光の線。ライオンの体をエーテル・エネルギーが包んだのだろう、その発光しか見えなかった。

ぼんっ！

何かが穿たれた音。

ライオンは既に禍魂の背後にいた。ライオンの体から金色の光が消える。

まさに一瞬の出来事だった。
禍魂がどうなったのかリタが見ると、どてっ腹に大きな穴が開いているではないか。禍魂の強靭な肉体を貫通するほどの威力。しかも禍魂のすぐ背後の地面からライオンがブレーキをかけてついたのであろう爪痕がある。それはまだまだ余力があったという意味だ。
「バ、バカなっ……」
禍魂の体が光の粒子に分解されていく。その光をライオンが体内に吸収する。そして一体何なのか禍魂が立っていた場所にクリスタルがカツーンと音をたてて床に落ちる。
「エーテル使いのサポートとエーテルの持つ決定技の連携……。こんな風にして戦うのがエーテル使いなんだな……」
気づけばリタの隣には悼矢がいた。
「あら。もう気分はいいの？」
「いや、まだ気持ち悪いぞ。吐いてもおかしくない」
「私の見える範囲で吐くのはやめてよね」
「おまえ、もうちょっと自分のご主人様を心配したらどうなんだ」
そんなことを言っているうちに少女はきらきらと七色に光るクリスタルを拾う。
「……。フン、目的の禍魂とは別ものだったようだな」
「ああ、せいぜいCマイナス。あの程度の力量では昨夜の惨状を作れまい」
「さて」
そう呟くと腰まで届く長い黒髪を靡かせて少女はこちらに振り返った。
どうやら最初からリタと悼矢がいることに気づいていたらしい。
少女はかなりの美人だった。百人の男に訊けば百人の男が美人だと答えるだろう。それほどの美しさ。しかもそれとは別にクールな格好良さみたいなものを悼矢は感じた。
服装は腕まくりした白のブラウスに黒とねずみ色したチェックのミニスカ。腰には黒のカーディガンを巻いている。それほどの美女

と眼が合い。どきりと悼矢の胸が高鳴る。しかし少女は悼矢を見るというよりも睨んでいた。
「お、おい、リタ。めっちゃ不機嫌そうにこっち見てるって。帰った方が良さそうだぞ」
そう相方に囁いてからへらへらと悼矢は笑顔をつくった。
「あ～、俺たち何も見てないんで。ほら、行くぞ、リタ！」
だが少女は予想に反して悼矢を引き止めた。
「待て」
「へ？」
「貴様、エーテル使いだろ」
「あ、ああ。一応はそうなるけど」
「おまえ、どっちの味方だ？　答えによっては……」
少女は腰の革ポシェットから紙を取り出す。
その質問にリタと悼矢は互いの顔を見た。
「どっちって何の話だ？」
悼矢の言葉に少女は怪訝な顔をする。その様子を見てライオンが渋い声で言った。
「とぼけているわけではなさそうだ。どうやらエーテル使いになったばかりらしいな」
ふぅと深いため息をつくと少女は背を見せて歩き出した。
「あ、おい……！　待てよ！　どっちの味方ってどういうことなんだよ！」
だが悼矢の問いには聞く耳持たず、少女は黒髪をかきあげてライオンに跨る。そしてそのままどこかへ跳んでいってしまった。
「一体なんだってんだよ……」
「分からないわ。どうやら私たちが知らない何かが起こっているみたいね」
ごおぉぉおおぉぉぉ……。
一陣の風が吹いた。
まるで悼矢とリタの背中を押すかのように、風は吹き続けていた。

Ｄａｎｃｅ２　其の３

「悼矢ちゃん！？　いつまで寝てるの！？」
こよりに叩き起こされたのは翌日の朝だった。
「な、なんだよ、こよりぃ～。もうちょっと寝かせてくれよ……」
はがされた布団をかぶりなおす悼矢。
「何言ってるの！　遅れちゃうよ！？」
「遅れる？　遅れるって何にだよ……」
「何って……今日は始業式なんでしょ！？」
「し……ぎょうしき？」
悼矢は布団から顔を出した。
「こより、今日何日だ？」
こよりは無言でカレンダーを指差した。そこには四月七日の文字。
悼矢の記憶が間違っていなければ始業式の日だ。
「ちなみにもう八時四〇分だからね」
始業式が始まるのは九時。片桐家から学校までは歩いて一五分、走っても一〇分はかかる。つまり用意する時間が五分から一〇分しかないってことだ。
「うわあああああああああああああ！」
悼矢は頭を抱えて叫ぶと、転げ落ちるようにベッドから出た。
「こより！　朝飯は！？　いや制服は！？」
「ぬかりないよっ！　制服はリビング！　朝ご飯はもうできてるよ！」
「さすがはこより！　頼りになる！」
悼矢はリビングに走りこむと、ばっぱっと服を脱ぎ始める。
「あれ？　悼矢、起きたの？　今日ははや――」
既に起きてテレビを見ながらコーヒーなんぞ飲んでいたリタは、トランクス一枚になった悼矢を見てブフッとコーヒーを噴く。
「ちょ、ちょっとアンタ！　着替えるなら自分の部屋に行きなさい

よ！」
赤面して扉の向こうを指差すリタ。
「断る！　今は緊急を要するんだ！」
制服のズボンを履きつつ悼矢は言った。
「じゃあせめて私の見えないところで着替えてよ！　ほら向こう行った！」
「うわっ！？　ばかっ押すな！」
片足をあげている状態で押され、悼矢はもろにバランスを崩してしまう。そしてそのままリタの方向へ倒れていく。
「ちょっと！　なんでこっちにきゃあああああっ！」
どてーん！
「い、いつつつ……」
悼矢は頭を振って視界を鮮明にした。そして自分の状況に気づいてげっと呟く。なんと悼矢はまるでリタを押し倒したかのように上に倒れていたのだ。しかも手をついたのがお約束のようにリタの胸の上だったりする。
「こ、こ、こっ……！」
リタは耳まで真っ赤にしてぷるぷると震えている。
それに気づいて悼矢はなんとか言い訳しようとした。
「さ、さすがリタ！　優秀なエーテルだなっ！　ない胸で……じゃなくて体を張って主を守るとはなっ！」
しかしどう考えても逆効果だった。さらに運の悪いことにそこへこよりがやってきた。
「悼矢ちゃん、もう着替えた――ってなにしてるの悼矢ちゃん！！」
ガシャーンと持っていたおぼんを床に落とすこより。
「いや違う！　違うぞ、こより！　それはマッハ２で勘違いだ！」
「悼矢ちゃん！　そういうことは同意の元にやらないとダメだよ！　むりやりだなんて……最低だよっ！」
悲痛に叫んで眼を潤ませているこより。心なしか悼矢から半歩退いている。

「こよりさん、こよりさんっ！　違うんです誤解なんです神の悪戯なんです！　てゆーか、俺にも相手を選ぶ権利くらいあるっての！」
瞬間、その言葉を聞いたリタの眼がキッとつりあがる。
「こ、こ、このバカ主いいいいいいいッ！！」
「ぷがちょふっ！？」
リタのアッパーカットが悼矢のアゴにクリーンヒットするのだった。

◇◇◇

悼矢はとぼとぼと学校に向かって歩いていた。こよりが準備をすませていてくれたおかげで少し余裕すら出た。もしかしたらリタに家から叩き出されたという理由も関係しているかもしれないが。どちらにしてもしばらくは家で肩身狭い思いをしそうだ。
「はあ」
自然と重いため息がでる。
（うぅ……最近、俺ため息ついてばっかだなぁ……）
本気で泣きそうになった。
「なんだなんだぁ？　朝から辛気臭いな」
その声に振り返るとそこには知った顔があった。
七橋錬太郎。悼矢は錬太郎と中学生の時に知り合った。悼矢とはなぜかソリがあってそれからは幼い頃からの親友であったかのように二人でつるんでいた。
「錬太郎ぉ～！　俺にはもうお前しかないんだぁ！」
「うわっ！　くっつくな！　うっとおしい！」
抱きつこうとした悼矢の顔を押して引き離そうとする錬太郎。
「いや、すまん。久しぶりにお前の顔を見たらつい……」
「あー、なんだ。俺はそっちのケはないぞ。むしろ俺はお前が嫌い

だ」
「それは良かった。お前に好きになられても困る。むしろ俺もお前が嫌いだからな」
バチバチと悼矢と錬太郎の視線がぶつかりあった。
決して仲が悪いわけではない。むしろツーカーの仲なのだが。本人を目の前にして言うのも恥ずかしいので二人はこうして照れ隠しに罵り合ったりするのである。
なので二人はすぐに何もなかったかのように歩き出した。
「お前が凹むなんてまぁたこよりちゃんに嫌われるようなことしたのか？」
錬太郎は何度も片桐家に遊びにきているのでこよりとも顔馴染みだった。
「まあ、そんな感じ……？」
「何があったかあえて聞かないが元気出せよ。今日は始業式だ。俺たちには新たな出会いが待っているんだぞ？」
ぽんぽんと優しく肩を叩いてくる。
「それもそうだな。今年こそ可愛い彼女を見つけてバラ色の学園生活をしてやるっ」
とは言ってみるもののエーテルや禍魂のことを考えるとそんな平和な生活は無理そうだが。
二人はなんだかんだと高校一年生の時の思い出話をしながら校門をくぐる。すると校門から少し行ったところで人だかりができていた。クラス発表の掲示板を見ている人たちが集まっているようだ。
「すごい人の量だな。ありゃ見に行くのも一苦労だぞ」
「今年こそ違うクラスになれるといいがな」
悼矢と錬太郎は中学一年の時に同じクラスになってからずっと去年まで同じクラスだったのだ。
「錬太郎、俺のクラス見てきてくれよ」
「悼矢、俺のクラス見てきてくれよ」
二人が言ったのは同時だった。そして互いに対峙して右手を出す。

そして――

『じゃんけん、ほい！　ほい！　ほい！』

「……片桐くん、七橋くん、こんなことろで何してるの？」

そこへ新たな人物が声をかけてきた。

本田睦月。それが彼女の名だった。耳の辺りからウェーブがかった髪が肩まで伸びていて、ぱっちりとした大きな眼に小さな唇の童顔。その可愛らしい顔もさることながら、穏やかで優しい性格から男女関係なく人気のある女子生徒だ。去年は悼矢、錬太郎と同じクラスだったので互いに知った仲だ。

「お、睦月ちゃん。おはよ」

「おはよ～、七橋くん。片桐くんもおはよっ。久しぶりだね」

「えぇい、本田！　男の戦いを止めてくれるな！」

「男の戦いってただのじゃんけんじゃない……。んー、何のじゃんけん？」

頬に人差し指をそえ首を傾げる睦月。

「今こいつとどっちがクラス発表の掲示板を見に行くか戦ってたんだよ」

錬太郎の言葉に睦月はきょとんとした顔で言った。

「二人とも三組だよ？」

「あっ！　くそっ！　また錬太郎と同じかよ！」

「それはこっちの台詞だ。俺の恋人作りの邪魔はするなよ」

バヂバヂ！

悼矢と錬太郎が睨みあっていると、睦月がくいくいと悼矢の制服の袖を引っ張った。

「？　どうした？　トイレか？」

「ち、違うよ～！　私もクラス一緒なのっ」

顔を赤くして言う。

「ほんとに？　また睦月ちゃんと同じクラスだなんてラッキーだなぁ」と爽やかに笑う錬太郎。

どう考えても悼矢に対する態度のそれとは違う。

そんな優男じみた素振りが女の子に人気があるというのだからほとほと悼矢は納得できなかった。

「まあ、なんだ。クラスも分かったことだし、教室に行こうぜ」

そうして三人は今年の担任の先生の噂をしながら歩いて行った。

◇◇◇

教室には一種独特の雰囲気があった。どういう風に説明すればいいのだろうか。新たな生活が始まるという期待感と周りに知らない人たちがいるという少し緊張した空気。そんな新鮮味のある空気が教室を包んでいるのだった。

だが仲良くなったのか早々と隣の席の人と話しているのもちらほらと見かける。

馬鹿をやっていたせいか教室にはもうほとんどの生徒が揃っているようだった。悼矢は教室を誰か知り合いがいないか見渡してみるが錬太郎や睦月以外にはいなかった。

睦月は他に知り合いがいたらしく女の子同士で談笑している。すると必然的に悼矢と錬太郎が二人になるわけで。仕方なく二人で他愛もない話をした。

「いやいや、どう考えてもポン酢とマヨネーズはないだろう」

「それが結構イケたりするんだぜ？」

ちなみに話題は革新的なカップラーメンの食べ方についてだった。

もうチャイムが鳴るという時に一人の女子生徒が教室に入ってきた。

その人物を見た錬太郎が驚く。だが驚いたのはどうやら錬太郎だけではないらしい。ざわりと教室内――特に男子生徒がざわついた。

「おいっ！　見ろよ、八神きづながきたぞ！」

「おお、本当だ。にしても……ごくり……相変わらす可愛いな……」

「ああ……。あの顔にあのスタイルじゃ一〇〇人の男をフッたって話もあながち噂じゃないかもな……」
「付き合う？　お前が？　無理無理！　鏡を見ろよ！」
「な、なんだとー！」
そんな声が聞こえてくる。
「今年はほんと大当たりのクラスだなぁ。まさかあの八神きづなと同じクラスになるとは……」
錬太郎が幸せそうな顔で呟く。
「八神きづな？　誰だよそれ？」
「ったくこれだからお前はいつまで経っても彼女ができないんだよ。可愛い女の子はチェックしとけよ」
さも当たり前のように言うのも間違ってると思うぞ、と悼矢は内心でツッコミを入れた。
「あの有名な波科高校三大美女の一人だぞっ！　いいか？　八神はな……鉄壁の美女なんだよ。どんなイイ男が口説いても靡かないんだ。八神にあたって砕けた男は数知れず」
「波科高校三大美女なんて聞いたこともねぇよ。俺はまずそんなことを言い始めたのが誰なのかツッコミたい」
「そんなセンスあることを言ったイケメンなんて誰でもいいだろ！」
（……おまえかよ）
悼矢は頭が痛くなった。
「論より証拠だ！　お前も見れば分かる！」
そう言うと錬太郎は悼矢の頭を掴んでぐいっと八神きづなの方向へ向けた。
悼矢の視界に確かに美しい少女が目に入った。かなりスタイルのいい体つき、サラサラの黒髪は腰まで伸びて彼女が歩くたびに揺らめく。
（あれ？　あいつ、つい最近どこかで見たような……）
その瞬間、悼矢の頭に雷が落ちる。
思い返されるのは昨日の出来事。

黒髪を揺らし魔法みたいなものを禍魂に放った少女。
（アイツ！　あのエーテルのマスターじゃねぇか！）

Ｄａｎｃｅ２　其の４

「おーい、どうした悼矢。惚れちまったか？　おーい」
きづなを見て固まっている悼矢の前で手を振っている錬太郎。そんな錬太郎の行動など目に入っていないかのように悼矢の視線は八神きづなに注がれていた。
きづなは他の人間に興味はないのか、誰と話すこともなく一直線に窓側の席についた。そして肘をついて窓の外を眺める。
これから一年、勉学を共にする仲間だというのに教室内を見回すこともしない。
それもそうだろう。きづなにとって誰がクラスメイトであろうが関係ないことであった。彼女にとってクラスメイトなどＲＰＧゲームの村人Ａ、Ｂと大差ないのだ。
「れ、錬太郎！　あ、あいつ……！」
「ああ、あの子が八神きづなだ。無愛想で人を寄せ付けない感じだけど、そのクールさがグッド！」
親指をたてる錬太郎。
「いやそうじゃなくてだな！　ああ、もう、どう説明すりゃいいんだよ！」
頭を抱える悼矢。その肩に錬太郎はいやらしい顔でぽんっと優しく手を置く。
「みなまで言うな。俺は応援してやるぜ？」
「ちげーよ、このボケ！」
ＨＲはすぐ終わった。教科書を配ったり、担任が高校二年生は中だるみがどうのと話していたが悼矢の耳には届いていやしなかった。その理由は言うまでもなく悼矢の意識はずっときづなにあったからだ。
ちらりときづなの方を見ると、きづなも話を聞く気はないようでずっと窓の外を見ていた。

さあああぁぁ……。

窓から入ってくる春風が彼女の黒髪をさらさらと揺らす。美人は何をしていても絵になるとはよく言ったもので、その様はまるで一枚の絵画のようだった。

教室内の男子たちが酔いしれたように『ほぅ』と熱いため息を吐いたような気がした。

そんな中で一人だけ他の男子生徒たちと違うため息を吐いてる者がいた。

言うまでもなく悼矢である。

（あの時、八神きづなは何か普通の人間にはできないようなことをしていた……。紙切れを放って、何かを唱えた。……ありゃまるで魔法……。

だがおそらくあれがエーテル・エネルギーを利用したエーテル使いの戦い方なんだろう。エーテル使いはああやってエーテルをサポートしているんだ。それを俺が使えるようになれば……リタをサポートしてやることができる……！）

情報が欲しい。だが悼矢がきづなに訊きたいことはそれだけではない。いやむしろこちらの方が気になっていた。

それは彼女が去る前にした質問――

『おまえ、どっちの味方だ？』

（どっち……。考えられるのは“禍魂”と“人間”？　いや“禍魂”と“エーテル”か？　いやいや、それだとおかしい。そもそもエーテル使いは“エーテル”の味方じゃないか……。くそっ、まるで分からねぇ……！）

あの質問の意味も突き止めなければならない。エーテル使いとなった今、いち早く今の状況を知らなければならないのだ。

きづなはＨＲが終わると鞄を掴んでそのまま帰ろうとした。なんと素早い行動だろうか。よほど学校にいるのが嫌いなのかもしれない。

しかし帰らせるわけにはいかない。彼女を追うべく悼矢も鞄を掴

んだ。
　とそこで見知らぬ男子生徒がきづなに声をかける。
「八神、映画興味あるか？　いま面白い映画やってるらしいんだ。良かったら一緒に――」
「興味ない」
　きづなは男子生徒の顔さえ見ず端的に言って、つかつかと出口に向かう。
　声をかけた男子生徒はあまりにきっぱり断られすぎたせいで、頭の理解が追いつかず笑顔のまま固まっていた。
「うわ、一刀両断」
　それを見ていた錬太郎はひぇーと声をあげた。だがきづなになんとかお近づきになろうとする男子生徒はそれだけではなかった。
「八神、昼飯食いにいかないか？」
「行かない」
「八神、今度の日曜日あいてる？」
「あいていない」
　きづなはその申し出のすべてを相手の顔さえ見ずに一瞬で突っ返していた。
「な？　鉄壁だろ？」となぜか自慢げな錬太郎。だがしかしこんなことで戸惑っている暇はない。悼矢はどうしてもきづなの持つ情報が欲しいのだ。かと言ってこの場では注目を集めるし、話を聞かれるのはまずい。
「俺も帰るわ」
　悼矢は錬太郎にそう言った。
「飯食いに行かないのか？」
「まだこよりは学校始まってないからな。きっと昼食作って持ってる」
「それなら仕方ないな。おまえの優先度はダントツでこよりちゃんが一位だからなぁ。
　じゃあ、またな。シスコン」

「てめっ、明日ぶん殴る！」
錬太郎と別れを告げると悼矢は八神きづなを追った。
きづなは廊下でも声をかけられていたが無視してすたすたと歩いていく。どうやらいちいち反応するのも面倒になったらしい。
悼矢はあんな奴から情報を聞きだすことなんてできるのかよ、と思わず弱気になる。
（いや……まだ接触もしてないじゃないか……。諦めるのは早すぎる）
きづなは下駄箱で靴に履きかえると校舎裏の方に向かって行った。
（あいつ、どこに行く気だ……）
ここの生徒が家に帰る方向はみな等しく正門からのはずだ。と、言うのも校舎裏はただの山なのだ。裏門があるにはあるのだが、其の先は山道になっているためわざわざ面倒な思いをして裏門から帰る人間もいない、というわけである。
悼矢はきづなに続いて校舎の角を曲がってみる。そして驚いた。
「！？」
そこは焼却炉がある場所だった。こじんまりとして他には何もない場所。ゴミを出しにくる以外にここへ来る者はいないだろう。
そこにきづなは腕を組み、こちらを向いて立っていたのだ。
まるで悼矢がくるのを待っていたかのように。
「尾行するならもっとうまくやるんだな」
特に表情を作らずにきづなはそう言った。
悼矢は米国人のように両手を空に広げてお手上げのポーズをとった。
「まさかバレてるとはな。けどその分だと俺のことを覚えてるみたいだな……。それなら話は早い。昨日のことについて訊きたいことがあるんだ」
「？　昨日？　誰だ、貴様」
覚えていなかった。
少しショックを受けてしまう悼矢。

「昨日会ったろーが！　建設途中のビルで！　禍魂と戦ってたろ、お前！」

しばしの沈黙の後、

「……あの時のエーテル使いか。……何の用だ？」

「だからお前が俺にした質問の意味を聞きたいんだって」

「……。……答えると思うか？」

きづなの鋭い視線に思わずひるむ悼矢。

（うぐっ。ここで引いちゃだめだ。多少強引にでも情報を引き出さないと……）

悼矢はなんとか気を持ち直して質問した。

「質問は二つ。まず一つ目、おまえが禍魂にやった魔法みたいなことについてだ。二つ目はおまえが俺に言った『どっちの味方だ？』って質問の意味をききたい」

きづなはこれ見よがしにため息をついた。

「お前は何か勘違いしているようだな」

「なんだと？」

「私はおまえの味方じゃない。つまりお前に教える必要はないということだ」

「何言ってるんだ……。おまえエーテル使いだろ。なら味方も同然じゃ――」

そこで悼矢はある違和感を感じた。そしてあることに気づいて『あっ』と声が漏れる。

（そうか……！　なんてこった！　そういうことかよ……！　八神が言った『おまえ、どっちの味方だ？』って台詞……！　やっぱりおかしい！　エーテル使いにとっての敵は禍魂なはず……！　けどそれだけなら同じエーテル使いにそんな疑問をぶつけるはずがない……！　あの質問を八神がする理由は一つじゃないか……！）

悼矢の額に脂汗が滲む。

「エーテル使い同士でも対立があるっていうのかよ……！」

これは完全に予想外。共通の敵がいるというのにまさか人間同士

でも争っているなんて悼矢は思いもしなかったのだ。
「……。ただの間抜けというわけではないようだな」
「どうしてなんだよ！　何が起こっているんだ……！」
「この場で話をした場合、おまえが私に敵意を持つとも限らない。自分の眼で確かめるんだな。だが自分で気づいた褒美に最初の質問には答えてやる」
きづなはポケットから数枚の紙切れを取り出して、悼矢に渡した。
悼矢はまじまじと紙を眺める。その紙には中央に何かを表す絵と至るところに解読不明な文字が書き込まれていた。
「それはエーテル・カード。そう呼ばれるものだ」
「こんな紙切れであんなことができるのかよ」
裏返してみるとカードの名前とその効果説明が日本語で書かれていた。
『“スタンボルト”。対象の身体機能を麻痺させる電撃を放つ』
「エーテル・カードはエーテル・エネルギーを通すことで発動する。その紙にはその効果を可能にするための術式が刻まれているんだ。人間は元からエーテル・エネルギーを持っていてもそれを能力に変える仕組みを体に持っていないからな。それを可能にしたのがこのエーテル・カードだ」
「これがあれば一時的にエーテルとお同じことができるってわけか……」
不思議そうにカードを眺める悼矢。
「お前がカードのことをどういう風に感じたかは知らないが、同じことができるというのは勘違いだ。エーテル・カードは所詮エーテルたちが持つ能力の真似事。オリジナルに勝てはしない。エーテル使いは悪魔でエーテルたちのサポート役だ。例えば筋力強化などのそれ自体を強くする強化系カードは人間に適用されない」
「どうして？」
悼矢はきづなにカードを返しながら問うた。
きづなは腰のホルスターにカードを入れ、答える。

「さあな。おそらく人間がエーテル・エネルギーを扱う機能を持っていないことに関係しているんだろう。それに何かを強化したところで人間の体はそれに耐えうる体じゃない」
「そりゃそうだ……。例え筋力を強化して禍魂を殴ってもこっちの拳は脆いからダメージを受けるのはこちらの方だもんな……」
そこでふと悼矢の頭にある事が思い浮かんだ。
（いや、待てよ。それじゃあ、やっぱり俺の体はかなり特殊な状態ってことか……。リタが驚くのも納得だな……。こりゃ俺の体のことを八神に相談した方がいいか？）
悩む。どうするのが正解だろうか、と。自分の体がなぜこうなっているのか知りたい気持ちはもちろんある。だがエーテル使い同士は争っている。それは目の前の少女が敵になるかもしれないという意味だ。そう考えると――
（……いや、今は止めておこう。相談するにしてもリタに許可をとってからだ）
「それ、おまえが作ったのか？」
「まさか。これらは私のエーテルが持っていたものだ。ＡＥＳＳ【エイス】から買ったものもあるが。カードは消耗品ではなく装置。使用すれば各カードに設定された冷却期間がおとずれる。その間はもちろん使えないが、冷却が終わればまた使うことができる」
効果はオリジナルに劣るとはいえ、一度手に入れれば半永久的に使えるエーテル能力。これは人間にとっても禍魂にとっても脅威的だ。エーテル使いの強さはこのエーテル・カードの種類をどれだけ多く所持しているかということが大きく関わる。もちろんそれだけでエーテル使いの質が決まるわけではない。いやむしろエーテル使いにとって大事なのはエーテル・エネルギーのキャパシティ。
これにある。
人それぞれエネルギーを貯めておける総量は異なる。さらにカードは注がれたエネルギー量によって強弱する。つまりエーテル使いＡがエネルギー一〇〇を注いだカードとエーテル使いＢがエネルギ

ー三〇〇注いだ同じカードではBがAを打ち負かすという結果になるのは予想に固くない。このことから分かるとおり、エーテル使いにとってエーテル・エネルギーのキャパシティこそ彼らの強さを表す一種のステータスなのだ。

「お前が聞きたかったことには答えた。私はもう行くぞ」

その時、どこにいたのかライオンのエーテルがきづなの隣に着地した。そしてきづなはライオンにまたがる。

「あ、こら！　待てよ！　まだどうしてエーテル使い同士が争っているのかきいてないぞ！」

「一つヒントをやろう。夜、街に出てみろ。あとはお前の鼻で分かる」

そう言い残してきづなはライオンと一緒に跳んでいってしまった。

「鼻で分かるって……本当かよ……」

悼矢はきづなが跳んでいった方をちらりと見て家路についた。

◇◇◇

「どういう風の吹き回しだ」

屋根から屋根へと跳んでいると急にライオンのエーテル――レオがそんなことを言った。

「何がだ？」

きづなは風を感じながら問い返す。

「優しすぎる。普段のお前なら何も教えない」

レオの言うとおりであった。きづなは人と話すことを根本的に嫌う。それは彼女が口下手という理由もあるが、それよりも他人に興味がないからだ。他人がどんな事を話そうと、どんな事で困っていようときづなは興味がない。そんなきづなが何の理由もなく他人に情報を与えるのは珍しいことだった。

「……。……そうだな」
「気になるのか？」
「……。昨日は気づかなかったが、あの男はどこかそこらのエーテル使いと違う感じがした」
そう違う。何か違和感をきづなは感じていた。それが何かは分からない。だがあの男が持っているエーテル・エネルギーは人間の持つそれと何かが違う。
「そうか？　俺は何も感じなかったが」
「レオが分からないのも無理はないだろう。これは私の直感だからな」
「直感か。そんな不確かな事で態度を変えるとは……。人間というのは厄介だな。何を考えているか俺には理解不能だ」
「同感だ」

Ｄａｎｃｅ２　其の５

家に帰るとリタがリビングのソファで眠っていた。すーすーと静かな寝息が聞こえてくる。

「ったく、こんなところで寝やがって……」

悼矢は毛布をとってくるとリタにかけようとした。と、その時。

「ん、んぅ～～」

リタが寝返りをうった。そのせいで服がはだけてちらりと胸元が見える。

どきっ！

悼矢とて年頃の男の子だ。異性のそんなあられもない部分を見れば嫌でも心拍数が上がる。

（いやまてまて。落ち着けよ、俺。相手はリタだぞ……？　リタなんだよ……リタ……なんだけどコイツ……）

悼矢はリタの顔を覗き込んだ。

（こうやって黙ってれば可愛いんだよなぁ）

長い睫毛、すっと通った鼻筋、渇きを知らない潤った唇、肌は白くすべすべしている。一見するとまるで眠り姫だ。

「んぅ～～、トウヤ～～、むにゃ……」

（リタのやつ俺の夢を見ているのか……。なんだかんだ言っても俺は主だもんなぁ。可愛いところあるじゃないか……）

自然と顔がほころぶ。

「さっさと紅茶もってきなさいよぉ」

ピキッ。

パシられていた。額に青筋がたつのが自分でも分かる。

「やっぱ可愛くねぇ……」

夢の中でパシリをされた代わりに現実で少し悪戯をすることにする。

悼矢はそっと指でリタの鼻をつまんだ。

「う、う〜ん……」
リタの眉間にしわができる。
「お〜、苦しそう苦しそう」
だがそのうち口が開いてそっちで呼吸を始める。リタの唸りもそれで落ち着いた。
「あ、くそっ！　こしゃくな！」
逆の手でリタの口を押さえようとしたまさにその時。
リタの眼がぱちりと開いた。
悼矢と眼が合い、視線を落として自分の状況を見るリタ。
「な、なにしとんじゃあああああ！」
リタの右フックが悼矢の頬を打った。
「ぎゃらくしー！」
悼矢は吹っ飛ばされてリビングの床に転がる。
「まったく、もう……。いいところだったのに起こしてくれちゃって……」
リタは上半身を起こすと金色の髪をかきあげ、背中に流して整える。
「いいところっておまえ俺をパシってる夢見てただろ」
「なっ！？　なんであんたがそんなこと知ってんのよ！？」
リタはびくっとなって枕にしていたクッションを抱きしめた。
「いやおまえ寝言で言ってたから。さぞかしご主人様をアゴで使うのは楽しいんだろうな」
「あ、あはは。それはなんてゆーか……不可抗力？」
「……どうだかな。ところでこよりはどうした？」
「洗濯物干してると思うわよ」
「そうか。それならちょうどいい。話しておきたいことがある」
悼矢の言葉に真剣みが混ざっていることに気づき、リタの顔が真剣になった。
「こよりに聞かれちゃまずいってことは……エーテルに関係する話ね」

「ああ。昨日会ったライオンみたいなエーテルのマスター。あいつと学校で同じクラスになった」
「な、なんですって!?」
悼矢はきづなとした話をリタに聞かせた。最初は興味深く聞いていたリタだが徐々にその眼の色が変わっていく。
「エーテル使いの対立……こんな時に」
そのリタの声には苛立ちと怒りが含まれていた。
その気持ちは悼矢もよく理解できる。
「理由までは分からなかったがな。とにかく八神の言うとおり今夜、街に出てみようと思うんだが」
「願ってもないわね。私も悼矢にそうしてもらおうと思っていたし」
「思ってたって……おまえ、何か知ってるのか?」
「禍魂が活発に動くのは夜よ。あいつらのでかい図体を闇に隠せるから禍魂が夜を好むのは当然でしょ。その禍魂と戦いたいなら夜の街に出ればいいっていう考えもまた必然じゃない」
「なるほど、そりゃそうだ。じゃあ今日の夜は街まで出てみるか。俺たちは知らないことがあまりにも多い。何をするにも早めに行動した方がいいだろ」
「おっけ~」
「あ、悼矢ちゃん。帰ってたんだ?」
こよりがリビングにやってきた。
「新しいクラスどうだった?」
「錬太郎とまた同じクラスになったよ。ほんと腐れ縁だ」
「あはは、良かったじゃない。知ってる人がいないよりはマシだよ~」
(こより、さりげなくひどい言い様だな)
「ご飯食べてきちゃった?」
「いんや、食べてない」
「良かったぁ~! 悼矢ちゃんの分もちゃんと作ってるから安心してね」

「ああ、ありがとな」と笑顔で応える悼矢。
こよりはその笑顔を見るとえへへ～と笑って台所に入って行った。
「……シスコンとブラコン」
「ああ？　なんか言ったか？」
ぎろりとリタを睨む悼矢。
「いいえ、なんにも～」
そう言ってリタはばふっとソファに体を預けた。

◇◇◇

夜。悼矢は部屋で身支度をしていた。といっても武器を用意するとかそんなことをしているわけではないが。
街に出て何が起こるかは分からない。だが悼矢は何かが起こる気がした。それは予想とか予測ではなく、予感とか直感。確かに街に出てどうなるんだという疑問はある。だが八神が言うからにはそれなりの理由があるのだろうと悼矢は思う。
事実、悼矢は感じていたのだ。今まで暮らしてきて感じたことなどない空気を。
胸の奥がもやもやとする。
そのもやもやの正体を悼矢は分かっていた。詰まる所の“不安”である。何が起こっているか分かっていない、何があるか分からない。夜の暗闇がそんな“不安”を掻き立ててくる。
コンコン。
扉がノックされた。出てみるとリタだった。
その服装は悼矢とリタが出会った時と同じもの。リタの戦闘服ともいえる赤のドレスに左手、両足を覆う甲冑だった。
「準備はいい？」
「ああ。行こう」

二人して玄関から出ようとするとリビングにいたらしいこよりが音を聞きつけてやってくる。
「……どこ行くの？」
「少し駅前まで出てくる」
「……」
こよりは黙っている。何か言いたそうな不安そうな表情で。
「二人とも……早く……帰ってきてね」
こよりは胸の前でぎゅっと手を握ってそれだけ言った。
「ああ。すぐ帰ってくるよ」
「行ってくるわ、こより」
二人が外に出る。
そしてそのまま庭を歩いて家の門から出た。
その刹那！
むわっ！
悼矢の体が重圧を受けて歩みを止める。
（な、なんだ……！？）
部屋の中で感じた不安をあおるような空気。家の外――厳密には結界の外に出るとそれが一段とキツくなっていた。
こんなにも夜は怖いものだったろうか、恐ろしいものだっただろうか。
（どこからか見られている。いや狙われている？）
そんな不安がどんどんと膨れ上がり、気が狂ってしまいそうだった。
「エーテル使いになってあんたにも分かるようになったのね。この夜の怖さが……」
「どうなってんだよ……この街……！」
ズォォオオォォオ……！
闇の中で何かが手招いている気がした。思わず一歩後ろにさがる。
家の中に逃げ込みたい気分だった。
「ふざけんなよ！　俺は今の今までこんな異常に気づいてなかった

っていうのかよ！」
「ええ、そうよ。普通の人間には何が起こっているか分かってない。だからこそ危険なのよ」
（そうだった。このままじゃ危険なんだ……！　なんとかしないと……！）
悼矢は腹の底へと不安を押し込み、意を決して一歩を踏み出した。
「すまん。行こう、リタ。ビビってたって始まらないよな」
（こいつ……意外と意地があるじゃない）
リタは嬉しそうに頷いた。
「ええ、行きましょ」
二人は駅前へと向かって歩きだした。屋根から屋根を跳んで行けば時間短縮にはなるが、そうしないのには訳がある。そんなことをしたらどこかに潜んでいるだろう禍魂に狙ってくださいと言っているようなものだ。奇襲だって受けかねない。
だから慎重に歩いて行く。奇襲だって受けかねない。周りの安全を確認しつつ、ゆっくりと歩いて行く。
そうして駅前に向かって歩いていると悼矢はあることに気づいた。
街を包む闇、その闇が――
（駅前に近づくにつれて濃くなってる……！）
駅前に近づけば近づくほど重くなる空気と闇。
（こういうことかよ！　八神が言った鼻で分かるってのは……！）
「トウヤ……近いわ」
不意にリタが何かを感じ取ったかのように呟いた。
「おいおい……！　まだ住宅街を抜けきってもいないぞ……！」
「何かが戦ってる……！」
リタが走りだした。『くそっ』と悪態をついて悼矢も続く。
そこは工事現場だった。現場の囲いの中から音が聞こえる。
（戦ってる！　禍魂か！？）
悼矢は静かに息を殺して中を覗き込む。
そしてその光景を見て眼を見開いた。

（!?　人間同士!?　エーテル使いの対立……!）

エーテルとエーテルが戦い、それをエーテル使いが後ろからエーテル・カードで援護しているではないか。

閃く光、巻き上がる爆炎、破壊される鉄材。

一方は獣。青紫の毛をした狼みたいなエーテルだ。目は赤く血走っていて獰猛さが伺え知れる。

もう一方は騎士のように銀色の甲冑を着込んだエーテルだ。全身が甲冑に包まれているせいで中がどうなっているのかは分からないのがどこか奇妙に感じる。奇妙なのはそれだけではない。持っている武器もまた奇妙であった。普通なら剣や槍、斧など騎士ならそんな武器を持っていそうなものだが、銀色の甲冑が持っているのは“鍵”だった。切っ先が鍵になった剣。あんなもので戦えるのかどうか怪しいものだ。実質、“鍵”はあまり武器になっていないようで戦いは狼が優勢だ。

（馬鹿げてる……!　人間同士で戦ってるなんて……!　あいつら何考えてるのよ……!）

リタの奥歯がぎりっと鳴った。

その時、リタは間近なエーテル・エネルギーに気づいた。

ゴオォオォオオ……!

悼矢だった。彼の体からエーテル・エネルギーが立ち昇っている。

その表情は怒りに染まっていた。

「やめさせる……!」

怒りを抑えられなくなったのか悼矢はエーテル使い同士の戦いに割って入ろうとした。がリタがそれを止める。

「待ちなさいよ!　今行ってどうしようって言うのよ!　こっちはカードを一枚も持ってないんだから!」

「黙って見てろって言うのかよッ!」

悼矢がリタにくってかかった。

「落ち着きなさいよ……!　出て行って殺されたらそれでお終いなのよ!　これはゲームじゃないの、慎重に行動しなきゃ!」

「くっ……！」
悼矢はぐっと拳を握った。
（くっそぉおおお……！）
無力だ。自分はあまりにも無力だ。エーテル使いの中でもひよっこ中のひよっこ。カードもなけりゃ戦闘経験もなく、知識さえない。
（俺は……無力だ……！）
その時だった。
「覗き見とは感心できないねェ」
背後から声がした。
振り返るとそこには顔半分に刺青を彫った男が立っていた。パンク系の服装を着こなし、銀のチェーンやネックレス、指輪がきらきらと光っている。
男はピアスのついた口を笑みに歪ませてエーテル・カードを取り出す。
（!?　エーテル使い……！）
それを見た悼矢とリタに緊張が駆け抜ける。
「おまえもエーテル使いだろォ？　ええ？」

Ｄａｎｃｅ２　其の６－１

（この男もエーテル使い！　この近くだけで四人のエーテル使いが集まってる！　どうなってんのよ、この街は！？）

リタは臨戦態勢に入った。充分な情報を得るまでエーテル使いとの戦闘は避けたいところであったが、こうなっては致し方ない。

「おっと、そんなに身構えるなよ、お嬢さん。そんな眼で見られたら……。

――イジめたくなっちまう」

ズォオオォ……！

男の体からエーテル・エネルギーが滲み出る。そのエネルギーが男の周りでゆらゆらと揺れ、地面に不気味な影を作り出す。

そのエネルギー量から悼矢とリタは相手がただ者ではないことを本能的に感じ取った。

「あんた、どっちの味方？」

不意にリタが男に問うた。

（……っ！　この状況でもリタは冷静だ……！　相手から情報を引き出そうとしている……！）

悼矢はリタの機転の良さに拳を握る。

（しっかりしろよ、俺！　ビビってる場合じゃねーだろ！）

「そうだ！　どっちの味方なんだ!？　場合によっちゃ戦う必要はなくなる！」

「ヒャハハ！　どっちにつくかなんてないね。俺は戦いたい奴と戦う。いわば中立だ。合界派だの別界派だの関係ねェ」

（合界派と別界派……！　それがエーテル使いが対立してる原因か……！）

「ちなみに今は……うまそうな獲物がいるからなァ……。お嬢さん、名前なんてんだ？」

「あんたに答える必要はないわね」

男の舐めつくような視線にひるむことなくリタが凛として答える。
「カカカ……！　気に入ったぜ！　マスターを殺して俺のものにしてやるよ！　やるぞ、カリエラ！」
男の背後からすっと女が出てきた。
マスターと打って変わって青い長髪の清楚そうな女性。歳のころは二〇代半ばだろうか。白いワンピースでも着せれば女神かと見間違うかもしれない。しかし彼女が着ている服は真っ黒のワンピースだった。それが黒に染められた堕天使を彷彿とさせる。
ふと青い髪のエーテルの手元にエーテル・エネルギーが収束していく。
「悼矢、下がって」
言われ悼矢はリタから距離をとる。
光が形を作りカリエラの手に真っ黒のハープが現れた。そのU字型の黒い弦楽器にカリエラの白い手がそえられる。
「……“調弦（チューニング）”」
女が呟いてハープの糸を弾く。
ティン。
その刹那！　音が波動となり空間を揺らす！
ズガンッ！
リタの真横の床が抉れた。それを見たリタの頬に脂汗が滲む。
（音による攻撃……!?　見えない攻撃だなんて厄介ね……！）
カリエラはきゅっとネジを回してハープの糸の張りを調整する。
そして手をそえるともう一度弾いた。
「……“調弦”」
トゥン！
空気が割れる！
同時にリタは横に跳んでいた。
ズガゥン！
リタが立っていた場所が不可視の力で削れ飛ぶ！
「調弦完了。……いきます。“子犬のワルツ”……！」

カリエラはハープの弦を軽やかに弾き始める。どこかで聞いたことのあるような曲が流れ始めた。

そのまるで子犬がじゃれあっているような弾んだ明るい曲の一音一音にあわせて、次々とあたりの地面が抉れる！

リタの右前が抉れたと思えば次は真後ろが抉れる。かと思えばカリエラの目の前が抉れたり、悼矢の真横の壁が抉れたりする。

それはまるでランダム、予測不能の攻撃！

ズガ、ズガズガ、ズガンズガッ！

（攻撃は見えない……！　でも微妙な空気の流れなら……感じられる……！）

リタはこちらに向かってとんでくる音の波動を読み取って回避する！

ズバァン！

「ククク……カリエラの攻撃を避けるとはますます欲しい……！」

（大丈夫！　避ける！　全身の感覚を研ぎ澄ませれば……！）

リタは右へ左へ、飛んでくる波動を交わし続ける！

「ハハハ！　踊れ、踊れ！」

カリエラのマスターが腹を抱えて笑っている。

（でもこのままじゃいつかはやられる！　あの演奏を止めないと！）

リタは上空に跳んだ！

「バカが、焦ったな！　空中で移動なんてできないだろ！　狙い撃ちだ、カリエラ！　エーテル・カード、オープン！　“ラフィルズの激励”！」

男が持つカードが光った。するとカリエラの体に赤い陽炎が灯る。

「エーテル・カード！？　強化系カードか……！？　リタ……！」

悼矢は上空のリタを見上げた。

「……いきます……！　“ワルキューレの行進”……！」

曲が勇ましいものに変わったその刹那、ハープからワルキューレを象った黒い光の塊が飛び出す！

「なっ！？」と眼を見張るリタ。

ばさっ！
漆黒のワルキューレが大きな翼を広げる。
辺りにはらはらと黒い羽根が舞った。
そしてワルキューレはスピアを構えるとリタへと滑空した！

Ｄａｎｃｅ２　其の６－２

「アルデヴァァイイイィィイィン！」
リタの手に光が収束し、バカでかい西洋剣を形作っていく。そして光の殻を破って現れる惚れ惚れとするほどシャープな大剣。
リタはそれを真っ直ぐ上段に振りかぶった。
「アルデ・ブレイバアアアアァァァ！！」
主の声に呼応してアルデヴァインに彫られた文字が光を放つ。そして轟ッと唸りをあげて大剣が振り下ろされた！
ギャゴォオオォオオン！
ワルキューレのスピアとリタのアルデヴァインが互いを粉砕せんとぶつかり合う！
巻き起こる暴風と飛び散る火花！
そして互いを弾き飛ばした！
リタは吹っ飛んで背後のビルの壁に背中を叩きつけられ、ワルキューレは掻き消える。
どさっと音をたてて地面に落下したリタの元に悼矢は駆け寄った。
「リタ、大丈夫か！？　おい、リタ！」
リタはぐったりとしていた。どうやら気を失っているらしい。
「クケケケ……！　いいぞ、カリエラ！　エーテルが動けないうちにマスターを殺してしまえ！」
「くっ……！」
悼矢はリタを抱いたまま身構える。しかしカリエラは動かない。
「カリエラ！　何をぼーっとしてやがる！」
そこで男は気がついた。
見るとカリエラの持つハープの弦が一本切れているではないか。
おそらくワルキューレがやられた反動が発生元であるハープにフィードバックしたのだろう。
これではカリエラは曲を奏でることができない。

男の表情が怒りに染まる。
「使えねぇエーテルだ……！　どけ……！　俺がやる！」
どんっとカリエラを突き飛ばす男。
「あっ……！」
カリエラは地面に倒れ、手からハープがこぼれてしまった。
ハープは地面に落ちるとカラカラと回転して倒れる。
カリエラはすぐさま起き上がってハープを拾い、座ったままで抱きしめた。そして恨めしそうに男を睨む。
「ああ？　なんだァ？　その眼はァ？　それがご主人様に対してする眼かァ！」
男がカリエラの背中を踏みつけた。
「っ……！」
カリエラは痛みに耐え、さらにハープをぎゅっと強く抱きしめた。
「やめろ！　その子はお前のエーテルだろ！」
悼矢のその言葉にカリエラは涙の滲む眼で彼を見た。
――たすけて
カリエラの口がそう動いたよう悼矢には見えた。
「あぁん？　そのとおりだぜ？　俺のエーテルなんだから俺がどう扱おうが俺の勝手だろォ？　クハハハハ！」
（下衆が……！）
悼矢の体から怒りが滲み出る。
「さあて……そろそろお前には死んでもらうか。そんでもってお前のエーテルは俺のもんだ」
男がポケットからカードを取り出す。そしてそれを天高く放った！
「エーテル・カード、オープン！　“ナハルマガダの落雷”！」
カードが弾け、悼矢の上空に五紡星の魔方陣が現れた。その魔方陣はビリビリと黒い雷を発して放電している。
（落雷!?　まずい……！）
そんなものを受けて生きていられるとは思えない。
しかし逃げる間もなくそこから――

ピシャゴォオォオン！
黒雷が悼矢へと降り注ぐ！
「う、うわあああああッ！！」
その時だった。
どこからか凛とした言葉が響いた。
「エーテル・カード、オン！　“イージスの盾”！」
悼矢のすぐ上に半透明な盾が出現する！
雷はその盾に弾かれてあちこちに分散した！
その一部が雷を放った張本人の方に向かって、男は慌ててその場を跳びのいた。
「うおっ！　あぶねぇ！　どこのどいつだ！　こんな良い所で邪魔しやがったのは！」
男が暗闇の方を見た。
するとそこから誰かがこちらに歩いてくるではないか。
カツ……カツ……カツ……。
月の光で徐々に足元から姿が見え始め、ついにはその全貌をあらわす。
悼矢がその顔を見て息を呑む。
「……八神っ！」
その通りだった。闇から出てきたのは八神きづなその人であった。
その隣にはいつものようにライオンのエーテル、レオがいる。
「相変わらずのウジ虫ぶりだな、藤島」
「……八神……テメェ……！」
八神と藤島と呼ばれた男が睨みあう。
（な、なんだ……？　八神とあいつは知り合いなのか……？）
「藤島……少しやり過ぎたようだな。前回はうまく逃げたようだが今回はそうもいかない。五〇万。お前は私の基準を超えた」
きづなが革のポシェットから数枚カードを取り出す。
そのきづなの眼は獲物を狙う鷹のように鋭くなっていた。

Ｄａｎｃｅ２　其の７－１

きづなが戦闘態勢に入ったのを見て藤島が苦虫を噛み潰したような表情になる。

「チッ、ＡＥＳＳの犬が……。だが前回のようにはいかないってのはこっちもそうだぜ。見ろ、俺の新しいエーテルだ」

藤島が後ろのカリエラをアゴでさした。カリエラがきづなの視線を受けてビクリと震える。

「キミのエーテル？　いいえ、それは違いますね。ええ、違いますとも」

その言葉を発したのはきづなでも悼矢でもなかった。

皆が声のした方向を見る。

そこには一人の男が立っていた。先ほど工事現場の中で戦っていたエーテル使いの一人だ。銀色の甲冑のエーテルが彼の背後につき従っている。

「彼女、カリエラは矢川亜希子のエーテルですよ。キミが殺したＡＥＳＳの情報員、矢川亜希子のエーテルです」

男はにこにこしながらそう言った。喋り方がやんわりとしていてどこか緊張感に欠ける。

その男は紺のスーツを着たどこにでもいるサラリーマン風の男だった。銀縁の眼鏡が月の光を反射している。

「あぁん？　誰だ？　おまえ？」

「私の名前は河上治と言います。……ＡＥＳＳの者ですよ。矢川亜希子は私の部下でした」

「河上、手を出すな。お前がどういう仕事でここにいるかは知らないが、こいつは私の獲物だ」

きづながじりっと藤島に一歩近づく。

そんなきづなに今初めて気づいたかのように、河上は驚いた表情を見せる。

「おや、八神くんお久しぶりです。私はエーテルの裏取引があるという情報を得てここを張っていたのですよ。一人は“閉じ込め”ましたが……どうやら取引相手はあの男のようなのでね……私も仕事上譲るわけにはいきませんよ」

河上もカードを数枚、スーツの内ポケットから取り出す。それに合わせて銀色の甲冑がガチャリと“鍵”を構えた。

二対一というこの絶対的不利な状況で藤島はニヤニヤとした笑みを隠さない。

「ＡＥＳＳか……クハハハ！　そうだ、思い出したぜ……。ＡＥＳＳのあの女、自分の命よりも自分のエーテルを逃がすことを選んだんだよなァ……。バカな女だよなァ！　俺がそんな約束を守るわきゃねーのによォ！」

壊れたように笑う藤島。

「……っ！」

カリエラが眼を伏せて静かに涙を零した。

「……ウジ虫が……。やれ」

きづなの指示でレオが跳んだ。

「ゲートキーパー！　あの男を捕獲するのです！」

ゲートキーパーと呼ばれた銀色の甲冑も藤島へと肉薄する。

それを見た藤島が叫んだ。

「出番だぜ！　”ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬ”！」

刹那。

藤島の手に黒地に赤い炎が描かれたギターが現れた。しかもただのギターではない。そのギターにはぎょろりと眼があり、ホールは口のように牙が生えているではないか。そしてギターが喋る。

『ギャハハ！　やっと俺の出番か、マサキ！　さあ、奏でようぜ！　地獄の曲をよ！』

「エーテル！？　あれがエーテルなのか！？」

藤島の手に現れた“エーテル化されたギター”に悼矢は驚きを隠せない。

エーテル体というのは何も人型や生物のカタチをしているとは限らない。この藤島のようにエーテル化させたモノを自分のエーテルとして契約している者もいるのだ。

「ＯＨ，ＹＥＳ！　聴けよ！　“暗黒騒音歌”！」

藤島が黒いギターを掻き鳴らした！

ギギャュィイイィィイインッ！

けたたましい音が鳴り響く。そのあまりにも胸糞悪いギター音に足を止めるレオとゲートキーパー。

「ぐっ……！　なんだ、この音は……！」

悼矢も思わず耳を塞ぐ。

「ヒャハハ！　こいつが俺のエーテル、”ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬ”だ！　最高にイイ音出すだろォ！　なァ、おい！？」

藤島はギターを掻き鳴らし続ける。これにはきづなや河上も耳を塞ぐしかない。

「今だ、カリエラ！　行くぞ！　エーテル・カード、オープン！　“漆黒の翼”！」

「……はい」

マスターの指示には逆らえない。それはエーテルであることの宿命。

カリエラの肩からバサッと漆黒の羽が生える。そして藤島を掴むと夜の空へと羽ばたく。

「ギャハハハ！　テメェらにゃ俺を捕まえられねぇよ！　じゃあなァ！」

「くそっ！　逃がすか……！　レオ……！」

「応っ」

きづなの呼びかけに応えレオがやってくる。きづなが跨るとレオは藤島を追って跳躍した。

闇の翼を羽ばたかせて夜を滑空する藤島たち、それをビルからビルへと跳躍して追うきづなとレオ。

そうして彼らの姿はすぐに見えなくなってしまった。

Ｄａｎｃｅ２　其の７－２

一気に色んな事が起こりすぎて放心している悼矢に河上が近づいてきた。
「大丈夫ですか？」と手を差し伸べてくる。
「あ、ああ。俺は大丈夫だけど……リタが……」
悼矢は腕の中でぐったりとしているリタに視線をやった。
「ふむ……。気を失っているだけのようですね。いずれ気がつくでしょう。
……。……このエーテルが……キミのエーテルなのですか？」
河上は眼鏡の位置をくっとなおす。レンズが月の光を反射してキラリと光った。レンズが光を反射しているせいで彼の目線がどうなっているかは判らない。
「そうだけど……。何かリタの事を知ってのか？」
「……。……いえ……。それでは私も行きますね。こう見えても多忙なのですよ」
去ろうとした河上を悼矢は引きとめた。
「待ってくれ……！」
「……何でしょうか？」と笑顔で振り返る。
「あんたに訊きたいことがある……！　”合界派”と”別界派”って一体なんだ！？」
「おや……。その二派を知らないとは。どうやらキミはまだエーテル使いになって日が浅いようですね」
河上は眼鏡を外すとポケットからハンカチを取り出してきゅっきゅとレンズを磨く。
「お答えしましょう。エーエル使いを支援するのも私の仕事ですから」
「そういえばアンタ、ＡＥＳＳとか言ってたな。一体、そりゃなんだよ」

「ふふふ、そう慌てないで下さい。順に説明しましょう。キミが言った合界派、別界派のように、エーテル使いと一口に言っても意志の統制などされていないのが現実です。さっきの男、藤島のようにエーテルを使って犯罪を犯す者もいる。そこで私たちの出番です。一般人でも法を犯せば警察が動く、それと同じようにエーテル使いが法を犯せばＡＥＳＳが動く」

河上は眼鏡をかけ直した。

きらりと月の光でそのレンズが不気味に煌く。

「アンタらの仕事は言うなればエーテル使いの警察ってことかよ」

「基本的な仕事は禍魂の討伐なのですが……キミの言うとおり法を犯したエーテル使いを捕まえるのも仕事です。エーテルを犯罪に使うような輩を捕まえるために賞金を出したりもしていますよ。簡単に言えばエーテル使いたちに仕事を斡旋するギルドみたいなものですよ。最も私たちに政府や国のようなパトロンはいませんが……」

「八神もアンタと同じＡＥＳＳに属してるのか？」

「八神くんが？　ははは、属することを嫌う彼女にそれはないですよ。彼女は賞金首を追う狩人――賞金稼ぎです。といってもお金のことは二の次でしょう。賞金稼ぎなんてことをやっているのは何か彼女なりの理由があるみたいですが……」

「エーテル使いの意志が統制されてないって言ったが、どうしてだ？　禍魂っていう共通の敵がいるじゃないか！」

「キミはエーテルがどうやってこの世界に来たか分かりますか？」

「いや分からないが。何だよ、急に……」

「いまエーテル使いたちの通説となっているのは“穴”なんですよ。エーテルたちの世界イデアとこの世界を繋ぐ“穴”がある。そしてその“穴”から禍魂が出てきている。そう考えられています」

「禍魂が！？

待てよ。ということはその“穴”を塞いだらもう禍魂はこの世界に出て来ないってことかよ……！」

悼矢が導き出した答えに微妙そうな微笑みを見せる河上。

「半分正解で半分は不正解……と言ったところですかね。本当に“穴”を塞ぐことが正しい選択でしょうか？」

「正しいに決まってるだろ！　“穴”を塞げば禍魂は現れなくなるんだろ！？　この世界は救われるじゃないか！」

「そうとは限りませんよ。これは通説なだけであって、『“穴”を塞げば禍魂が出てこなくなる』なんて保証はどこにもありません。そもそも禍魂が“穴”から出現しているということにも確証はありませんから……。

ならば逆に“穴”を利用しようじゃないかと考える者がでてきたんです。“穴”を広げイデア界のエネルギーをこちらの世界で有効活用し、禍魂殲滅を狙っている合界派。そしてやはり“穴”を塞げば禍魂が出てこなくなるという希望にかけている別界派。

この二つはするべきことが全くの逆。だから日々衝突が起きてしまっているんですよ」

悼矢は呆気にとられていた。

簡単ではなかった。

最初はエーテル使い同士の対立、どうしてそんなことが、と思ったのだが。この対立は根本的な考え方の違い。宗教戦争みたいなものだ。

互いを認めることなく、決してその線は交わらない！

（共通の敵がいるってのに……！　まとまれないなんて……！）

「キミはどっちが正しいと思いますか？」

すちゃりと河上は眼鏡のズレを人差し指でなおした。またもきらりとレンズが光を反射する。

答えられるわけがない。どっちが正しいなんて。どっちも世界の事を考えての行動。言うなればどっちも正しい。

「アンタら……ＡＥＳＳはどっちなんだよ？」

搾り出すような声で悼矢が問う。

「どっちもですよ。合界派の人間も別界派の人間もどちらもいます。そういう意味ではＡＥＳＳとて一枚岩ではないですね」

「大丈夫かよ……その組織……」
「問題ありませんよ。仕事内容は禍魂討伐にエーテル犯罪者の捕獲。合界派であろうが別界派であろうが関係ありません。そうでした。キミはまだエーテル使いになって日が浅いんでしたね」
「あ、ああ」
河上はずいっと悼矢に近寄るとセールスマンのように早口でまくし立てた。
「それならＡＥＳＳの賞金稼ぎになりませんか？　情報源は欲しいでしょう？　ＡＥＳＳに登録しておけば禍魂の情報、エーテル犯罪者の情報が閲覧できますよ？　その上、犯罪者や禍魂を倒せば報酬が出ますからね。こんなにお得なことってないでしょう！？　ないんですよ！　これはもう登録するしかないですね！」
悼矢はうーむとアゴに手をあて考える。
（確かに情報源は欲しい……。何かあった時に疑問をぶつけれる相手がいると動きやすくなるのも確かだ）
「と、言うのもＡＥＳＳは年中人手不足なんですよ。一人でもエーテル使いが手伝ってくれると有難いんです。そうすれば私の仕事も減りますしね、あははは」
それが正直なところなのか河上は笑って頭を掻く。
「分かったよ。やっぱり情報源は欲しいからな」
「そうこなくっちゃ。はい、これどうぞ」
と渡されたのは一枚のエーテル・カードだった。
「このエーテル・カードはＡＥＳＳと連絡を取り合うためのものです。仕事のお誘いがいったり、ＡＥＳＳが持つ情報をある範囲内で検索ができます。キミがＡＥＳＳの賞金稼ぎである証でもあります。一度、使ってみてください」
「使えって言われても……」
ポリポリと頭を掻く。
「あはは。エーテル・エネルギーの使い方が分かりませんか。簡単なものですよ。

人間にはエーテル・エネルギーを他のエネルギーや物質に変換する機能はありませんが、エネルギー自体はもともと体に宿っているのです」

（確か八神もそんなこと言ってたな……）

「なのでエネルギーの流れは体が勝手に理解しています。血液が体中を流れているのと同じようにね。ほら、そのカードに集中してください」

悼矢はエーテル・カードをじっと見つめた。

「後は体に指示を出すんです。暗示と言い換えてもいいですね。エーテル・カード発動と言葉にして出すことで体は勝手に反応してくれるでしょう。言ってみてください」

「エーテル・カード発動！“ＡＥＳＳ”！」

するとカードの上にホログラム画面が浮かび上がる。画面には賞金首リストやメール機能、地図機能、情報検索など幾つかの項目が表示されていた。

「……できた……」

「ほら、簡単だったでしょ？」

「ああ。人体の不思議を感じたよ。しかし地図までついてるのかよ……。無駄に便利だな……」

地図機能の項目をタッチしてみると自分が今いる場所を中心に辺りの地図が表示された。

「それとこれは私からプレゼント」

河上は五枚のエーテル・カードを差し出していた。

「いいのか？」

「エーテル・カードは命綱ですからね。せっかく手助けしてくれる人が増えるんですから、禍魂に殺されても困りますよ」

悼矢は有難く受け取っておくことにする。

「それじゃあ私はこれで。何かあったら連絡します」

「ああ、頼む……。あ、いや頼みます」

悼矢は言い直してぺこりと頭を下げた。

それに河上はにこりと微笑みで返す。
歩いて去っていく河上を見送って悼矢は手に残った五枚のエーテル・カードを見た。
“ファイアーボール”。
“カダックの盾”。
“ウェリスタンの加護”。
“ヴィン・イヴィ”。
“キャンセルマジック”。
その五種が悼矢の手に入れたエーテル・カードだった。
（エーテル・カード……。一枚で戦局を変えれるほどの力を持ったエーテル使いの切り札……）
「これがあれば……！」
悼矢は藤島が逃げて行った空を見上げた。頭に浮かぶのはあのカリエラという少女のことだ。
涙を流し、助けを求めてきたエーテル。あのエーテルはまだ泣いているだろう。
「藤島……！」
下卑た笑みで笑う男の顔を思い出して、悼矢は奥歯をギリッと鳴らすのだった。

Ｄａｎｃｅ２　其の８－１

リタは眼を覚ました瞬間に体を起こしていた。
同時に手にアルデヴァインを出現させ、構えている。
「……っ！？」
辺りを見回して自分の部屋だということに気づくと、リタは気が抜けたように構えを解いた。
「そんな物騒なモンしまえよ」
悼矢はいきなり飛び起きたリタに驚いたのか、椅子から転げ落ちた格好で床に尻餅をついていた。
「悼矢……！　あんた無事なの！？　あの男に何もされてない！？」
ベッドから飛び降りて悼矢の肩をがくがくと揺らす。
「お、おおお、落ち着け……！　俺は大丈夫だって……！」
その言葉を聞くとほっとしたように胸を撫で下ろすリタ。
「俺よりリタ、体大丈夫か？　おまえ気を失ってたんだぞ」
そこでリタは思い出した。ハープを持ったエーテルのカリエラと戦い、彼女の出したワルキューレとぶつかった。そこまでは覚えている。だがその後の記憶がなかった。
よろよろとベッドに座るリタ。
（負けた？　私は……負けたの……？）
「あの男なら逃げた」
俯いてぎゅっと拳を握り締める悼矢。
「……。一体、何があったの？」
悼矢は椅子に座りなおすと話し始めた。リタが気絶してからのことを。落雷に打たれそうになった時きづなが救ってくれたこと、藤島のこと、河上とした話のこと。そのすべてを覚えている範囲で話した。
リタはベッドに座って静かに悼矢の話を聞いていた。
その話を聞いているうちにリタの顔が徐々に曇っていく。

「ざっとこんなもんだ」
「……」
話し終えてもリタは一言も言葉を発しなかった。ただ俯いて掴んだシーツを強く握り締めている。
どうかしたのかと顔を覗きこんでみるとリタは自分の唇を悔しそうに噛み締めていた。
「……リタ？　どうかしたか？」
「……。なんでもないわ。悪いけど少し一人にしてくれない」
ふいと窓の方を見るリタ。
「なんだよ。そんな態度で何にもないわけないだろ」
悼矢がリタの肩を掴もうとしたその時。
「っるさいわね！　放っておいてよ！」
悼矢の手を痛烈に振り払う。
「つっ！」
思わず手を引っ込める悼矢。
それを見てリタは『あっ』とすまなそうな顔をしたがすぐに唇を噛んで下を向いた。
「……悪かったよ。落ち着いたら降りてこいよ。こよりが心配してる」
悼矢はそう言い残して部屋を出た。
部屋の中で一人になるとリタは両手で顔を覆った。
「……っ」
（私……最低だ……！）
押し寄せる後悔の念。
そして溢れる悔しさ。
（何が最強のエーテルよ……！　あんな簡単に気を失って……！
トウヤを危険に晒して……！　その上、他のエーテル使いに助けてもらったですって……！？）
ぽろぽろと涙が溢れてくる。

（守らなきゃいけないのは私なのに……！）
自分の弱さに腹が立った。
自分の未熟さに腹が立った。
（その上、心配してくれたトウヤに八つ当たりして……！　ほんと最低だわ……！）
リタはごしごしと腕で涙を拭って立ち上がった。
（このままじゃ最悪の事態になりかねない……）
最悪の事態。それは悼矢の死だ。今回その最悪の事態にかすった。本当にすぐそこまで来ていた。たまたま……本当にたまたま八神きづながいたからどうにかなっただけ。
もし八神きづながいなかったらと思うと血の気が引く。
（できない……。もうこれ以上トウヤに迷惑をかけれない……）
窓の外を見る。
「ごめん、トウヤ」

Ｄａｎｃｅ２　其の８－２

「ふわぁ～。うーす……」
翌日。悼矢は眠気まなこをこすりこすりリビングにやってきた。
「あ、おはよう、悼矢ちゃん。朝ごはんできてるよー」
促されるまま食卓につく悼矢。そして辺りを見回す。
「あれ？　リタは？」
いつも悼矢より早く起きて朝のニュースを見ているリタの姿が今日はなかった。
「リタさんまだ起きてないみたいだよ？」
（あいつ……昨日、様子が変だったが……。本当はあの戦いで傷を負ったんじゃないだろうな……？）
こよりの激うまベーコンエッグを食べながらそんなことを思う。
「ごちそうさん。今日もおいしかったです」
「えへへ～。お粗末さま～」
手をあわせて頭を下げるとこよりは笑顔で応えた。
（学校に行く前にリタの様子を見ておくか）
制服に着替え、早速リタの部屋に行く。
「おーい、リタ？　起きてるか？」
コンコンコン。
ノックをしてみるが返事がない。
ドアノブを回してみるといつも鍵がかかってる筈のドアが簡単に開く。
（おお……！　まだ寝てるみたいだしこれはもしかして寝起きドッキリのチャンスか！？）
「リタ～？　開けるぞー。言っておくが鍵をかけてないお前が悪いんだからな」
悼矢は嬉々として扉を開けはなった。
だが悼矢は扉を開けたまま固まってしまう。

「……？」

ざあああぁぁ……。

悼矢の頬を風が撫でた。

窓が開いていた。

カーテンが波をうつように揺れている。

庭の桜の木の花びらが窓から入ってきたらしく、誰もいないベッドを彩っていた。

その部屋にリタの姿はなかった。

ぽっかり開いた穴のようにその部屋からリタの姿だけが消えていた。

（あいつ……一体、どこに……？）

そこで悼矢はテーブルの上に置いてある封筒を見つけた。表には『トウヤへ』と書かれてある。怪訝に思いながらもそれを手にとってみると中に手紙が入っていることに悼矢は気づいた。そして、それを取り出して眼を通してみる。

――まずこんな大事なことを手紙にしたことを謝るわ。本当なら直接話をするべきなんでしょうけど……。でも今の私にそんなことをする権利はないから……。いきなりだけど……私、出て行こうと思うの。

「なんだよ……これ……」

誰に言うでもない呟き。

自分でも声が震えているのが分かった。

――なんていうか考えが甘かったのよね、私……。私ってさ、こう見えてイデアではけっこう名の通ったエーテルだったのよ。だからなのかな。なんとかなると思ってたわ。この世界で主を見つけたら自分はもっと強くなって禍魂をばったばったと薙ぎ倒せる。……そう考えてた。でもそんなに簡単じゃないわよね。実際は悲惨よ。こっちの世界に来たら私より強いやつばっか。禍魂のグランパトス、八神きづなのエーテル、そして藤島のエーテル……。ほんと、笑っちゃうわよね。

……だから、ごめん。これ以上トウヤに迷惑かけたくない。八神きづなが助けてくれなかったらトウヤは死んでたわ。ただのラッキーであんたは助かったのよ。でも次は本当に死んでしまうかもしれない。いいえ、きっとそうなる。あんたは優しいから……。私につき合うほどのお人好しだから……あんなことを続ければいつかは死なせてしまう。私に関わったせいで。そんなことにはさせたくない。あんたを死なせたくないのよ。だから……さようなら、よ。

「何なんだよ……これ……！」

ぎゅっと手紙を持つ手に力が入る。

――それと昨日のことについて謝っておくわね。気をかけてくれたのにあんな風にあしらったりしてごめん。ほら、私ってプライド高いところあるじゃない？　だから気を使われたり慰められたりされると逆に素直になれないっていうか……優しさに甘えられないっていうか……そういう困った性格なのよ。悪かったわね。まだあんたに話したいことはあるけど気が変わらないうちに行きたいからここまでにしおくわ。それじゃ、バイバイ。こよりを大事にしなさいよ。

「……リタッ……」

手紙はそこで途切れていた。

「あのバカ……！　なに勝手に決めてんだよ……！」

ガンッとテーブルに拳を振り下ろす。じぃんと手が痛む。だがそれ以上に心がぎしぎしと歪みを訴えていた。

と、そこで悼矢は手紙の裏面に何か書いてあることに気づいた。

――あ。あとこれは私の最後の我侭なんだけど……あんたとの契約……解消しなくていい？　あんたにとっては重荷にしかならないと思うけど、私にとって主はやっぱりあんただから。他の主を探すなんて考えられないわ。私の主は生涯トウヤ……あんた一人よ。安心しなさいよね。

「何が安心しなさい……だ……」

悼矢はリタのものだった部屋を見渡す。

空虚を感じた。

そこにいるはずの人、いてしかるべき人がいない空間。部屋も主がいなくなってどこか寂しそうにしている感じがした。

いなくなった。

ひどい喪失感。

あまりにも急すぎる別れ。

「悼矢ちゃーん！　もうそろそろ出ないと遅れるよー！」

階下からこよりの声がした。

悼矢は手紙をポケットに突っ込んだ。そして部屋から出る前に悼矢は振り返り、今はいないこの部屋の主に向かって言ってやる。

「勝手にドロップアウトできると思うなよ、このバカ……！　俺はもう決心したんだよ……！　何がなんでも見つけだして戻ってきてもらうぞ……！」

静かに扉が閉まったその後、誰もいなくなった部屋でカーテンだけがゆっくりと揺れていた。

Ｄａｎｃｅ２　其の９－１

始業式をしたばかりなのにもう授業は始まっていた。しかし授業の内容は悼矢の頭に入ってこない。彼の頭に浮かんでいるのはもちろんおてんば家出娘のことだ。

八神きづなの席を見る。しかしそこに彼女の姿はない。

昨日、きづなは藤島を追っていった。もしかしてあの後に何かあったのだろうか。

藤島には最低でも二人のエーテルがいる。藤島の元のエーテルである黒いギター“ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬ”。そして綺麗な音色をハープで奏でる不遇のエーテル、カリエラ。いくらきづなでも二人のエーテルを同時に相手するのは難しいだろう。

朝、きづなが学校に登校していないことに気づいた悼矢は例のＡＥＳＳの情報が閲覧できるエーテル・カード“ＡＥＳＳ”を使って調べてみたのだ。すると藤島はまだ捕まっていないようだった。となると、きづなはどうなったのだろうか。まさかやられてしまったのではないか。

そんな最悪の結果が頭をよぎる。

（もう三時間目だぞ……。何かあったって考える方が自然じゃないか……。くそっ！　どいつもこいつも心配かけやがって……！）

悼矢はいらいらとしながら親指の爪を噛んだ。

そんな時だった。

ガラッ。

教室の後ろの扉が開く。

見てみるとそこには八神きづなが立っていた。どこも怪我した様子もなく五体満足でだ。

（あいつ、今頃登校してくるなんて……。何考えてんだ）

きづなはかなり不機嫌そうな顔でずかずかと入ってきて無言で自分の席についた。

「ちょっと八神さん」
先生がそんなきづなを嗜めようとした。だがきづながギロリと先生を睨むと先生は『うっ』と怯えて授業に戻ってしまった。
（おー、おー。藤島が捕まえられなくてあいつも相当イラついてるな。先生可哀想に）
だがきづなが無事だということに少しほっとする悼矢。
きづなは悼矢が自分に敵意を持つとも限らないと言っていたが、なんだかんだで悼矢はきづなのことを敵だとは思えなかった。藤島との戦いの時に助けてくれたこともある。
同じエーテル使いが近くにいるというのはそれだけで心強い。しかもきづなはレオという強力なエーテルのマスターだ。頼りにならないわけがない。それに彼女は何かの信念の元に行動しているように見える。そういう人間に悪い奴はいないだろうと悼矢は思う。
（リタ、お前は今何してる……）
悼矢は窓の外を見るのだった。

◇◇◇

家に帰るとこよりが向こうから駆けてきた。
「と、とととと、悼矢ちゃん！」
その慌てようで悼矢はどうやらこよりもリタがいなくなったことに気づいたらしいと分かった。
「リタさんがいないの！　ずっと起きてこないから部屋に行ったらもぬけの殻で……！」
悼矢はこよりの目線にあわせてしゃがむと、ポンと彼女の頭に手を置いた。
「ああ、分かってる。だけど心配するな。リタはすぐに帰ってくる」
こよりは目尻を拭うとこくりを頷いた。
（そうだ。あいつは帰ってくる）

◇◇◇

夜になった。

「こより、ちょっと出てくる」

悼矢の言葉にこよりは暗い顔になる。

「……どこに……行くの？」

「どこって……ただの散歩だ」

嘘だった。本当はリタを探しに行くのだが、こよりにそんなことを言うわけにはいかない。

そんなことを言ってしまえばこよりは必ずリタがいなくなった理由を聞きだそうとするだろう。もしそうなればエーテルやイデアの話に触れざるを得ない。それだけはなんとしても避けたかった。

悼矢はこよりには禍魂なんてものの存在を知らず平和に生きて欲しいのである。

「……。散歩だなんて珍しいね。早く帰ってくるんだよ」

こよりは少し黙っていたが仕方がないなぁってな感じで微笑んでそう言った。

「ああ、分かってる」

悼矢は上着に腕を通しながら玄関に向かった。

そんな悼矢の背中を見つめるこよりの不安そうな目線に彼は気づくはずもなかった。

Ｄａｎｃｅ２　其の９－２

やはり外の空気は重い。
こんな異常な空気に人々は気づかずに暮らしているというのだから悼矢は不思議でしょうがなかった。と言っても悼矢とてリタと契約する前はこの異質な雰囲気に気づいていなかったのだが。
この空気、ひどく恐ろしいとは思うが外に出なければ何も進展しない。
リタを見つけるにはどうすればいいのか。悼矢はそのことを学校でずっと考えていた。しかしその答えは何度考えても一つしか思い浮かばなかった。
（リタの目的は禍魂の殲滅……。その禍魂は夜に活動する。ということはそれに合わせてリタも夜に動くはず）
悼矢は街に向かって歩き出した。
学校、駅前、モール街……。そのどこを探しても彼女の姿は見あたらない。
結局、見つからないまま一時間ほどで帰宅する。
「くそっ。収穫なしか……」
ばふっと布団の上に悼矢は寝転がった。
（……なぁにまだ一日目だ。諦めるのはまだ早い）
悼矢は気を取り直すとリタが行きそうなところはないか、この街の地図を広げるのであった。

◇◇◇

翌日の夜。悼矢は防寒着を着込みこよりに少し外に出てくることを伝えた。
「今日も？」と不満そうな、そして不安そうな表情のこより。
「一時間くらいで帰ってくるから」

そう言い残して悼矢は家を出た。
波科町は山と海に挟まれるようにしてある街だ。それ故、この街には多種多様な建物や施設がある。
山側には学校、キャンプ場、工場、発電所などがあり、海側には港、浜辺、倉庫街などがあるのだ。そんな広大で発展した波科町を一日で回るなんて土台無理な話だ。
悼矢はその広大な町をあっちへふらふら、こっちへふらふらと、どこにいるとも知れない彼女を探して歩き続けた。
ザザァ……。
夜の港には人っ子一人いなかった。ただただ波の音が一定間隔で静かに響いているだけだ。
電灯も少ないせいで周りは薄暗い。
（こんなところにいるわけないか）
海に背を向けて港を後にしようとしたその時。
ズドーン！
港のすぐ近くにある倉庫が並んだ一角から青白い雷光が見えた。
（今のは……！）
気づけば悼矢は閃光が見えた方に走り出していた。
先ほどの光はどう考えても自然現象ではない。ならば事故か、と問われればそれも可能性の中にはない。
なぜならば既に悼矢の鼻にはその“匂い”が届いていたのだから。
濃いエーテル・エネルギー。それは時としてエーテル使いの嗅覚を刺激する。
壁に背中をつけ倉庫の影からエーテル・エネルギーが発散されている場所を覗いてみる。
そこは倉庫と倉庫の間にあるちょっとした空間だった。
そこに二人の人間がいた。
その二人が手に持っているのは間違いなくエーテル・カード。
（エーテル使い同士の戦闘……！）
リタではなかったことが残念な気持ちと、彼女が危ない目にあっ

ているわけではないという安堵が混じった息を吐く。
だが様子が変だ。エーテル使い同士の戦いだというのに鎌を持った赤髪のエーテル一体しか見あたらない。
それもそのはずどうやら勝負は既についていたらしい。その証拠に鎌のエーテルの前に光の粒子が舞っていた。
鎌を持つエーテルが周りに漂う光の粒子を吸収する。そうして光の粒子を吸いきるとカツーンと音をたててクリスタルが地面に落ちた。
その様子を見て、こちら側にいた男ががくりと膝をつく。
「負けた？　俺が？」
勝ったエーテルのマスターであろう男が地面に落ちたクリスタルを拾った。
呆然となって膝をついている男にエーテルが近づくと持っていた鎌を男の首筋に突きつけた。
エーテルが移動したことで月の光があたり、その姿がよく見えるようになる。
闇の中で爛々と光る赤い瞳、肩にかかるくらいの内巻きシャギーの赤髪。ボロボロに破れた茶色のローブで全身を包んでおり、その隙間から黒いエナメル質の服が見える。
そのエーテルの姿はまるで死神だった。
男を見下ろしているエーテルの表情からは何ら感情が読み取れない。だが、あのエーテルが今からしようとしていることはよく分かる。
（あいつ……！　殺す気だ……！）
怒りでどくんっと悼矢の心臓が跳ね上がった。思わず止めに入ろうと一歩足が出た。だがすぐに思いとどまる。
（いや落ち着け……！　リタがいるならともかく俺一人が出て行ったところで何もできないだろ！　それどころか俺にまで矛先が向くかもしれない……！）
ぎりっと奥歯が鳴った。悔しいがここは素通りするしか道はなさ

そうだった。
命あっての物種。時には退くことも必要なのだ。
悼矢はその場を立ち去ろうとした。
「い、嫌だ！　死にたくない……！　助けてくれ！」
しかし駄目だった。その声を聞いた瞬間、悼矢は倉庫の影から飛び出していた。
「やめろ！」
今まさに男の死を見ようとしていたもう一人のエーテル使いがゆらりとこちらを向く。
青年だった。悼矢とそんなに歳は変わらないだろう。男にしては少し長めの黒髪、といっても肩にかかるようなロン毛ではない。面長で女性が好きそうな線の細いイケメンだった。黒いシャツは胸元ではだけている。
その青年は悼矢を見てすっと眼を細めた。
「……キミ……エーテル使い？」
悼矢はごくりと生唾を飲んだ。
ゴゴゴゴゴゴ……！
ひどい圧迫感と存在感。
だというのに悼矢はその青年からまったく生気を感じることができなかった。肌が青白く体の線が細いというのもあるだろうが、何より彼が持つ雰囲気は生きている者のそれとは思えないほど透明なのだった。
「ああ、そうだ……！　人を殺してどうする……！　同じエーテル使いだろ！」
「ハハハ、キミは何を言ってるんだ。同じエーテル使いだからこそ殺すんじゃないか」
薄ら笑いを浮かべながらさも当然のように言う青年。
「なんだと……！　どういうことだ！」
「これはゲームなんだよ。エーテルは倒した相手のエーテル体を吸収すると強くなるだろう？　今、僕のエーテルが彼のエーテルを吸

収したみたいに」
　青年はさっき拾っていたクリスタル・コアをちらつかせる。
（……吸収だと……！？）
「禍魂を倒して強くなるのもありだけど、エーテル使いを倒せばボーナスがつくからさぁ……。そいつが持っているエーテル・カードが手に入るっていうボーナスがね。もしかしたらエーテル自体が手に入るっていうスペシャルボーナスもつくかもしれないしね」
　くつくつと可笑しそうに笑う青年。
　悼矢はきづなのエーテル、レオが光の粒子になった禍魂を体に取り込んでいるのを思い出した。
（あれはそういうことだったのかよ……！　しっかし、こいつ……狂ってやがる……！　エーテル・カードや他人のエーテル欲しさに人を殺すっていうのか……！）
　悼矢は思わずじりっと後ろに下がった。
「キミもエーテル使いなら分かるだろ？　さあキミのエーテルはどこだい？」
（藤島といいこいつといいエーテル使いにはこんな奴らが多いのかよ！？）
　非常にまずいことになってしまった。相手はやる気満々だ。もし彼が悼矢のエーテルは不在であることを知ったら彼はどうするだろうか。『じゃあまた今度』なんてことにならないのは簡単に想像できる。そう、もしエーテルがいないことを知れば彼は嬉々として襲いかかってくるだろう。今は姿の見えないエーテルの存在のせいで慎重になっているにすぎない。
（逃げるしかない……！　だけどこの状況からどうやって！？）
「？　どうしたんだい？　エーテルを呼ばないのかい？」
（くそっ……リタ……！）
　ずっとだんまりしている悼矢にしびれを切らしたのか青年は鎌のエーテルに目をやった。
　その視線を受けてエーテルはこくりと頷き悼矢に向かって鎌を構

える。
「マスターの危険ともなればエーテルは出てこざるを得ないよね」
青年はニヤリと笑った。
（絶対絶命……か！）
すぐそばで死神がほくそ笑んでいる気がした。
どっくん……どっくん……！
緊張からか酸素を求めて呼吸が荒くなる。
（だけど……やるっきゃねぇ！）
悼矢は覚悟を決めるとポケットからエーテル・カードを取り出した。

Ｄａｎｃｅ２　其の１０－１

手に脂汗をかいているせいでカードが転げ落ちそうだった。いや手だけではなかった。全身にじわりじわりと嫌な汗が滲む。

その空間の空気がピンと張り詰めているのが分かる。

風が吹くことさえ許されていないそんな雰囲気。

倉庫の暗闇にいたネズミたちが危険を感じ取ったのか、慌てて離れていく。

「そうそう……。この感じだよ……！　この命をかけた緊張感……！　たまらないねぇ！」

月を背後にして笑う青年。

「さあ、ゲームの始まりだ！　やるよ、ワクナ！」

ボロボロのローブを靡かせてワクナと呼ばれたエーテルが跳んだ！

（こんなところで死んでたまるか……！）

悼矢はカードを掲げて叫んだ。

「エーテル・カード発動！　“ヴィン・イヴィ”！　やつのエーテルを縛れ！」

刹那！　地面を突き破って大量の蔓や蔦が飛び出し、ワクナを拘束しようと迫る！

「！？」

ワクナが無表情のまま驚く。

「ワクナを拘束する気か……！　だけどそう簡単に僕のワクナを止められると思わないで欲しい！　ロード、エーテル・カード！　“ネフェリアの浄化“！　ワクナにとりつこうとしている”ヴィン・イヴィ“の効果を浄化せよ！」

（浄化！？　あのエーテルを足止めさせないと俺の命はない……！）

悼矢も次のエーテル・カードを取り出す。

「エーテル・カード発動！　“キャンセル・マジック”！　“ネフェリアの浄化”カードの使用をキャンセルしろ！」

瞬間。青年の使おうとしたエーテル・カードがしゅ～と白い煙をあげる。
“ネフェリアの浄化”が冷却期間に入ったのだ。
（強制的な冷却期間への移行だと……！？　くそ……！）
青年は思わず白い煙をあげているカードを地面に放り投げる。
その間に――
しゅるっ、しゅるるるっ！
ワクナは全身を蔓や蔦で縛られ、地面に倒れた。
（やった……！）
「安心するのはまだ早いよ！　エーテルが攻撃できなきゃ僕がするだけさ！　ロード、エーテル・カード！　“ゼィル・ファング”！
その雷の牙で敵を貫け！」
（攻撃系のカード……！　確か防御系のカードがあったはず……！）
青年が放ったカードから雷が迸り、一直線に雷撃が悼矢へと放たれる！
シャギャゴオオオオォォォォン！
「エーテル・カード発動！　“カダックの盾”！」
悼矢はエーテル・カードを地面にバンッと叩きつけた！
瞬間、叩きつけた箇所の地面が波打ち『ドコォォオオォ！』と大きな音をたてて土の盾が上に伸びる！
間一髪、雷撃が土の盾に直撃した！
ズゴォオオオォォォォンッ！
もくもくと煙が立ち昇る。
白い煙が立ち込める中で土の盾がパリパリと放電しているのが分かる。
（雷の攻撃を咄嗟に土の壁で防御して地面に受け流すなんて……。あいつ戦い慣れてるね……）
攻撃を防がれたというのに青年はどこか楽しげだった。
当然、悼矢にそんな戦いの知識などあるはずがない。ただ単純に攻撃を防ぐカードがそれしかなかっただけだ。

悼矢は青年の出方を伺っているのか、煙が晴れても土の壁から出てこない。姿が見えないので青年も攻めあぐねていた。

（時間稼ぎか……。だけどいずれワクナを縛っている“ヴィン・イヴィ”の効果も切れる……。小休止のつもりかも知れないけど自分の命を縮めているようなものさ……！）

ワクナに目をやるとワクナは自力で蔓や蔦から抜け出せそうだった。徐々にぶちぶちと緑の縄が千切れていっている。

青年は腰につけたホルダーからめぼしいエーテル・カードを取り出しほくそ笑んだ。

（準備万端……！）

Ｄａｎｃｅ２　其の１０－２

「いつまでそうやって隠れている気だい？　このままじゃ朝になってしまうよ？」

そう土の壁の向こうに語りかける。が、返事は返ってこない。

（……？　何か策を練っているのか？）

と、その時だった。

土の壁がザァァと砂になって崩れる。カードの効果が消えたのだ。慌ててカードを構えるがそこに悼矢の姿はない。

（！？　しまった……！　煙のどさくさに紛れて姿を隠したんだ……！）

辺りを見回す。しかしここは暗く闇の濃い上に倉庫が立ち並ぶ場所だ。隠れる場所には困らないだろう。

（くそ……どこだ……！　どこに隠れた……！）

どくん……どくん……。

静かな夜に自分の心臓の音が高鳴る。

と、そこに一人の男がやってきた。

「あぁん？　こんなところで突っ立って何してんだ、幹久ァ」

いきなり声をかけられ幹久と呼ばれた青年はエーテル・カードを男に向ける。

「お、おィ、よせ！　俺だ、俺！」

幹久は出てきた男の顔を見てカードを持つ手を下ろした。

そこにいたのは顔半分に刺青を入れ、パンク系の服装を着た男。

「なんだ……驚かせないでくれよ、藤島」

男――藤島マサキは肩をすくめた。

「そっちが勝手に驚いたんだろォ？」

「藤島、男を見なかったかい？　僕と同じ歳くらいの男だ」

幹久の問いに藤島は何かを思い出そうとするようにとんとんとこめかみをつつく。

「そういやァ人影を見たなァ、二人。駅前の方に向かって走ってったけどよォ」
「駅前だって……！　まさか逃げたのか!?」
まんまとしてやられた。今からじゃ追いついたとしても人ごみの中だ。
「くそっ！」
がつんと壁をぶつ幹久。
「おいおい、まさか戦ってたのかァ？」
「そうだよ。だけど逃したみたいだ」
「ハッ。お前がかァ？　ギャハハハ！　いつものねちっこい性格はどうしたんだ、おい？」
「……ワクナ」
「はい、マスター」
ワクナは怒気のこもった返事とともに藤島の首筋に鎌をそえる。その表情からは伺えないが主が侮辱されて腹を立てているらしい。
「おいおいおい、冗談だろォ？　キレんなよ」
藤島は両手をあげて降参のポーズをとった。
「……フン」
幹久は鼻を鳴らしてそっぽを向く。
そんな幹久を見て藤島はギャハハと笑うと馴れ馴れしく肩に腕をまわした。
「ところでよ、幹久。うっとおしい奴らが俺を追いかけててよォ。ちょっと手を貸してくれねぇか？」
「……。……目的を忘れてないだろうね。みんなが組んでいるのは助け合うためじゃないよ、“角笛”さん……。“風の冬”に怒られたって僕はフォローしないからね」
「ったく、その呼び名はやめろよ格好悪ィ。
そりゃもちろん目的は忘れちゃいねェさ。けどよォ、目の前をちょろちょろされたらウザってぇだろ？　なあ、“ヘズ”」
“ヘズ”と呼ばれた幹久は腕を組んでため息をついた。

「うっとおしい奴らってＡＥＳＳのことかい？」
「ＡＥＳＳとその犬たちだ」
「賞金稼ぎだね。誰？」
「八神きづな」
その名前を聞いた幹久の顔が引き締まる。
「“拒絶された子”……か。確かにそれは面倒だね……。分かった。手を貸すよ」
「ギャハハ！　そうこなくっちゃなァ！」
「それで僕は何をすればいいんだい？」
「そのことなんだが……俺に良い考えがあるんだァ」
藤島はにやりと笑った。

◇◇◇

「ここまで来れば大丈夫だろ……」
幹久と戦っていた男と悼矢は駅前まで逃げてきていた。
「すまなかったな。助けてくれたこと感謝する。おまえは命の恩人だ」
男は暗い顔でだが握手を求めてきた。悼矢はそれに応えて男の手を握る。
「人が人を殺すところなんて見たくなかったからな……。でもあんたらどうして戦ってたんだ？」
「俺はこう見えてＡＥＳＳの人間でな。淡川原を確保するのが俺の任務だった」
（淡川原……さっきの男のことか……）
悼矢はさきほどの青年を思い出した。エーテル使いとの戦いをゲームだと言って笑う青年。
そんなことが許されるわけがない。
「あの男は危険だ。既に何人ものエーテル使いを殺している。ＡＥＳＳとしては奴を放っておくわけにはいかない。だから俺は奴を確

保する任務に出たんだが……。ミイラ取りがミイラになってしまうとこだったな……」

「あんた、ＡＥＳＳの人だったのか」

「まあな。俺はもう行くがおまえも淡川原には気をつけろよ」

悼矢は真剣な表情でこくりと頷く。それを見ると納得したのか男は人の波に混ざって去っていった。

その背中はどこか哀しそうだと悼矢は感じた。

それもそうだろう。自分のエーテルが消滅してしまったのだからショックを受けないわけがない。

（もしリタが俺の目の前でやられたら……）

悼矢はぶんぶんと頭を振った。そんな場面は考えたくもない。

悼矢はポケットからカードを取り出した。自分の危機を救ったカード。先ほどは冷却期間に入っていてカードの色が褪せていたが今はもう色を取り戻している。どうやら四、五分ほどでエーテル・カードは冷却を終えるようだった。

（……戦闘中じゃ乱発はできないな……）

とその時だった。悼矢は自分の手が震えていることに気づいた。

（くそっ。今頃になって怖くなってきやがったか……）

震える手を開いたり閉じたりする。

しかし同時に悼矢は自分の中に興奮や高揚感があることに気づいた。

淡川原とのエーテル・カード対決を思い出す。

（戦える……俺でも……！　リタのサポートをしてやれる……！）

悼矢はぎゅっと拳を握ると歩き出した。

Ｄａｎｃｅ２　其の１１－１

リタを見つけるにはどうしたらいいのか。正直言って悼矢はもうお手上げ状態だった。よくよく考えれば夜の街に繰り出してリタを探す方法があまり効率的でないことにすぐ気づくはずだ。なにせ波科町は広い。どれだけの確率で探し人と会えるだろうか。やっと悼矢はそのことに気づいたのだ。

授業を受けながらきづなを見てみる。

（あいつなら何か良い方法を思いつくかもしれないんだがな……）

もう頼れるのはきづなしかいなかった。

そのきづなは相変わらず退屈そうに授業を聞き流している。きづなが聞き流していると分かってしまうのは言うまでもない。彼女が黒板を見ずに窓から外を眺めているからだ。しかもよく見ると耳にイヤホンがついていた。どうやら音楽を聴いているらしい。

あんな授業態度だというのに成績は優秀らしいから悼矢はほとほと納得ができない。たとえいきなり問題をぶつけても焦ることなく答えを返してくるので先生たちもお手上げのようだった。教師にとってはやりにくい生徒だろう。

それはさておき、きづなに話しかけるにしても場所を選ばないわけにはいかない。教室の中でエーテルの話をするのは問題外だ。

なので悼矢はきづなが一人になるのをずっと待っていた。ところがきづなは休み時間になっても自分の席に座ったままだ。

（いつもは気づいたらいなくなってるくせに）

とか悼矢は思う。そして事が進展しないまま次の授業が始まってしまう。

昼休みになってもきづなは席を動こうとしなかった。なので悼矢はバチバチとアイサインを送ってみた。

（気づけ八神！　大事な話があるんだ！）

しかし当然きづなはそんなもの見ていない。ただ机に肘をついて

外を眺めているだけだ。
（……ダメか）
諦めかけたその時、きづなは大きなため息をついて席を立った。
（動いた！）
このチャンスを生かさないわけがない。すぐに追いかけるのもおかしいので少し間を置いてから悼矢は教室を出た。
そんな悼矢の様子に気づいた人間が教室内に一人だけいた。
本田睦月だ。
きづなを追いかけて教室を出て行く悼矢を見て胸の中にもやもやとしたものが広がる。それを抑えるように睦月は胸に手をあてた。
「睦月～。何してんの。早く食堂行こうよ」
「ご飯なくなっちゃうよ～？」
そんな友達たちの言葉に睦月はハッとなって振り返る。
「う、うん……ごめん」
「ねえねえ、今日は何食べる？」
「んー、私はシーザーサラダ食べたいな～」
睦月の耳に友達たちの会話は届いていなかった。
思い返されるのはきづなを追っていった悼矢のこと。
（八神さん綺麗だもんねー……）
はあ、と俯いてため息をつく睦月。
そんな睦月の様子を見て友達たちは首を傾げるのだった。

◇◇◇

きづなが階段を上がっていくのが確認できた。姿を見失わないように悼矢は少し急いで追いかける。
そんな悼矢に気づいているのかいないのか、きづなはどんどんと階段を上っていく。
（あいつ、屋上にでも行く気か……？）
そうだとしたら悼矢にとって好都合だ。そして嬉しいことにやは

りきづなは屋上の扉を開けて入っていく。
悼矢もすぐに扉を開けて屋上に出た。しかしどういうことなのだろうか。見回しても屋上には人っ子一人いなかった。
（たしかにここに来ているはずなんだが）
とその時だった。
声は上から降ってきた。
「おまえの趣味は他人をつけまわすことなのか？」
声のした方に振り返る。そして唖然とした。
なんときづなは屋上の入り口の上、貯水タンクの隣に腕を組んで立っていたのだ。
風で髪がさやさやと流れ、その姿はどこか凛々しくもある。
「それで……今度は何が訊きたいんだ？」
「よくぞ用があると気づいてくれた」
「あれだけ視線を送られたら嫌でも気づく」
悼矢は自分の行動を思い返してみて「そりゃそうか」と納得してしまう。
「用ってのは他でもない。エーテルのことだ。俺のエーテル、リタがいなくなったから相談にのってもらおうと思ったんだ」
きづなの眉が不満そうに曲がる。
「……それだけか？」
「あ、ああ。そうだけど……」
「やれやれ。たかがエーテルがいなくなったくらいで……。レオなどしょっちゅういなくなっている。今もいないようだしな……」
さほど大したことでもないように髪を掻き揚げる。
「そんな散歩みたいな感じじゃないんだよ！」
悼矢の切羽詰ったような訴えに、きづなはジャンプして悼矢の前に降り立った。
「詳しく聞かせろ」
悼矢はきづなにリタがいなくなった時の話を聞かせた。話を聞き終わるときづなはあごに手をあてて『ふーむ』と唸る。

「なるほど。確かにそれは放っておくような状況ではないようだな」
「どうにかして見つける方法はないか？　夜中に街を探してみたんだが全然見あたらないんだ」
それを聞いたきづなの眼が点になる。
「……。……おまえ、エーテルもいないのに街をふらついたのか？」
「ああ、まあ……。エーテル使いに襲われて大変だったけどな」
ふぅときづなはため息をつくと、いきなり悼矢のおでこをぴしんっと指で弾いた。
「って！　何すんだよ！」
「お前は馬鹿か。エーテル使いがエーテルなしに夜出歩くなど自殺行為だ。二度とするな」
「けどよ、リタを探さなきゃ――」
「黙れ」
きづなは悼矢の頬を掴んで引っ張る。
「い、痛いっ！　痛いって！」
「いいか？　エーテル使いは一種特殊なオーラを出している。匂いと言い換えてもいい。それは人間同士じゃ気づきはしないささいなものだ。だが禍魂はその匂いをかぎつけることができる。この意味が分かる……かっ！？」
限界まで引き伸ばしたほっぺを放し、悼矢はぱちんっとなった頬を涙眼でおさえる。
「お前はお前が思っているよりもはるかに危険で馬鹿なことをしたんだ。人間はエーテルや禍魂に比べてどれだけ脆弱かということを肝に銘じておけ。でなければ……本当に死ぬことになるぞ」
その鋭い視線を受け、悼矢の顔も真剣になった。
「ああ」
だがすぐに悼矢の顔がふっと綻ぶ。
「……なんだ？　何をにやついている」
「いや八神はいっつもツンケンしてるけど根はやっぱり優しい奴な

んだな、と思って」
「なっ!?」
きづなの顔がボッと音をたてて真っ赤になった。
「な、なななな、にゃんだと!?」
(あ、噛んだ)
だがあえて突っ込まないでおく。なかなかきづなの焦った姿など見れるものではないからだ。
「ははは、そんなに恥ずかしがるなよ」
「恥ずかしがってなどいない! もうお前など知らん! 私は行くぞ!」
「あ、待てよ! 夜出歩くなって言ったって俺はどうやってリタを探せばいいんだよ!?」
「それくらい自分で考えろ!」
顔を茹でタコのように真っ赤にしたままきづなはすたすたと屋上から出て行ってしまった。
(まったく……怒るスイッチが変なところについているやつだ……)

Ｄａｎｃｅ２　其の１１－２

学校から帰宅した悼矢は縁側に座って六枚のエーテル・カードを見ていた。昨夜、自分の命を救ったカードだ。悼矢の持っているカードは次の六種だった。

“ファイアーボール”

“カダックの盾”。

“ウェリスタンの加護”。

“ヴィン・イヴィ”。

“キャンセルマジック”。

そして“ＡＥＳＳ”。

（こんなカードあってもリタがいなきゃ意味ないんだよなぁ……）

悼矢はばたんと背中から倒れて空を見上げる。すると何かが覗きこんできた。

しらたまだった。

相変わらず神出鬼没で、睫毛の長い美人な白猫だ。

「よぉ。腹でも減ったか？」

悼矢は上半身を起こしてしらたまの背を撫でてやる。だがしらたまはもう悼矢には興味をなくしたようで、じぃっと何かを見ていた。しらたまの視線を追ってみるとそれは自分の手にあるエーテル・カードだった。

「なんだ？　こいつが気になるのか？」

とその時だった。あろうことかしらたまはエーテル・カードをぱくっと咥えるとそのまま庭におりてしまう。

「あ、こら！　それは食い物じゃねぇぞ！」

慌てて庭におりる悼矢。だがそんな悼矢から逃れるようにしらたまはたったっと跳ねて桜の木を昇り、塀の上に移動する。

「まっずい……！」

悼矢はしらたまを追いかけて外に出た。

しらたまは一度悼矢をちらりと見ると再び駆けだす。
「しらたま！　待てよ！」
しらたまはどこへ行く気なのか。どんどんと住宅街から外れて山の方へ向かって行く。
（あいつの寝床でもあるのか？　だけど……）
「はぁはぁはぁ」
走り続けたせいか息をきらして膝を折る悼矢。
「これ以上は……はぁはぁ……走れねぇぞ……！」
「……」
するとしらたまも足を止め、塀の上からこちらを見た。
「なんだよ、おまえ……。追ったら逃げて、止まったら逃げるのをやめるなんて……。追い駆けっこなら他の奴とやってくれよ……」
悼矢の泣き言にも似た台詞にしらたまはふいとそっぽを向いて足でかりかりと耳の裏を掻いた。
そして一声。
「にゃー」
悼矢は『早く来い』と言われた気がした。
「あー、はいはい。行けばいいんだろ、行けばよ……！」
またしらたまを追いかけると、しらたまも駆けだす。
（やっぱりだ……しらたまの奴……どこかへ案内する気なのか……？）
家を出てからもう一〇分は走っただろうか。気づけば周りに緑が多くなってきた。山のふもとまで来たのだ。
「……なんだよ、ここ」
悼矢の眼の前には工場があった。といっても今はもう機能していないらしい。人がいるようでもないし、何より窓は割れ放題、門は錆びまくって蔦がからまっていた。砂利が敷き詰められた地面は雑草が生えまくっている。
カァ、カァ、カァ……。
日が暮れ始めて街から帰ってきたのだろうか、屋上にはカラスが

何匹も止まっていた。
まるで心霊スポットのようにおどろおどろしい様に、悼矢は思わずごくりと生唾を呑んだ。
しらたまはするりと格子の間をくぐって工場の中に入っていく。
「おいおい、この中に入るのかよ……」
正直、悼矢はこんな所には入りたくなかった。呪いだとか幽霊だとかが存在するかは知らないし、知りたいとも思わない。だがそういったものはいるかどうか分からないからこそ怖いわけで。
そんな悼矢の気持ちを知ってか知らずかしらたまはてくてくと軽やかに敷地内を進んでいく。
その口にエーテル・カードを咥えて。
「……。追いかけないわけにはいかないよなぁ……」

Ｄａｎｃｅ２　其の１２－１

悼矢は決心すると格子の門を乗り越えて工場内に着地した。
じゃりじゃりと砂利を踏んで工場に近づく。
「怒られたりしないだろうな……」
しらたまはと言えば割れた窓から中に入って行ってしまった。
（中に何があるってんだ……）
悼矢も鍵が開いている割れた窓を開けて工場の中へと侵入する。
ガチャリ……。
割れた窓ガラスを踏む音が静かに工場内に響く。
もう夕暮れだということもあるだろうが、中は暗かった。近場に電灯をつけるスイッチのようなものがあったので押してみたが、まったく反応がない。
（ま、こんな状態で電気が通ってるわけないか……）
眼をこらして辺りを見回してみる。
一体、何の工場だったのだろうか。ベルトコンベアが目に入った。かなり錆びついていて埃がたまっている。
（って、何の工場かなんてどうだっていいんだ。しらたまを追いかけないと）
だがいつの間にか白猫の姿が見えなくなっていた。
「お、おい……しらたま……？」
急に不安になってしまう悼矢。
暗闇の奥に少し隙間の開いた鉄扉があるのが見える。
（まさかあの奥に行っちまったのかよ……）
ここまで来て引き返すのも馬鹿らしい。悼矢はゆっくりとその扉に近づいていった。
ジャギ、ジャギ……。
床に散らばったガラスを踏む音が妙に緊張感を醸しだす。
そして悼矢は扉に手をかける。

キィイィイィ……。

錆びていたせいか想像以上に大きな甲高い音が鳴った。その音のせいか屋上のカラスたちがカァカァ鳴きながらばさばさと飛びたつ。

「っ！？」

悼矢はその部屋にいた人物を見て驚きのあまり息を詰まらせていた。

そこは狭い部屋だった。窓から夕日の赤い光が差し込んでいる。しかし赤いのは夕日のせいだけではなかった。地面にはなんと血痕がついていたのだ。地面だけではない。壁にも血がこびりついている。もうだいぶ時間は経っていて凝固してしまっていた。

その赤い部屋に――

――彼女はいた。

スプレーで落書きされたコンクリートの壁を背にして力なく床に座っている。どうやら血は彼女のものらしい。彼女の姿を見ればそれは分かる。

少女の服はびりびりに破れてあちこち傷だらけになっていた。ひどい出血だ。人間ならまず間違いなく死んでいるほどの重症だろう。床にこびりついた血の量からしてもだいぶ時間が経っているようだった。

きっと戦っていたのだ。それを証明するかのように彼女の手には愛剣が握られていた。

そんなぼろぼろの姿を見て悼矢の視界が滲んでくる。

そのすぐ傍にしらたまもいた。

しらたまは咥えていたカードをそこに離す。

だが悼矢はそんなしらたまの様子など見ていなかった。視線は座っている少女に釘つけになっている。

まるで人形のようにがくりと首を垂れた少女。

寝ているのか、気を失っているのか、それとも――

いや悼矢は既に気づいていた。

少女から一切の生気が感じられなかった。

Ｄａｎｃｅ２　其の１２―２

悼矢はゆっくりと彼女に近づいた。
「……おい……リタ……？」
彼女の名を呼ぶ。
だが返事は帰ってこない。
「なあ、リタ……。起きろよ」
悼矢は彼女の肩を揺らす。すると彼女の体は糸が切れたマリオネットのようにばたりと横に倒れてしまう。
その顔はあまりにも安らかで――
「おい、リタ……。ふざけんなよ……！　起きろよ、なあ、おい……！」
がくがくと肩を揺らすがまるで反応はない。
「嘘だろ……！　リタ！　眼開けろよ、リタァ！」
悼矢は少女を抱きしめた。冷たかった。生きている者の体温とは思えないほど冷たい。少女の体からは温もりがまるで感じられなかった。
「こんなはずない！　こんなはず……！」
彼女の手首を掴み、脈の在り処を探す。だが見つからない。どれだけ探しても脈が見つからない。
それもそのはずだろう。なぜなら彼女はもう――
「あ、ああ……あああああああッ！」
もう言葉にならない。
ぽろぽろと涙が溢れて、こぼれていく。
しらたまはそれを見ると哀しそうに眼を伏せ、部屋から出て行った。
死肉を貪りにでもきたのだろうか。部屋の割れた窓から黒いカラスが入ってきてリタに近づく。
「触るなァ！」

悼矢が怒りの形相で一喝するとカラスはカァと鳴いて部屋から出て行った。
彼女の頭を強く強く抱きしめる悼矢。
「ちくしょう……ちくしょう……！」
どうしてこんなことになってしまったのか。この数日間を彼女がどれだけ独りで戦ったのか想像するだけで胸がえぐられるようだった。
「っざけんなよ……！　勝手に巻き込んで、勝手にいなくなって……！　やっと見つけたと思ったら死んでるだと……！　冗談じゃねぇ……冗談じゃねぇよッ……！　幾らなんでも勝手すぎる……！」
リタと話したことが思い返される。リタの笑った顔が思い返される。リタの戦う凛々しい姿が思い返される。
この数日間だけで彼女は様々な表情を見せてくれた。
だがそのすべてはもう二度と見れない。
そう思うとどうしようもなく涙が溢れるのだった。
「馬鹿野郎ッ……！　死んじまったら意味ねぇだろうがよッ……！」
ぽたり、ぽたりとリタの頬に悼矢の涙が落ちる。
と、その時だった。
ぴくりとリタの眉が揺れる。そしてゆっくりと眼が開いた。
「ん、んー、な、なに……？　雨？」
とか呟きながら何事も無かったかのように体を起こすリタ。
そんな様子を悼矢は口を開けたまま唖然として眺めていた。
リタは眼をこすりこすり辺りを見回し、悼矢に気づいた。
「って、トウヤ！？　あんた、どうしてここに！？　っつつつつ……」
そう叫んでリタは血まみれの右肩を押さえた。
一体、何が起こっているか理解できず悼矢は眼をぱちくりとさせる。
「何でってしらたまが……いや、それは今どうでもいい。おまえ、死んでたんじゃねーの？」

「はあ？　死んでないわよ。この通り生きてるけど？」
「いや……だってお前、脈なかったぞ。体も冷たかったし」
その言葉に何か思い当たるふしでもあったのか『ああ！』と手をうつリタ。
「この姿を見てのとおりちょっと派手にやられちゃってね。あまりにも傷が深いからしばらく仮死状態になって体力の回復を待ってたのよ」
とか笑顔でいけしゃあしゃあとのたまうリタ。
そのあまりにもあんまりなオチに悼矢の握った拳がぷるぷると震える。
「あっ！　もしかして私が死んだと思って泣いてたの！？　あんたも可愛いところあるじゃなーい！」
へらへらと笑って肘で小突いてくる。
それが我慢の限界だった。
「っざけんな、テメェ！」
悼矢はリタの胸ぐらを掴み立ち上がった。
悼矢の表情はリタが見たことないほど怒りに染まっていた。
「ど、どうしたのよ……なにマジでキレてるのよ……」
「キレるに決まってんだろ……！　俺がどれだけ心配したと思ってるッ！？」
悼矢の大声が狭い部屋の中を反響した。
リタは驚いたように眼を丸くしている。
「俺がどんな気持ちであの手紙を読んだと思ってる！？　俺がどんな気持ちでお前を探したと思ってる！？　俺がどんな気持ちでお前の傷ついた姿を見たと思ってる！？　俺がッ……どんな気持ちでお前の無事を願ったと思う……！？」
言葉が出始めたらもう止まらない。
「勝手に俺を戦いに巻き込んでおいて、勝手にいなくなりやがって！　ふざけるなよ！　残された俺はどうなる！　『迷惑をかけるからやっぱりやめます』だあ！？　それなら最初から俺と契約なんか

してんじゃねーよ！」
「っ！　だって……仕方ないじゃない……！　私は弱いのよ……！　私程度じゃどうにもならない位の敵がごろごろいるのよ、ここには……！　悼矢に迷惑はかけられないじゃない……！」
　リタも怒りの表情で言い返してくる。
「それがそもそもの間違いだっつってんだよ、このボケが！」
「ボ、ボケぇ！？　あんたなんかに言われたくないわよ！」
「迷惑かけられないだぁ！？　んなもんお前に出会った瞬間から俺に迷惑かかりまくりだろうが！　いまさら何を遠慮してやがる！　迷惑がかかることくらい承知の上でこっちは契約してんだよッ！」
「その迷惑の度合いが限度を超えたって言ってんのよ！　あんたのところに居候するとか、ちょっと危険な目に合うとかそんなレベルじゃなくなってるの！　あんたの命に関わるかもしれないのよ！？」
　この意味分かってんの！？」
「んなこと先刻承知だ！　最初に禍魂を見た時から命にも関わるような危険があるってのは分かってるに決まってんだろ！　ナメてんのか、お前は！　なのにまだ迷惑だのなんだの考えてウジウジしやがって！　お前は俺のエーテルだろ！　それなら俺の決意くらい理解しろ！」
　リタは悼矢の手を振りほどいた。
「あんたのエーテルだからあんたが傷つくのが嫌なんじゃないの！　決意を理解してないのはあんたの方でしょ！　あんたの前で無様に気を失って……！　他のエーテル使いに助けられて……！　私がどれだけ悔しかったかあんたに分かるっていうの！？」
「分かるか、バカ！」
「ほぉら、やっぱり分からないんじゃないのよ！　どっちが正しいこと言ってるか分かったでしょ！？」
「分からねぇな……！　ああ、理解できねぇよ……！　逃げてる奴の言い分なんて分かりたくもねぇ！」
「逃げてるですって！？　私のどこが逃げてるって言うのよ！　私

が考えて考えて考え抜いたすえに導き出した答えよ！」
　リタは怒りからか拳を横に振って背後の壁を打った。壁にヒビが入り、パラパラと破片が落ちる。
「それが逃げだっつってんだよ！　これからの方針を考えるならいい！　大いに考えりゃいいさ！　けどなぁ！　危ない目に合うかもしれない、俺が殺されてしまうかもしれないなんて考えたって良い事なんて一つもないだろうがよ！　そんなマイナス面ばっか考えて臆病になってたら前に進めないだろうが！　違うか！？」
「そ、それは……！　だ、だって……」
「だってじゃねぇ！　一度決めたことならやり通せよ！　誇り高きエーテルなんだろ！？　このままじゃお前負け犬になっちまうぞ！」
「だって……怖いのよ……！　あんたを失いたくない……！　こんな私を探してくれるトウヤだから……！　こんな私を奮い立たせてくれるトウヤだから……！　失いたくないのよッ……！」
　リタはついに涙をこぼして叫ぶ。
　そんなリタの肩を悼矢は掴んだ。
「だったら守れよ……！　俺の傍にいて死ぬ気で守れよ！　俺は知っちまったんだ！　禍魂みたいな訳分からねぇ危険な化け物がいるってことをな！　だったら止められねぇ！　俺は一人でもやるぜ！　一人でも禍魂をこの世界から追い出してやる！」
「どうして……？　どうしてそこまで真っ直ぐでいられるのよ……。自分の命が危険に晒されるっていうのに……！」
「誰かがやらなきゃいけない……。お前が言った言葉だ！　そして俺たちにはそれができるだけの力がある！　ならやらないわけにはいかないだろ！」
「無理よ……禍魂は強いわ……。他のエーテル使いでさえ私は相手にならなかったじゃないの……！　そんな私たちに何ができるっていうのよ！」
「ああ、そうだな。だけどそれは俺のせいだ。　よく考えてもみろよ。他のエーテル使いはみんなエーテル・カードを使ってた。お前

とカリエラの時だってそうだ。相手はエーテル・カードを使って強化していたんだぞ！　あれはエーテル使いのサポートがあってこその強さなんだよ！　そしていま俺は少ないにしてもエーテル・カードを持ってる！」

悼矢は床に落ちている六枚のエーテル・カードを引っ掴んでリタに突きつける。

「これでやっと条件は五分五分！　もし相手がエーテル・カードを使っていなきゃ、もしくは俺がエーテル・カードを持っていればお前は勝ってたんだよ！　なにせお前はエーテル・カードなしで禍魂やカリエラと対等に戦ってたんだからな！」

ぽかーんとなっているリタ。

「お前は決して弱くなんかない……！　エーテル・カードがなくても禍魂と渡り合えるほどの強さを持っているんだ！　分かったか！！」

そう言い終えて悼矢ははぁはぁと肩で息をした。

リタは俯いて自分の右肩を触った。

そこに刻まれているのは自分の紋章。

「……ほんと凄いのを選んでくれたものね……私の紋章は……」

目尻の涙を拭って思わず笑みになってしまう。

「あんたには何を言っても無駄なようね……。あーあ……なんだか馬鹿らしくなってきたわ……」

リタはくしゃくしゃと頭をかきむしる。

「やっと分かったか」

「ええ。無駄なら仕方ないわよね」

リタは悼矢を見上げて笑った。

「そうだな、仕方ない」

その笑顔を見て悼矢もまた口元に笑みを浮かべる。

「やるからには徹底的にやるわよ」

そう言ったリタの眼には既に迷いは消え去っていた。そこにあるのは信念を携え、進むことを決めた意志の瞳。

「へっ、あったり前だろ」
悼矢はリタに手を差し伸べた。
リタはその手を握って立ち上がる。
「しっかし、ひどい有様だな」
悼矢はリタの姿を上から下へと視線をやってそう呟いた。
「フン。一人だったんだから仕方ないでしょ」
「もしかして負けたのか？」
「勝ったに決まってんでしょ！　私は最強のエーテルなのよ？　なめないでよ！」
「へーへー。ピーピー泣いてた奴の台詞とは思えないよな」
「な、なんですってぇえええ!?」
リタは後ろから悼矢の首にアームロックをかけた。
「おわっ！　ばか、やめろ！　く、くるじぃ……！」
リタが悼矢に体重をかけたせいで、悼矢とリタはばたーんと床に倒れてしまう。
もくもくと埃が舞い上がり、二人は互いに埃だらけになった姿を見て眼を点にする。
そして何かが弾けたように二人は笑いだす。
何が可笑しいのか分からなかったが、何か笑いが込み上げたのだった。
ひとしきり笑うと悼矢は立ち上がった。
「さぁて、それじゃあ帰るとするか。きっとこよりが心配してる」
その言葉を聞いてリタはため息を吐いた。
「あんたのこより好きはもう病気ね。本当にシスコンなんだから」
「っるせーな！　シスコンって言うな！」
リタは立ち上がるとあっかんべーをしながら走りだす。
「やーい、シスコン、シスコン！」
「てめ！　ぶん殴る！」と悼矢はリタを追いかけた。
そうして二人がじゃれ合いながら廃工場を出たまさにその時だった。

ちゃーちゃーちゃらら～。
悼矢の携帯電話が着信を知らせる音楽を奏でた。
ディスプレイを見ると河上からだった。
「はい、もしもし？　どうかしたんですか？　……。
……え！？　藤島の居場所が分かった！？」
悼矢のその言葉に先を歩いていたリタがハッとした表情で振り返る。
もう暗くなった廃工場の屋上でカァカァとカラスたちが不気味に鳴いていた。

Ｄａｎｃｅ３　其の１－１

そこは喫茶店だった。
悼矢は河上に詳しい話がしたいと呼び出されていたのだ。
夕食時だというのに喫茶店には数人しか客はいなかった。この喫茶店には軽食ぐらいしかないので当たり前かもしれないが。
カウンターでは店のマスターなのか、いかにもな顎鬚のおじさんがコップをきゅっきゅと磨いている。
他の店員はと言えばこの店の制服なのだろうかこじゃれた服を着た女の人が一人だけだ。歳の頃は二〇歳前後。おそらく大学生だろう。
「いらっしゃいませ。お一人様ですか？」
女の人は営業スマイルとは思えない明るい笑顔でやってきた。
ちなみにリタは格好も格好なので店には入っていない。
悼矢は『先に家に帰っておいてくれ』と言ったのだがリタは『日も落ちたし一人でいるのは危険よ』と頷かなかった。
「待ち合わせしてるんですけど」
「ああ、はい。伺っております。こちらへどうぞ」
通されたのは店の最奥にあるテーブルだった。そこに河上が紅茶を飲んで待っていた。
「悼矢くん。よく来てくれましたね」
悼矢は河上の向かい側に席をつく。
「いい雰囲気のお店じゃないですか」
「ふふ、そうでしょ。ここは私のお気に入りなんですよ」
「あ、すいません。ホットコーヒーお願いします」
「はい、かしこまりました。少々お待ちくださいね」
悼矢の注文に女性は微笑んで応対した。
悼矢の元にコーヒーカップが届いた時だった。
カランコロン……。
店の出入り口につけられたベルが鳴り、来客を知らせる。

何気なくそちらに視線をやって悼矢は驚いた。
店に訪れたのは八神きづなだった。
きづなは店員の女の人と二、三話すと悼矢と同じようにこちらの席へやってきた。
だが悼矢に気づくとぴたりと足を止める。
「……」
そのきづなの睨むような視線に悼矢は肩をすくめてみせた。
(まだ昼のこと怒ってるのかよ)
「ようこそ、八神くん。どうぞ座って」
促されるままに悼矢の隣に座るきづな。ただそれだけだというのにきづなのいい香りが悼矢の鼻腔をくすぐった。
「……。何を見ている」
「あ、いや、べつに……」
視線に気づいて訝しげに眉をひそめるきづなから悼矢は慌てて顔を前にした。
「何かご注文されますか?」
「コカ・コーラ」と短く注文するきづな。
「すいません。うちはコーラおいてないんですよ。サイダーならありますけど」
「じゃあ、それ。炭酸飲料なら何でもいい」
「はい。それではすぐお持ちしますね」
きづなの素っ気無い態度に気分を害した様子はなく店員の女の人は微笑みを絶やさぬままカウンターへと戻っていく。
「それで藤島の居場所が分かったって本当なんですか?」
あまりリタを待たせるのも何なので、悼矢はさっそく本題に入った。
藤島マサキ。最低二体のエーテルを持つエーテル使い。河上の部下である矢川亜紀子を殺し、カリエラを強制的に自分のエーテルにした男だ。リタにとっては雪辱の相手でもある。河上の任務は彼を捕まえることらしい。河上にとってはただ任務というだけでなく、

部下の仇という想いもあるだろう。
「ああ、まあね。この情報はまだ“ＡＥＳＳ”でも公開されていないことなのですが。他言はしないで欲しいんです」
「するわけないさ。そこらの賞金稼ぎに突入されて失敗されたら眼も当てられないだろうからな」
きづなはテーブルに置かれたサイダーを何気なくストローで飲む。すると少し驚いたような表情になってまじまじとサイダーを見つめた。そして再度、黙ってストローに口をつけた。
どうやら気に入ったらしい。サイダーはどんどんと減っていく。
そんなサイダーに夢中になってるきづなの様子を見ながら悼矢は河上に問うた。
「でも、どうして俺たちを呼び出したんですか？」
「はい。そのことなんですけど、私が藤島を捕まえる任務についていることは話しましたよね」
「はい、覚えてます」
河上はＡＥＳＳに属する人間だ。いうなればエーテル使いの警察。藤島のような凶悪な犯罪者を放っておくわけにはいかないのだ。
「藤島を捕まえるために拠点に押し入ろうと思うんですけど、それに協力して欲しいんですよ」
「それはこの三人でか？」
「ええ。本来なら私一人でやるべきことなのかもしれませんが、念には念を。今回の作戦で確実に藤島を捕まえたいのです。まあ、エーテル二体持ちとはいえ一人に対してエーテル使い三人も送り込めばお釣りがくるでしょうがね」
笑って紅茶を飲む河上。
「どうして俺たちを？」
「君たちは藤島と会っていますし戦ってもいますからね。適任でしょ？」
それに彼とは二人とも因縁があるみたいじゃないですか。どうですかね？」

「報酬は出るのだろ？」
「それはもちろんです」
きづなの問いに頷く河上。
「それなら答えるまでもないな」
「悼矢くんはどうかな？」
「構いませんよ。むしろ望むところです」
悼矢の眼の奥にチロチロと滾る意志の炎を見、河上は少し驚いたような表情をする。
（男子三日会わずば刮目して見よ、か……。何があったかは知らないが強い意志を感じるな……）
河上はすちゃりと眼がねのズレを直し、レンズを光らせる。
「作戦の詳細は？」
「作戦実行は明日。この時間にここへ集合しましょう。それから藤島の拠点を三方向から挟撃します」
「藤島の拠点ってどこなんですか？」
「キミたちのことを信じてないわけではありませんが、拠点の場所は明日、作戦実行前に伝えることにしましょう。ね、八神くん？」
にこやかな視線を受け『ちっ』となぜかきづなが舌打ちをして顔を反らした。
（八神のやつ、場所を聞いたら今日にでも一人で行ってたな……）
「私からはこれくらいですが、何か質問はありますか？」
首を振る悼矢。
「それでは今日はこれで解散としましょう」
きづなは千円札をテーブルに置くと何も言わずに立ち上がる。
「八神くん。ジュース代くらい支払いますよ。呼び出したのはこちらですから」
「お前に払ってもらう義理などない」
それだけ言い残してきづなは店を出て行った。もちろん残ったサイダーのグラスは空だ。
「ありがとうございました～」

「嫌われてるのかな？」と河上は肩をすくめて笑う。
「八神は誰にでもああですよ。それじゃあ俺も行きますね」
「はい、お疲れ様です。キミの分くらいは払わせてもらいますよ」
「はは、助かりますよ。それじゃ」
悼矢も店を出て行く。
「ありがとうございました～」
笑顔で見送った店員の女性はとことこと河上の元へやってきた。
「河上さん、今の子はもしかして――」
女性のその言葉に河上の口元が笑みになる。その眼はレンズが光を反射しているせいで分からない。
「ああ。彼が司さんの“息子”ですよ」
そう聞くと嬉しそうに手を合わせた。
「ああ、やっぱり。どことなく雰囲気が似ていらっしゃいましたね」
「彼がどこまで成長してくれるか……。これからが楽しみです」
河上は窓の外に視線をやる。
「“拒絶された子”に“奇跡の子”……そして貴方。面白いトリオじゃないですか」
「……。……そうですね」
河上は窓の外を眺めたまま低い声で応えた。

Ｄａｎｃｅ３　其の１－２

「どうだったの？」
「明日、藤島の住家に押し入るってさ」
自宅へと帰る道。悼矢はリタに喫茶店の中で話していたことを説明した。
「三人で行ったら藤島だって一たまりもないだろうな。しかも奇襲だし」
「そうね。やられた分はやり返してやりたいところだけど」
「でもお前……体、大丈夫か？　河上さんに言って延期してもらうよう頼んでみるか？」
「何バカなこと言ってるのよ。敵がいつねぐらを変えるかも分からないのに。敵のねぐらを突き止められたなんて、こんなチャンスは滅多にないわ。あの河上って人は本当なら今日にでも攻め込みたいはずよ。
それに私の体なら大丈夫。明日の今頃には戦えるわよ」
「……あんまり無理して心配かけるなよ」
「心配してくれてどうも。でも私のことより自分の身の安全を心配しなさいよね。明日が本当の意味であんたの初戦になるんだから」
「分かってるって」
そんなことを話しながら悼矢たちは家の扉を開けた。
「ただいまー」
途端にどばんっと大きな音をたててリビングの扉が開く。
「悼矢ちゃん！？　今までどこほっつき歩いてたの！？」
とぷんすか怒っているこより。だが悼矢の隣にいる人物を見て、見る見るうちに驚きの表情に変わる。
「あ、あはは。久しぶり、こよ――」
リタが言い終わる前にこよりはリタの胸に飛び込んでいた。
「こ、こより……？」

「いきなりいなくなっちゃうなんてひどいです！　何か悩んでいたのなら私に相談してくれてもいいじゃないですか！」
顔をあげたこよりの眼には涙が浮かんでいた。
リタはそれを見て微笑むとこよりの頭を撫でる。
「ごめんね。ごめんね、こより。でももう大丈夫だから」
「でも……ひどい傷……痛くないですか？」
「大丈夫よ。こんなの放っておけば治るわよ」
「むぅ、ダメです！　ばいきんが入ってるかもしれないんですから！　ほら消毒しますよ！」
「あ、ちょっと、こより！」
リタはこよりに手を引っ張られてリビングへと入って行った。
そんな二人を見て悼矢は微笑ましく思った。
それは何よりリタがこの家の一員として受け入れられていることを嬉しく感じたからだ。
そしてふと思うのだった。
八神きづなはどうなのだろう、と。
あの性格だ。彼女は家族とうまく付き合えているのだろうか。もしかしてうまくいっていないからあんなさばさばとした性格になってしまったんじゃないだろうか。
思えば悼矢はきづなのことを何も知らなかった。どこに住んでいるのか、兄弟はいるのか、どんな物を食べ、どんな物を好み、どんな生活をしているのか。
（落ち着いたらちゃんと話してみるか……）
そんなことを思いつつ悼矢はリビングに向かった。

◇◇◇

そこはマンションの一室だった。
八神きづなは自宅に帰ってきていた。
部屋の電気もつけずに、小さな冷蔵庫を開ける。中に入っている

のは炭酸飲料ばかりだ。その一つノンカロリーコーラのペットボトルを取って封を切り、口をつける。
月の光が差し込む部屋で、一人ソファに座る。
目の前のテーブルには一枚の写真立て。その写真に写っているのは三人の人物だった。優しく微笑む男性と女性、その間に挟まれ無邪気に笑う少女の写真。
「疲れたか」
いつからそこにいたのだろう。部屋の片隅にはレオが前足を交差させて伏せていた。
「疲れたとしても嘆く暇なんてないさ」
「目的を達成するまで……か？」
「ああ」
きづなは写真立てを睨みつけた。
それが巨悪の権化であるかのようにありったけの憎悪を込めて。
「……。……あまり無理はするな」
レオのその言葉にきづなはフと笑う。
「珍しいことを言うな」
「宿主に体調を崩されたら困るのは俺だからな。馴れ合う気で言ったわけではない」
「ふん、馴れ合う気がないのはこちらも同じだ。明日、藤島とやりあう。ゆっくり休んでおけ」
きづなはペットボトルを机の上におくと立ち上がる。そして服を脱ぎ散らしながらバスルームに向かった。
脱いだブラウスを顔にかけられたレオは首を振ってまだ温もりの残ったそれを床に落とす。そしてやれやれと眼を閉じるのだった。

Ｄａｎｃｅ３　其の２－１

朝になった。
悼矢は部屋で服を着替えていた。
ぱしんっと自分の頬を叩いて気合を入れる。
「よしっ」
リビングに行くといつもどおりリタはソファに座って朝のニュースを見ていた。
今日が決戦の日だというのにリタはとてもリラックスしていた。
「傷はどうだ？」
「この家の効力も手伝って順調に回復しているわ。この分なら昼までには戦えるようになるわよ」
エーテルの回復力に悼矢は改めて感心した。
「だけど、よくくつろいでいられるな。今日の夜には命をかけた戦いをするっていうのに」
「何言ってるのよ。今から気を張ってたんじゃもたないわよ」
「……それもそうだな」
「あ、悼矢ちゃん。おはよー。朝ごはんもうできてるよ」
「こよりはもう食べたのか？」
「うん。リタさんと一緒にね。だって悼矢ちゃん休みの日は起きてくるの遅いんだもん」
「へいへい。お兄さんは一人で寂しく食べますよ」
そう言いながら悼矢は食卓についた。
「もう、そんなこと言って……。一人で食べるのが寂しいなら休みの日でも早く起きればいいじゃない。それに休みだからって起きる時間変えたら、月曜日の朝が辛くなっちゃうんだから」
こよりは掃除道具を押入れから出すと廊下に出て行った。
「なんだか……不思議だよな」
悼矢とリタの二人になったリビングで、悼矢はそう呟いた。

「つい最近まではこんな風にのんびりした時間があたり前だったんだよな」
「後悔してるの？」
「はは、違うって。禍魂だとかエーテル使いの犯罪者だとか暗い部分を知ったからかな。こういう普通の何でもない時間が新鮮で貴重に感じるんだ」
「貴重……ねぇ」
「今までこういうかけがえの無い時間をぐーたら過ごしてきたのが恥ずかしいっていうか。そういう意味ではお前に感謝しないとな」
「あんたってほんとポジティブよねー。そういうところ尊敬するわ」
「……。……今の褒めたんだよな？」
「さぁ～ねぇ～」
そんな平和な時間はあっさりと過ぎる。
ついに日が暮れ、夜になった。
（そろそろ時間か）
悼矢は用意をしてリビングにいるリタを呼びに階段を下りた。
果たしてリタは階段の下で腕を組み、待っていた。
「準備はできてるわね」
「ああ。そっちもいつでも行けるみたいだな」
「ええ。気力も体力も充分」
「じゃあさっさと行くか」
玄関へと向かう悼矢にリタは疑問を投げる。
「こよりに伝えなくていいの？」
食卓でご飯を作り始めているこよりの方に視線をやる。
「あんまり心配させたくないからな。さっさと帰って二人で怒られようぜ」
ウィンクして笑う悼矢を見てリタは呆れ気味にため息をついた。
「本当にシスコンなんだから……」
「誰がシスコンだ！　誰が！」
さっさと玄関から出て行くリタに続きながら悼矢は文句を言った。

◇◇◇

カランコロン……。

悼矢とリタは例の喫茶店に来ていた。

「いらっしゃいませ～」

昨日と同じ店員の女性がやってくる。だが悼矢が待ち合わせだと言う前に女性は次の言葉を発した。

「片桐悼矢様とお連れ様ですね。どうぞ奥のお部屋へご案内します」

顔を見合わせる悼矢とリタ。

言われるがまま女性について行き、悼矢とリタはカウンターの奥にある部屋へと案内される。

コンコン。

「片桐様とお連れ様がお見えになりました」

『ああ。入ってもらってください』

中から河上の声が帰ってくる。

「失礼致します。さあ、どうぞ中へお入り下さい、片桐様、ルクライル様」

店員の女性がドアを開けてくれる。

「どもども」と恐縮しながら中に入ると、そこには河上ときづな、レオの姿があった。

店員の女性は一礼すると扉を閉める。

「昨日はよく眠れたかい？」

「はい。体調は万全ですよ」

「それは良かった。初めましてになるかなリタくん」

「ええ。トウヤが世話になったみたいね。その節は感謝しているわ」

「いえいえ。ＡＥＳＳの人間として当然のことをしたまでですよ。それにこれからは私がお世話になることの方が多そうですしね」

「河上、世間話はそれくらいにしろ」

部屋の壁にもたれかかって腕を組んでいたきづながたしなめる。

「それではご希望通り今夜の作戦の話をしましょう」
河上は部屋の中央においてある円テーブルに地図を広げた。みなそれぞれがその地図を囲む。
「藤島の居場所はここ。波科港にある倉庫の一つです」
「藤島が……そこにいる」
悼矢はごくりと唾を飲んだ。
「倉庫には三つの出入り口があります。荷物を運搬する正面の出入り口。そして左右に従業員用の出入り口。私たちはそれぞれその三方向から倉庫の中へ侵入し、藤島を挟撃して捕まえます」
「なるほど。逃げられないように袋のねずみにするわけですね」
「その通りです。せっかく居場所を突き止めたのに逃げられてしまっては意味がないですから。配置ですが、私は正面から、悼矢くんは右側出入り口、八神くんは左側出入り口から突入して下さい」
「だが今も藤島はいるのか？　突入してみたはいいが、中はからっぽじゃ笑えないぞ」
「藤島はいますよ。私のゲートキーパーが倉庫の見張りをしていますから、確かです」
「それなら問題ないな」
「しかし相手は一人とはいえ二体のエーテルを保持しています。決して油断のないようにお願いしますよ」
こくりと頷く悼矢。
「もちろんですよ。それは理解してるつもりです」
「さて、作戦と銘はうっていてもこんなものですが……。いえ、詳しいことはあえて決めません。状況は一刻一刻と変わるものですからね。もし何か想定外のことが起きた場合は各自の判断に委ねます」
「分かりました。任せてください」
「それでは行きましょうか。戦場へ」
河上はにこりと微笑んだ。

Ｄａｎｃｅ３　其の２－２

港の近くまで来ると河上は立ち止まって振り返った。
「ここで別れましょう。それぞれバレないように配置についてください。突入は今から一五分後の九時四分です。念のため突入の合図は“ＡＥＳＳ”で知らせますね」
「……レオ、行くぞ」
きづなはレオに跨ると早々と倉庫の屋根へと姿を消した。
「せっかちな奴だなぁ」と少し呆れ気味に言う悼矢。
「生き急いだところで報われないというのに……」
「え？　何か言いました？」
「いえ。それでは私も位置につきますね。また後ほど」
河上はこれから命がけの戦闘をするとは思えないほど軽い笑みで歩いて行った。
「私たちも行きましょ」
「ああ。そうだな」
二人も歩き出す。
だがすぐに悼矢は足を止めた。
「？　どうしたの？」
何か違和感を感じていた。いやその感覚を違和感と表現していいのか分からないが、とにかく何かこの先へと進むことに頭では理解できないひっかかりを感じたのだった。
「いや、あまりにも簡単に事が進んでるな、と思って」
その言葉にリタは訝しげな顔をする。
「どういうこと？」
「分からない。自分でも分からないから不安なんだ」
「まったく、突入前になって何を言ってるのよ。緊張するのは分かるけどしゃんとしなさいよね」
「ああ……」

頷いて歩き始める。だがその顔は何か納得していないようだった。その様子にため息をついて悼矢に続くリタ。

悼矢は辺りを見回した。

倉庫が行儀よく並んでいた。辺りは暗く、物陰も多い。身を潜めるには確かに最適かもしれない。

悼矢はそこでふとこの港で会った一人のエーテル使いのことを思い出していた。

淡川原幹久。鎌を持つ少女のエーテルを連れたエーテル使い。何の迷いもなく、まるでゲームのように人を殺す男。悼矢が奴と会ったのも港の倉庫近くだった。

そして藤島の居場所もその近くだという。

（これは偶然か……？）

悼矢の顔が知らず知らず渋くなる。

「突入、五分前……。いよいよね」

予定のポイントについた二人は暗闇から倉庫の方を見た。

「電気がついてるな。誰かが中にいるのは間違いなさそうだ」

「……」

悼矢がリタの方を見ると、さっきとは打って変わってリタは鋭い眼光で倉庫を見ていた。

「トウヤ……。あんたが感じた不安、正解かも知れないわ」

「正解って？」

「あまりにも不自然だわ。潜伏している身だっていうのに灯りなんか点けて……。まるで誘ってるみたい」

「つまり罠ってことか！？　だったら早く河上さんに連絡しなきゃ――」

悼矢は“ＡＥＳＳ”を取り出す。

だがそれをリタは止めた。

「あんたが教えなくても気づいてるわよ、あの二人なら……。それでも連絡がないってことは罠であろうがやる気満々ってことよ。河上が言ってたでしょ。状況は変わるものだって」

悼矢は唖然とした。そして不安にかられていた自分を叱咤した。
（何を弱気になってるんだ、俺は……！　不確定要素がある事は最初から分かってたじゃないか……！　そうだ！　何が待ちうけていても関係ない！　ただ藤島を倒す！　それだけだ！）
――5
o
とその時、“ＡＥＳＳ”が突入開始のカウントダウンを始めた。
――4
「いよいよか……！」
手にエーテル・カードを握り締め悼矢は倉庫を見やった。
――3
「ゲートキーパー。気を抜かないで下さいよ」
河上はすちゃりと眼鏡をかけ直す。そのレンズがきらりと反射した。
傍にいた銀色の甲冑がすっと“鍵”を構える。
――2
「準備はいいか」と視線を倉庫から外さずにきづなは問うた。
「ああ。暴れてやろう」
レオのその応えにきづなはフと笑った。
――1
「さあ、トウヤ！　腹くくるわよ！」
リタがアルデヴァインをエーテル化させる。
「ああ！　やられた分はやり返してやる！」
そしてついにその刻がくる！
――0
「ゲートキーパー！　正門をぶち破れ！」
銀色の甲冑が下段に構えたまま鉄の扉に突っ込み、叩き割った！

◇◇◇

「いくぞ、レオ！　門を吹き飛ばせ！」
「応！」
レオが地面を蹴り、門に体当たりをして扉を吹っ飛ばす！

◇◇◇

「ちゃんとついてきなさいよ、トウヤ！」
リタは愛剣を上段に持ち上げて地面を蹴った。
「ああ、分かってるって！」
「はああっ！」
ジャギィィン！
リタは門を叩き斬って中へと侵入した！
中は倉庫ということもあってか、隅に少しばかりのコンテナが積まれているのみで、かなり広い空間になっていた。
そしてその中央。
そこに藤島は立っていた。
「ＡＥＳＳです！　藤島マサキ！　貴方を拘束します！」
ゲートキーパーが藤島へと駆ける。
「遅れをとるな、レオ！」
「言われるまでもない！」
レオも床を蹴って藤島へ跳びかかる。
「リタ、頼んだぞ！」
「ええ、任せなさい！」
さらにリタが藤島へと肉薄する。
その刹那、それは同時に起こった。
上から降ってきた禍魂がゲートキーパーに拳を振り下ろし、レオの背後にいきなり出現した鎌を持つエーテルが斬撃を繰り出し、物影に隠れていたハープを持つエーテルが音を奏でリタを襲撃する！
いきなりの敵襲に三人はそれぞれ対応する。
「エーテル・カード、セット！　“コーリング”！」

河上が手に持つカードが光を放ち、ゲートキーパーの姿が掻き消え、河上の前に瞬間移動する。
禍魂の拳は空振りに終わり、その巨体はドゥンと音をたてて地面に着地した。
「エーテル・カード、オン！“サード・ドライブ”！」
きづなの手に持つカードが弾けた瞬間、レオは眼にも止まらぬ速さで床を蹴って横に移動し、鎌の斬撃を回避した。
「エーテル・カード、発動！“カダッグの盾”！」
悼矢の声に従いエーテル・カードが煌いて、リタの横に土の壁が出現し、不可視の攻撃を防ぐ。
禍魂はゆっくりとゲートキーパーに視線をやる。その手からはジャギッと爪が伸びた。
鎌を持つエーテルはレオに向き直り、すっと静かに鎌を構える。
リタは物影から出てきたハープを持つエーテルに向かって大剣を構えた。
その誰もが悼矢にとって知った顔であった。
禍魂のグラントス。
黒鎌を持つエーテル、ワクナ。
ハープを持つエーテル、カリエラ。
そして――
「やれやれ、奇襲は失敗か」
コンテナの影から青年がでてきた。やれやれと言いつつその表情はあまり困った様子に見えない。
「ククク……今の反応からするに何かあると予想していたようだなァ。そうでなくっちゃ面白くねェ」
楽しそうに笑い、倉庫内を見回す男。
――エーテル使い、淡川原幹久。
――エーテル使い、藤島マサキ。
「それにしても……こりゃまた知ってる顔ばかりだなァ……。憎まれたもんだぜ」

「藤島……！　私たちがここに来ることを知っていたのですか！」
「さあてなァ……。虫の知らせっつーの？　お前らが今日この時間にくるのがなぜか分かっちまってなァ……」
河上の問いにニヤニヤとした笑みで返す。
「藤島。虫の知らせはそういう意味じゃないよ」と淡川原がため息をつきながら突っ込みを入れたが、藤島は聞いちゃーいない。
「戯言を！　全員まとめてお縄についてもらいますよ！」
河上はスーツの内ポケットからカードを取り出す。
「ハッハァ！　いいねェ！　パーティの始まりだァ！　ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬ！」
藤島がエーテルを呼び出す。黒の陽炎と共に真っ黒のギターが藤島の手に出現する。
「さあ、奏でやがれ！　サイッコーの断末魔をよォ！」
ギュィォォオオォォゥン！
藤島がギターを掻き鳴らす！
それを合図に戦闘が開始された！

Ｄａｎｃｅ３　其の３－１

禍魂グラントスがゲートキーパーへと肉薄する！
「きますよ！　ゲートキーパー！」
ゲートキーパーがしなやかに“鍵”を構える。
「ルグゥオオオオオッ！」
最初に手を出したのはリーチの長い禍魂の方であった。鋭い爪の生えた右腕を一閃する。それをゲートキーパーは“鍵”で防ごうとした。だが――
ジャギィオォン！
禍魂の凄まじい威力にゲートキーパーは防御できたものの地面を滑って後方へと吹っ飛び、壁に背中から激突してしまう。
飛び散る壁の破片を河上は腕で防いだ。
（くっ！　ゲートキーパーにとって接近戦は不得意分野！　剛力な禍魂との相性は最悪だ……！）
「なんと非力なエーテルか……。そんなんものでは俺が楽しめないぞ」
禍魂がゆっくりと近づいてくる。
（普段なら戦いを先延ばしにして禍魂の相手が得意な奴に任せるところだが……）
河上は一緒に突入した二人のエーテル使いに目をやる。だが二人はそれぞれの戦いをすでに始めていた。
（今はそんなことができる状況じゃない。後回しにはできない。自分で叩くしかない……！）
「エーテル・カード、セット！　“ザマの俊足”！　ゲートキーパー、敵をかく乱して隙をつくのです！」
ゲートキーパーの体を風が包み込む。そしてゲートキーパーが地を蹴って横へと駆けた。速い。いくら肉体派ではないとはいえそのスピードは人間外であることに変わりはない。だが――

「遅い！　それぐらいの速さで俺を惑わせられると思うな！」
次の瞬間にはグラントスがゲートキーパーとの間合いを詰め、左腕を掴んでいた。
メキョリと銀色の左腕が軋む！
（あの禍魂……！　そこらの一般兵とは格が違う……！　Cプラス……いやBマイナス程度の力量はある……！）
「グルゥオオオオ！」
雄叫びをあげるとグラントスの右腕に血管が浮き出て筋肉が膨張する。そしてゲートキーパーの体を上へ振り上げた！
ぐるんっと回転するゲートキーパーの視界。
「弱者よ、潰れるがいい！」
そしてそのままゲートキーパーを地面に叩きつける！
ズドォオオン！
地面にヒビが入り、その一部が盛り上がって隆起する！
もうもうと砂埃が辺りを包み込む。
その砂埃が晴れるとそこには床に体を埋まらせたゲートキーパーの姿。
ゲートキーパーの意識はあるのかないのか、ぴくりとも動かない。
「フン。歯ごたえのないやつだ」
グラントスはそう吐き捨てて、振り返った。
「まだ終わってませんよ」
河上のその言葉の通り、ゲートキーパーはゆっくりと立ち上がっていた。両肩をだらんと落とし、顔を俯かせたその姿で。全身が金属に包まれているせいでダメージを受けているのか、そうでないのかまったく判別がつかない。
「……。いいだろう。バラバラに捻り潰してやる」
ズォォォオオオ……！
グラントスから溢れ出てくるエーテル・エネルギー。そのエネルギーは渦となってグラントスの周りを取り巻く。
そしてグラントスがぐっと前屈みになったその刹那。

ズゴォオン！
足場の地面を吹き飛ばしてグラントスがゲートキーパーへと突進した！
しかしゲートキーパーはだらんとしたまま“鍵”さえ構えない。
ごぎゃーーーん！
成す術もなくグラントスの強烈な体当たりを受け、ボールのように吹っ飛ぶゲートキーパー。
そのまま一直線に倉庫の壁に激突する。そしてゲートキーパーが体勢を整える前にさらにグラントスが右拳を繰り出した。
ぶぅん！
唸りを上げるグラントスの右拳がゲートキーパーの腹にめり込む。
壁を突き破り、倉庫の外に飛び出すゲートキーパーの体。さらにさらにそれを追う禍魂。
河上はすぐに倉庫の外に出てゲートキーパーと禍魂を追う。
夜の闇を見回して河上がゲートキーパーの姿を見つけた時には既にグラントスはゲートキーパーを捕らえていた。ゲートキーパーの頭を両手で挟んで、押し潰そうとしている。
そんな場面だというのに河上はとことこと歩いて近づき、言った。
「一つ訊きたいことがあります」
「ふん。自分のエーテルを助けなくていいのか？」
禍魂がぐっと力を入れた。それだけでゲートキーパーの頭にぴしっとヒビが入る。初めて痛みを感じたかのようにゲートキーパーの指がぴくりと動いた。
「問題ありませんよ。
禍魂のあなたがどうしてエーテル使いと手を組んでいるのですか？」
「人間と禍魂が一緒にいるのがそんなに不思議か？」
「ええ、とても。人間にとって禍魂は天敵とも言える存在。そして禍魂にとって人間は倒すべき……いえ倒さなくてはならない存在。この二つの勢力が一緒にいることが不思議でなくて、何を不思議と

いうのです」
「ほう。貴様……それなりの知識はあるようだな」
「ええ。これでも耳は良い方でしてね」
じっとグラントスは河上の顔を見つめる。そして何か合点がいったように驚いた表情を見せた。
「ふん。そうか。おまえは“あの時”にいたエーテル使いの一人というわけか。片桐悼矢の子守とはご苦労なことだな」
その言葉に河上は黙ったままでいる。
「だが残念だったな。奴らエーテル使いと俺たちが組んでいる理由を俺は知らない。すべてはあいつの指示でな」
「あいつ？　一体、誰ですか。こんな奇特なことを考えた奴は……」
「グハハハ！　何を言う。お前の師を殺した者の名前を忘れたわけではあるまい」
禍魂のその言葉に河上が息を呑み眼を見開いた。
「なっ！？　そんな……まさか――」
河上の驚愕の表情を見てニヤリと口元を笑みに変えるグラントス。
「そうだ。
――グリフォルオだ」

Ｄａｎｃｅ３　其の３－２

どっくん。
大きく心臓が跳ねる。
瞳孔が開いて視界が揺らぐ。
思い返される“あの日”。
何年も前。まだ河上の若かりし日。
彼はまだそれを鮮明に覚えている。
いや忘れた日などなかった。
炎に呑まれた街。
あれはまさに地獄だった。
あちこちで戦闘を繰り返す禍魂とエーテル。
死んでいく仲間たち。
暴れる幼い赤の少女。
そして、炎の中で笑う一体の禍魂。
『ハーッハッハッハ！　流石は“災厄の七神”アルデに気に入られた娘だぜ！　あっという間に火の海に変えちまいやがった！　で、お前ら“アレ”はここにいねぇみたいだが……どこに隠しやがった？』
禍魂の殺意がその場にいた全員を貫く。
あの時、少年は足手まといでしかなかった。
師匠の後ろで震えることしかできなかった。
『チッ！　逃げろっつってんだよ、クソ弟子が！　邪魔なんだよ！　八神！　何やってんだ！　そんなんじゃてめぇのガキに嫌われるぞ！』
『うるさい人だ！　少し油断しただけです！　それにもうあの娘には嫌われてますよ！　レオ、時空間ごと“吶喊”しますよ！』
『応、我が主！』
『片桐！　八神！　タイミングを合わせろ！　グリフォルオの奴が

何かしでかす気だぞ！』

『ならテメェが俺に合わせろ、和重！　あっちもこっちもバカみてぇに殺し合いやがって！　何でこんなことになっちまったんだ、くそが！』

『グリフォルオ……！　なんてエーテル・エネルギーなんだ……！　この街を吹き飛ばすつもりですね……！』

あの日、あの場にいた誰もが命をかけて戦った。

だから少年も震えながら勇気を振り絞った。

『師匠！　俺も……！　俺も戦う！　まだ……やれる……！』

『ガキが粋がってんじゃねぇ！　あんな野郎は俺たちで充分なんだよ！　だろう、アリス！』

『もちろん。いらぬお節介よ、治。サラ、さっさと彼を説得して頂戴。あと貴女の妹も早くどうにかして頂戴』

『分かってるわよ！　オサム！　ここはみんなに任せて！　アンタは早く逃げて！』

『離せ、ルクライル！　俺はまだやれるんだ！』

『無理よ……！　アンタのエーテルだってとっくに限界を超えてるわ……！』

『ここで戦わなきゃ俺が“呪われた”意味が……！　生まれてきた意味がない！　戦わなくちゃいけないんだ……！』

『我侭言うのもいい加減にして！　辛いのは貴方だけじゃないの！　アタシだって戦いたいのよ……！　でもね誰かが生きて繋がないといけないの……！　次の世代へ繋がないといけないの！　それが私たちの役目よ！』

『ならお前が繋げばいい！　俺は残る！』

『ったく、出来の悪い弟子だぜ！　言っても聞かねぇなら強制送還してやらぁ！　つっても現界に返してやる時間はねぇがな！』

あの人が真っ白の紙を取り出す。そして青白く光る人差し指でその紙に機能を刻む。

『エーテル・カード作成&発動！　“馬鹿弟子はどっか安全なとこ

ろへぶっ飛べ”！』

刹那。視界が歪む。

自分のいるその場所が違う場所へと変貌していく。

とその時、不意に優しい声であの人は言った。

『オイ、治――』

――俺たちの“子”を……頼んだぜ。

『師匠ぉおおおお！』

次の瞬間にはもう完全に視界が変わっていた。

少年は街から離れた丘の上に立っていたのだ。そこから見える紅蓮に染まった街並。

少年が街へ戻ろうとしたその次の瞬間！

カッ！

少年の視界が真っ白に染まり、

ズドォオオォオオォオオォオオオオンッ！

街は大きな爆発と共に消し飛んだ。

『うわあああああああああああああああああああ！』

河上は“あの日”のことを思い返し知らず知らず拳を握っていた。

その拳からポタポタと血が地面に滴り落ちる。

（グリフォルオ……！）

その名前を聞いて河上の中では既に話が一つに繋がっていた。

「そういうことですか……！　だから悼矢くんが……！　彼をこちら側に関わらせたのは……！」

「その通り。だが俺はグリフォルオの言うとおりリタ＝ルクライルを襲っただけだ。そしたらどうだ。ルクライルはまるで引き寄せられるように片桐悼矢と出会い、契約をするじゃないか。正直、俺も驚いたさ。これは奴らの運命か……それとも神の悪戯か」

「リタ＝ルクライルと片桐悼矢が契約したのもお前らが……！　何もかも計画通りだったというわけですか……！　ふざけるな……！」

憤りを感じた。
何もかもが禍魂の思い通りになっていた。自分は禍魂の手中で踊っていたにすぎないのだと思い知らせれる。
（いや気づくべきだったんだ！　予定より早く片桐悼矢がエーテル使いとなったことに……！　しかもよりによってリタ＝ルクライルと契約したことに対してもっと深く考察するべきだった……！）
「ヤツは……グリフォルオは何を望んでいるんですか……！　自らの敵を作るような真似をして何をしようというのです……！？」
「言わなかったか。俺はやつの指示で動いているだけだ。理由など知らない。
俺は強者と戦えればそれでいい」
グラントスの紅い眼が爛々と光る。
そんな様子に河上はフフフと笑いを漏らす。
「……久しぶりだな……。“俺”をここまでコケにする奴は……。頭にくるぜ……！」
ズゴォォォォォォォオオオ……！
見る見るうちに河上のエーテル・エネルギーが膨張していく！
「ゲェェトキィィパァアアアアァ！」
河上の咆哮！
刹那！　ゲートキーパーの甲冑の中できらりと眼が光る！

Ｄａｎｃｅ３　其の３－３

ぐぐぐと持ち上がったゲートキーパーの腕がグラントスの両手を掴む。
「どう足掻こうが俺の力に敵いはしない！」
「エーテル・カード、セット！　“デグルスの憑依”！　すべての力を持って禍魂を押し返せ！」
ゲートキーパーの周りを膨大なエーテル・エネルギーが取り巻く！
そして禍魂の腕を無理やり自分の頭から離し始める！
完全な力と力のぶつかり合いにグラントスは楽しそうに笑った。
「こうでなくては面白くない！　かあぁ！」
禍魂が放った膝蹴りがゲートキーパーへと迫る！
「ゲートキーパー！　分解！」
瞬間、ゲートキーパーの体が文字通り分解される！
始めから中身などなかったとでもいうかのように甲冑がバラバラと宙を漂い、グラントスの膝は空を斬る。
「なんだと！？」
まさに暖簾に腕押し。実体がないものに対して攻撃などしても意味がない。
グラントスが戸惑ったその時。再びゲートキーパーが組みあがり、体を横に回転させながら“鍵”を一閃する。
ズバァァッ！
グラントスの腹に横一線の赤い筋が浮かび上がる。
「見ての通り。ゲートキーパーに実体は存在しません。生きる鎧なんですよ。さあ、どう攻めますか？」
河上はくいっと眼鏡の位置を上げる。
「ぐう！　こんな大道芸ごときで俺が怯むかああ！」
グラントスが地面を拳で砕く！
ドゴォオォォォン！

そのつぶてがゲートキーパーの体を打ち、間合いを開けるのを余儀なくされる。
その間にグラントスはすぐ傍の壁を爪で長方形に切り取った。
「そんなもので何をしようというのです」
「フン。これならバラバラになろうが関係ないだろう！」
グラントスのエーテル・エネルギーが長方形の壁を包み込む。エーテル化された壁はコンクリートとは思えない硬度へと変貌してゆく。そしてグラントスが跳んだ。
ぎゅるんっと風を大きく靡かせてエーテル化された板を振りかぶる。
「そんなもの無駄ですよ」
だが河上の言葉を掻き消すようにグラントスは板を振るう。
しかし次の瞬間。
ぴたり。
グラントスの体が止まった。ゲートキーパーを板で殴る直前で禍魂の動きは完全に止まっていた。
（な、なんだ！？　体が動かない……！）
一体、何が起こったのか理解できないグラントス。
「だから無駄だと言ったじゃないですか」
とことこと河上が禍魂の元へ歩いてくる。
「これがゲートキーパーの能力の一つなんですよ。ゲートキーパーは対象に触れることで何でも“封印”することができるんです」
グラントスが目だけで自分の足を見る。そこにはゲートキーパーの切り離された左腕が触れていた。
「あなたの行動を“封印”させてもらいました。あなたが動くことができないのはそのせいです」
（俺の行動を“封印”しただと……！？　“行動”という概念自体に干渉し“封印”したというのか……！？　そんな馬鹿なことが……！）
「しかしこんな“封印”の使い方はただの副産物に過ぎません。

いや、ここが倉庫の外で良かった。ここからのゲートキーパーの能力はあまり他人に見せたくなかったんですよ。もちろん彼らにもね」

彼らというのは悼矢やきづなのことだろう。河上の眼鏡のレンズが月の光を反射している。

（こいつわざと倉庫の外に戦場を移したのか……！）

「ゲートキーパー。“参番”を」

その言葉にゲートキーパーを灰色のエネルギーが包み込む！

そしてゲートキーパーは何もない中空に右腕で持つ“鍵”を突き刺した！

刹那。空間と次元が歪む！

ここではないどこかの空間がそこへと収束され歪みの渦を広げていく！

バチバチバチ！

歪みが雷を発する。と、同時に鍵先から光が宙に走り、大きな扉を象っていく。高さは三メートルほど、幅は二メートルはあるだろうか。

その光が弾けるとそこには真っ黒の頑丈そうな門が出現していた。

それはまるで地獄の門と呼ぶにふさわしいものであった。両の扉には悪鬼や餓鬼が針山で人をいたぶる姿が描かれている。

あまりにも禍々しく装飾された門であった。

その扉を背にして河上はくいっと眼鏡のズレを直す。

「ゲートキーパーは本来、自分で戦うようなエーテルではないんですよ。

なぜならゲートキーパーはその名の通り――」

刹那！　地獄の門が不気味な音をたてて開く！

「――門番でしかないのですから」

オオオオオオォォオオォォオオォォオオォォオ！

門から漆黒の煙が吐き出された。それと一緒に苦しみの表情をした怨霊が溢れだしてくる。

『怨ぉおぉっ！　怨ぉおぉぉおっ！』

不気味な叫び声をあげながら、グラントスの周りを回転する怨霊たち！

しかしグラントスは怨霊のことなど気にもしていなかった。なぜならそれよりも遥かに恐怖を醸し出す存在が煙の奥にいると気づいたからだ。その煙の奥のエーテル・エネルギー量にグラントスは驚愕し、震えることしかできない。

まるで格が違う。

この門の中にいる“何か”は圧倒的な力を持っていた。それは一瞬でこの町を崩壊できてしまうほどのエネルギー。

そのことを河上を理解している。

だから外には出さない。

どっくん。どっくん。

大きな心臓の鼓動が聞こえてくる。

禍魂は見た。

河上の背後。門の中から覗く大きな眼を。

見えているのは片目だけだ。かなりでかい。顔だけで四メートルはあるのだろう。それから予想するに本体はおそらく三〇メートルを軽く超えるだろう。雲にも届くような巨体を思わせる。

じっと紅い眼は自分を見ていた。

紅い瞳に自分の姿が映っている。

禍魂？　エーテル？　いや、違う。これはもっと伝説的な存在。

その昔、まだエーテル使いが陰陽師だとか符術師だとか呼ばれていた時代に何百人何千人と人間の命を奪った悪鬼。

禍魂は確信する。

自分はここで魂ごと喰われるのだ、と。

「さようなら」

にこりと河上が微笑んだ。

瞬間。

ぐちゃ。

門から出てきた二メートルはあるだろう漆黒の太い手が河上の頭

上を通ってあっけなく、そして静かにグラントスを握り潰していた。

Ｄａｎｃｅ３　其の４－１

ジャギィイイン！
ワクナが振るう暗黒の鎌の一撃をレオは身を翻してかわす。鎌はコンクリートの地面に一筋の傷を作った。
そこへレオがワクナに噛みつこうと飛びかかる。その鋭い牙をワクナは鎌の握りの部分でガードする。
ぐぐぐぐ……。
レオとワクナの鍔迫り合いが始まった。
速さには自信のあるエーテル同士、その攻防は人間の肉眼で追いきれるものではなかった。
鍔迫り合いに応じる気はないとばかりにワクナはレオの体ごと鎌を上段に振り上げる。いくら細腕であろうとエーテルにすればレオぐらいの体重など紙切れ同然。
そしてレオを地面に叩きつけようと鎌を振るった。だが――
「！？」
振り下ろした鎌にレオの姿はない。それもそのはず、レオはワクナが鎌を振り上げた時に口を離していたのだった。
今度は上から爪の一撃を放つレオ。それに対してワクナは下段から鎌を上に向かって繰り出す！
バヂンッ！
接触は一瞬。
接触した瞬間に光が弾け、力の奔流が風となって吹き荒れる！
レオとワクナ、互いのエネルギーがぶつかり合ったのだ。
しかし二人にダメージはない。互いに反動を与えただけに過ぎなかった。
レオは天井へと吹き飛ばされ、ワクナはぐっと地面にしゃがんで勢いを殺す。
「レオ！」

普通ならばこれで間合いが開き、仕切りなおしとなる場面だ。だがきづなはそれを許さなかった。

きづなの声に応えるようにレオはスチャリと天井に着地し、天井を蹴った！

ボンッと天井が破裂したような音。

自然落下とレオの脚力が合わさって驚異的なスピードを生み出し、光の線となる！

「まずい！　避けろ、ワクナ！」

「っ……！」

主の声にワクナは素早く反応する。が既に真上には黄金の弾丸が迫っていた。

ズドーーーーーーーン！

レオが地面に激突してもくもくと土煙がたった。

ワクナのボロローブがバラバラに破れて宙を舞う。

だがレオの攻撃をワクナは横に転がってなんとか回避していた。

そのままごろごろと横に回転して起き上がる。そして無表情で『ふぅ』と一息吐いた。

ローブのなくなったワクナ。その姿が光の下で明らかになる。

ワクナは吊り上った猫眼にきゅっと締まった唇の少女であった。内巻きのシャギーがかかった肩まで伸びる赤髪。そして彼女の体はまるで水着のように非常に露出度の高い服装だった。黒いエナメル質が体を包み、光を受けてテラテラと光っている。

「ほう。今のを避けるとはな」

煙が晴れるとできたクレーターの中央にレオが立っていた。

（あのエーテル……速さだけじゃない……。その反応速度、攻撃力……どれをとってもトップクラス。厄介だね……。だけど――）

「ワクナ。“張れ”」

淡川原の言葉にワクナはこくりと頷く。

「イエス、マスター」

瞬間、ワクナの周りに陽炎が立ち昇った。

一見してワクナに変わった様子はない。だが先ほどとは何かが違う。そのことをきづなとレオは理解していた。
「レオ、あまり無闇に攻めるな。何かあるぞ」
「応」
周りをゆらめく陽炎。その様がワクナと相まって奇妙さを跳ね上げていた。
ほとんど表情らしい表情を見せなかったワクナが始めて口元に笑みを浮かべる。
「さあ、来なさい、畜生」
「フン。それならお言葉に甘えさせてもらおう！」
レオが横に跳んだ。それを眼で追うワクナ。だがレオはすぐに壁を蹴って天井へ、そして天井を蹴って地面へ、地面を蹴って逆の壁へ。まるでスーパーボールのように壁という壁を跳ね回った。
速い。壁を蹴るごとにその速さは上がっていく。ついにはワクナでも眼で追えないほどになっていた。
ガッ……ガッ……ガッガッガッガガガガガガガガガガ！
レオが壁を蹴る音がワクナを取り囲んでいる。壁が砕け散った細かな破片がパラパラと辺りで飛び散りまくる。
そして不意にレオの口から放たれた光球がワクナへと滑空する！
ワクナの死角から放たれたそれはワクナに直撃して爆発した！
ズドォオオン！
爆炎がワクナを包み倉庫に熱が広がる！
その熱と爆風をきづなは腕で防いだ。
熱が過ぎ去るとワクナの立っていた場所からはもくもくと煙があがり、地面には黒いすすがこびりついてた。
レオは地面に着地し、煙に向かって吐き捨てた。
「何をしようとしていたかは知らんが、自分の力に過信するとこうなる。一つ覚えたな、エーテルよ」
だが次の瞬間！
煙の中から何かがレオに向かって飛び出した！

「!?」
それは言うまでもなくワクナだ。しかも無傷の姿で鎌を横に振りかぶっている。
慌てて間合いを開けようとするレオ。だが、
斬ッ!
黒き鎌の軌跡が弧を描く!
ザプゥシュウウゥ!
レオの前足を鎌の切っ先が傷つけ血が吹き出る!
その痛みも相まってかレオは着地に失敗して地面を転がった。すぐさまきづながレオに駆け寄る。
「っ! エーテル・カード、オン! “セライオ・リーフ”!」
きづながエーテル・カードを発動させるとだくだくと地面に広がり始めていたレオの血がぴたりと止まる。エーテル・カード“セライオ・リーフ”は傷ついた箇所の止血をして自然治癒力を高める効果のあるカードだ。だが決して傷が癒えるわけではない。傷の痛みが消えるわけでもない。
悪魔で応急処置。
「レオ、やれそうか」
きづながレオのお腹を抱いてゆっくりと立たせた。
「心配するな。これしきなんともない」
だがその言葉とは裏腹に少しカクンと倒れそうになるレオ。俊脚を誇るレオの前足がやられたのは痛い。これでは先ほどのようなスピードは出せないばかりか、思うように己の力も出せない。
「傷より厄介なのはあのエーテルの能力だ。どんな魔法を使ったのか、あれをまともに受けて無傷というのは納得しかねる」
ワクナの体を包む陽炎。それに視線をやるきづな。
「ああ。明らかにあのエーテルの能力が関係しているだろう。どういう能力か炙り出すことはできるか?」
「やってみよう。援護を任せていいか?」
「誰に言っている。私はお前のパートナーだぞ」

「フ。愚問だったな」
レオが前に出た。
すっと静かに鎌を構えるワクナ。
「ゆくぞ！」
レオが動いた。今度は真正面から猛スピードでワクナへと肉薄する！
「……今度は逃がさない……！」
ワクナは接触のタイミングを計るようにぐっと力に手を入れ、じりっと足の幅を広げた。
そして野球選手がボールをバットに当てるように完璧なタイミングで鎌を振るうワクナ。
（殺った……！）
しかしワクナの鎌の間合いに入ったその瞬間。レオは横に跳んでいた。初めから接触する気のなかったレオ、そしてぶつかる気でいたワクナ。
この意識の違いが一瞬の隙を作る！
レオは横に跳んで鎌の斬撃から逃れると、振り切った無防備なワクナに体当たりを敢行する！
「くらうがいい！」
しかし！
ズムゥウウウウ……。
次の瞬間、摩訶不思議な現象が起こった。
レオの体当たりはワクナに当たる寸前で見えない何かによって遮られたのだった。
「な、なんだ！　あれは！」
きづなの顔が驚愕で染まる。それはレオとて一緒だった。
ただ淡川原だけがニヤリと口を歪めた。

Ｄａｎｃｅ３　其の４－２

（これは……壁!?　俺のエネルギー弾はこれに防がれたのか!?
……否!　壁ではない……!　進もうとすればするほど押し出される……!　なんだというのだ、これは……!）
その間にワクナは再度、鎌を横に振りかぶっていた。
轟ッとワクナに向かって風が吸い込まれる。
「させるか!　エーテル・カード、オン!　“ヴィン・イヴィ”!　敵の武器を縛れ!」
じゅぱっ!
ワクナの足元から緑色した線が生えてきて彼女の持っている鎌に絡まる!
「くっ!?」
「またこれか!　ロード、エーテル・カード、“ネフェリアの浄化”!」
すぐさま淡川原が“ヴィン・イヴィ”の戒めからワクナを開放する。だがレオが間合いを開けるにはそれだけの時間があれば充分だった。
（“ヴィン・イヴィ”の効果にはやつの“壁”は無反応……!　エーテル・カードには受け付けないのか……!）
そう判断しきづなはエーテル・カードをホルダーから取り出す。
「さらにエーテル・カード、オン!　“エナジーボルト”!　大いなる雷よ!　敵を貫け!」
きづながカードを上に放り投げる。するとカードから勢いよく電撃が飛び出し、ワクナへと一直線に突き進む!
だが、ワクナに当たる直前で電撃はぐにゃりと方向を変えワクナの横後方の地面へと直撃した。
ジャゴオォオォオォオン!
バリバリとワクナから立ち昇る陽炎が放電する。だがそれだけだ

った。
（……。“ヴィン・イヴィ”は防がれなかったというのに“エナジーボルト”は受け流された？　これは……）
その時、きづなの頭の中で瞬間的に様々な思考がなされた。あーでもない、こーでもないと幾通りもの可能性を弾きだす。
そしてきづなはその可能性の中で一つの煌く道を見つけ出していた。
「何か分かったか？」
「ああ。あのエーテルを包んでいるのはおそらく気流だ」
「気流……？」
「あのワクナというエーテルは“気圧”を操れるのだろう。気圧の変化で自分の周りに気流と空気の層を作り、それを壁にしているんだ。回転している気流のせいで外側は押し出すような壁になるが内側は巻き込むような形になるはず。だから真下から出てきた蔓や蔦には何の影響もなかったのだろう」
「なるほどな。奥に行けば行くほど弾かれる感覚を受けたのもそのためか。それでどう攻略する」
「決まっている。お前の得意技でだ！　エーテル・カード、オン！“ザマの加護”！」
エーテル・カードが光を放つとレオの周りに風が取り巻いた。
「まったく誰に似たのか猪突猛進な娘だ」
ガリガリっと踏み場を作るように前足で地面を掻くレオ。
「だが嫌いではない」
その言葉にきづなはフと笑い眼を閉じる。そしてカッと眼を見開いた。
「いけ、レオ！　お前の全力を見せてやれ！」
「応ッ！」
レオが後方の壁へと跳ぶ。そして壁に着地するとぐっと全身のバネを縮める！
そして抑えきれなくなったかのようにレオが弾け跳ぶ！

ドバァンッ！
壁が粉砕されて煙があがった。
レオの体が黄金に光り、一筋の光の線となる！
砂埃を巻き上げ、空気を切り裂き、光の如き速さで突き進むレオ！
「どんなことをしたって無駄さ！　ロード、エーテル・カード！
“ゼィルの激励”！　ワクナ、返り討ちにしてやれ！」
「イエス……マスター！」
対するワクナの全身を雷光が包む！
バヂバヂバヂバヂバヂ！
漆黒の鎌が雷を侵食し、黒き雷へと変化させる。
ワクナの周囲のチリが浮き上がり、黒雷に触れて砕け散る！
その様子だけでとんでもないエーテル・エネルギーがワクナの周囲に取り巻かれているのが分かる。
「俺に貫けないものはない！　獅子吶喊！」
「私に刈れないものはない！　雷断頭！」
まずレオがワクナの空気の層に突撃した！
ギャゴゴギィィイイィイ！
凄まじいエネルギーのぶつかり合いに辺りの空間が悲鳴をあげる！
レオの気流を割って押し入ろうとする力と、それに反発して押し出そうとする力が激突する！
グググググ……！
レオが徐々に空気の層を割っていく！
そこにワクナが黒き雷を纏った鎌を繰り出す！
ジャギャァァアアァァァン！
それは互いの力の対決などではなかった。
“貫く”という概念と意志。
“刈る”という概念と意志。
この双方のぶつかり合いであった。
「はああっ！　貴方の負けだ、レオ！」
徐々にレオが押され始める。

そしてついに決着がついた。
レオの体が空気の層とワクナの鎌によって石ころのように凄まじい勢いで吹っ飛ばされる！
やはり空気の層が仇となった。レオの威力は空気の層でぶつかることで軽減され、そこに必殺の一撃を繰り出されればこの結果も必然といえる。
（――勝った！）
ワクナと淡川原は勝利を確信した。
だが、その時だった。
きづなの眼はまだワクナを見据えていた。いやワクナを突き抜けて淡川原へと注がれていた。
しかも、諦観の瞳ではない。すでに勝利することを確信している瞳でだ。
その視線にワクナだけでなく淡川原の背中にぞくりと悪寒が走る。
きづなはそれが当たり前であるかのようにゆっくりと言葉を紡いだ。
「エーテル・カード、オン」
きづなの隣に黄金の五紡星が広がる！
その五紡星へと吹っ飛ばされていたレオが飛び込む！
“ジャンピング・バズーカ”！」
刹那！　吹っ飛んでいたレオの体を五紡星が受け止める！　しかもただ受け止めるだけではない。五紡星はまるでゴムのように大きく伸び勢いを吸収していく！
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……！
五紡星の周りに未知のエネルギーが渦巻き始める。
それと同時に五紡星が雷を伴って筒のように金属化いやエーテル化していく。
そして姿を表す長い銃身。それはまるで黄金に光る大砲だった。
「バ、バカな……！」
淡川原が後ろに一歩下がった。

その重厚で圧倒的な存在感を放つ大砲に彼は驚くしかない。
「残念だったな。お前たちより私とレオの方が一枚上手だったようだ」
きづなはフと笑い、黒い綺麗な髪をばさっと掻き揚げた。
「さあ、解き放ってやろう！　私とレオの力を！」
そして二人の声はそうなることが当たり前であるかのようにぴったりと重なる。
『獅子吶喊ッ！！』
刹那！
ズドォオオンッ！
エーテル・エネルギーが爆発した音と共に金色の大砲は受け取ったすべての勢いを返すようにレオの体を前へと押し出した！
黄金の銃身からエーテル・エネルギーを含んだ七色の煙が噴出す！
先ほどよりもその速さを、その威力を、その概念を、その存在感を、そのすべてを増して迫り来る黄金の弾丸。
レオが突き進むと地面のコンクリートがめくれ上がって弾け跳ぶ！
ワクナにはレオが何倍にも大きく見えていた。なんという威圧感だろう。視界いっぱいに広がるその黄金の獅子の姿にワクナは『呑み込まれる』と確信した。
接触したのはほんの一瞬だった。
レオの一撃を受けたワクナはあまりにも呆気ないほど軽々ふっとび、淡川原の横を通り過ぎて角に積まれていたコンテナをボーリングのピンのように弾き飛ばし、それでも勢いが止まらず壁に穴を開けて倉庫の外へと飛び出していった。
空気の壁があろうがなかろうが関係などない。それほどの威力だった。
淡川原は信じられないといった顔でただ呆然と突っ立っていた。
レオが宙でくるりと一回転して地面に着地する。
その隣にきづなはカツッと靴の音を鳴らして並ぶ。
「どうやら私の勝ちのようだな、淡川原」

どさ、と立ってる力をなくしたように淡川原が膝をついた。

Ｄａｎｃｅ３　其の５－１

姿を現した清楚なエーテルの少女に悼矢は息を呑んだ。
黒いハープを持った黒いワンピースに身を包むエーテル、カリエラ。藤島にマスターを殺され、強制的に契約を結ばされた非遇のエーテル。
カリエラは悼矢の視線から逃れるように視線を反らした。
カリエラは好んで悼矢たちと戦っているわけではない。契約主であるエーテル使いの言葉は契約したエーテルにとって絶対的強制力を持つ。
だから彼女に敵意がなくても彼女は戦うしかない。
カリエラはハープに指をそえた。
「ま、待ってくれ！　俺はあんたと戦う気は――」
慌てて悼矢は止めに入る。だが――
トゥン！
不可視の攻撃が悼矢へと迫る！
だがリタが悼矢の前に割って入り、その波動を愛剣で弾く！
ギャウンッ！
「なにボケっとしてるのよ！　藤島を倒さない限りあの子は救われないのよ！？」
リタのその言葉に悼矢はぐっとエーテル・カードを握る。そしてカリエラの向こうでニヤニヤと笑っている藤島に眼をやった。
「そうだったな。すまん、リタ。エーテル二体相手だ。気をつけてやれよ！」
「ええ、そうこなくっちゃ！」
リタが地面を蹴った。
（狙うは藤島のみ！）
それに反応して藤島の前にカリエラが立ち塞がる。
「腐っていてもマスターはマスター……！　主人は守るってわけね

！」

カリエラは素早く弦を弾いていく。すると空間が揺らめく！

リタはその揺らめきを感じて進路を変更し横に跳ぶ。

ズガンッ！

地面が音によって削り取られた。

カリエラはリタを追うように体の向きを変えてハープを奏でる。

（眼に見えないってことに関しては厄介だけど……！）

リタはアルデヴァインを振るい、迫りくる音の弾丸をすべて弾きとばす。

（威力はどうってことない！）

だっ！

リタは無謀とも思えるような接近をカリエラへ敢行した。

「！？」

リタが距離を詰めてきたことに驚くカリエラ。

カリエラはこと近接戦闘は苦手な部類に入る。距離をとった状態で中距離攻撃を放ち続け、じわじわと相手の体力を奪っていくというのが基本的な戦闘方法だった。だからこそリタは接近戦を持ちかけようとしているのだ。わざわざ相手の得意な距離感で戦う必要などない。

ジャガキィン！

カリエラがハープでリタの斬撃を防いだ。

カリエラとしてはリタの斬撃を受ける前に後方に退くか、横に移動するかして間合いを空けたいところだったろう。だが、今は背後にマスターがいる。そのせいで場を動くことができなかったのだ。

「ハッハァ！　今だ、ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬ！」

藤島から暗黒の力が波となってリタとカリエラに放たれる！

『！？』

慌てて二人はその場から跳びのいた。

ズゴオォオン！

暗黒の力は地面にぶつかって土埃を巻き上げた。

リタが悼矢の隣にすたっと着地する。
「藤島の野郎。カリエラがいたってのに関係なく攻撃しやがった…」
「最っ低ね、アイツ。カリエラのことを壁ぐらいにしか思ってないのよ」
悼矢がカリエラへ視線を向けると彼女は唇を噛みしめて眼を伏せた。どうやらいいように使われて悔しさを隠しきれないようだ。
「おうおう。随分なことをぬかしてくれるじゃねーかァ。前にも言わなかったか？　俺のエーテルをどう扱おうが俺の勝手だ、って」
「っざけんな、てめぇ！　エーテルは消耗品じゃねーんだぞ！　人間と同じで生きてるんだよ！」
「それはお前の考え方だろォ」
「違うね。まともな人間の考え方だ」
藤島はやれやれと首を振る。
「どこまでいっても平行線だよなァ。お前は俺を理解できねぇだろうし俺はお前を理解できねぇよ」
「結局どう足掻いたところでお前と俺たちは戦わなくちゃならないってことか」
「ハハハ！　そのとおりだ！　さあ続きを始めようぜェ！」
それを合図にカリエラが眼を閉じて弦を弾く。
だがその音は何かおかしい。リタや悼矢に対して波動が打ち出されていないではないか。代わりにカリエラを包むエーテル・エネルギーは膨れ上がっていく！
ズォオォオオオオッ……！
めらめらと燃え盛る炎のように揺らめくカリエラのエネルギー。
「な、なによ……何が起こるの？」
カリエラはすっと眼を開けると静かに呟いた。
「戦闘交響曲……！」
瞬間、カリエラの持つハープが光り輝きぐにゃぐにゃとその形を変えていく！

そしてついにハープは美麗な槍へと変形した。矛先の根元からはハープの弦だったものだろうか、銀色の糸が流れており、カリエラが槍をぶんっと横に薙ぐとふぁさっと銀糸が広がった。

これがカリエラの奥の手であった。距離を開けて戦うことが困難な敵に対しての彼女の対応策。距離を開けて戦うのが難しいならこちらも近接戦闘タイプになればいい、そんな考えの元に編み出されたのである。

「……いきます！」

カリエラは黒槍をすっと下段に構え、そして床を蹴る！

相手の武器が変形したことに戸惑っていたリタだが不敵な笑みを浮かべるとすぐに愛剣を構えた。

「残念だったわね……！　斬るとか突くとか、こういう近距離戦に強いわよ、私は！」

そして自らもカリエラへと接近する！

その時だった。まだ互いの間合いにも入ってないにも関わらずカリエラが高速で黒槍を突きだす！

「ふっ！」

刹那ッ！

ィィィイイィィィィン！

甲高い音が鳴り響き、空間が“貫かれた”！

なんと黒槍の矛先から一点に収束された波動が音速で放たれたのだ。

「！？」

リタが直感的に回避行動に入る。だがいくらリタとて間に合わない。

ズギャィィィンッ！

不可視の突きはリタの左肩、その甲冑を剥がし飛ばしていた。

なんという攻撃力。いや冷静になって考えればこの威力も頷ける。

元はクレーターを作るほどだったのだ。それが一点集中の突きだす攻撃へと変われればその破壊力は計り知れない。

「“絶対音貫”……これがこの状態の私の能力です」
正直なところカリエラの運動能力は並以下。それでもこれほどまでの力量が出せるのはカリエラがハープに対して想像を絶する想い入れを持っているからだった。その想いと信頼が彼女の持つ武器をここまで進化させたのである。
「あぐっ……！」
思わず右手で左肩を押さえ、距離を離そうとするリタ。肩口から血が流れ、押さえる左手を紅く染めている。しかし――
「逃がさない……！」
すかさずカリエラが槍を振るう。
ィィイイイィィンッ！
その突撃をリタはアルデヴァインを盾にすることで防ぐ。だがあまりに強烈な威力にアルデヴァインが吹き飛ばされてしまう。左肩を右手で押さえていたため、片手で持っていたというのがまずかった。
アルデヴァインはぎゅるんぎゅるんと宙で回転してジャギッと離れた床に突き刺さった。
「とどめ……！」
カリエラは両手で槍を回転させながらリタへと跳びかかる！
（……まずい！　あれじゃリタは次の攻撃を防ぐことができない……！）
そう思ったのと同時に悼矢の足は勝手に前へと飛び出していた。
カリエラの槍が回転する度にそのエーテル・エネルギーが膨れ上がり黒槍が並々ならぬ輝きを放つ！
「……やめろ……！」
「これで終わりです……！　“我が音は心を貫く”！」
ちゃきんっと槍を持ち、ぐっと体を反って捻り全体のバネを使ってリタへ必殺の一撃を放つ！
「やめろおおおお！」
だが叫びとともにリタの前に悼矢が両手を広げて立ち塞がる。

Ｄａｎｃｅ３　其の５－２

『！？』

驚愕するリタとカリエラ。

（あ、あの人！？　ど、どうして！？　だめ、避けて！　攻撃を止めないと……！）

だが振り抜くつもりで放った必殺の突きを途中で止められるはずがない。

ィイイイィィィィイィンン！

ズドォオォオォオォオン！

突撃が地面を貫きもくもくと土煙が舞い上がる！

血が飛び。

悼矢の体が背中から地面に倒れて行く。

「！？」

だがそこでリタは気がついた。

カリエラの突きは悼矢の頬を少し切っただけであった。

悼矢が立ち塞がった瞬間、カリエラは矛先を少しでも逸らすことで直撃するのを避けたのだった。

ほっとカリエラの胸に溜まった緊張が抜ける。

その瞬間。

どごぉっ！

「っぐ！」

カリエラのわき腹にリタの蹴りがめり込んでいた。

空中で蹴りを受けたカリエラはその体を地面へと叩きつけられてごろごろと転がり壁に激突する。

カリエラが転がった後を飛行機雲のように一筋の土煙が走っていた。

リタはすたりと着地してカリエラの様子を確認する。

カリエラは眼を閉じてがくりと倒れている。どうやら気を失って

いるようだった。
「リタ……容赦ないな……。仮にもカリエラは助けてくれたんだぞ」
悼矢は地面に開いた五センチほどの穴を指差した。
その穴はどこまで深く続いているのか、まるでくりぬいたかのように綺麗に穿たれていた。しかもその穴のふちは真っ赤になっており、しゅ～っと音をだして白い煙を上げているではないか。もしカリエラが矛先を逸らさなければ、悼矢の頭を貫き、同時にリタの心の臓を簡単に貫いていたことだろう。
「分かってるわよ。でも藤島の命令はカリエラにとって絶対なんだから、こうでもしないと止められないじゃないの。それにちゃんと手加減はしといたわよ」
「でもなぁ……」
困ったようにぽりぽりと頭を掻く悼矢。
「でもなぁ……じゃないわよっ！」
ばしんっと頭をはたかれる悼矢。
「また勝手に戦闘に関わってくるし！　あんたはどうしてそうすぐに飛び出してくるのよ！　あんたの脳は危険を察知する部分が麻痺でもしてるの!?」
ひどい言いようだ。悼矢の行動はリタを心配してのことだったというのに。だがそのことをリタが理解してないわけじゃない。いや理解しているからこそイラつくのだった。
「あんたはあくまでサポート役！　その手に持ってるエーテル・カードは何のためにあるのよ!?　わざわざ自分の体を張ることなんかないでしょーが！」
悼矢は忘れていたかのように手のエーテル・カードを見た。
（つーか、忘れてた。言ったら殴られそうだから黙っとこ……）
「くっくっくっく……くははははは……こりゃおかしいな……傑作だ！　くははははは！　はぁーっはっはっはっはっは！」
不意に藤島が俯いて狂ったように笑いだした。
肩を揺らし、右手で顔を覆い、高らかに笑っている。

その様子を呆然と見ることしかできない悼矢とリタ。
だがふとその笑い声が止まった。
「……みな殺しだ……ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬ……」
そう言って、あげた藤島の顔は今までにないほど鋭い目つきになっていた。
『ギャハハハ！　いいぜ、マサキ！　“暗黒誘霊歌”！』
藤島の意志に従ってＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬから赤黒い触手が何本も伸び藤島の体に突き刺さる！
「ぐわあああああああああああああ！」
瞬間、藤島がその痛みからか叫び声をあげた。
それはあまりにも生々しく痛々しい歌声。
あまりに不気味な様に悼矢とリタは身構える。
幾本もの触手と繋がると、藤島は顔をあげた。
「ハハハいテぇ……ミな殺シだ……！」
ピリピリピリ……！
肌を刺すような殺気。
殺したい、壊したいという本能的な欲求。
あまりにも濃いエーテル・エネルギーに悼矢は吐き気と目眩を催すほどだった。
くらりとなった悼矢の体をリタが支える。
「トウヤ……！　気をしっかり持ちなさい！　でないと呑まれるわよ！」
「あ、ああ……！」
悼矢は肉眼で確認できるほど真っ黒のオーラに包まれた藤島を見据える。
（あれが藤島の本気……！　なんてエーテル・エネルギー量なんだ……！　どれだけＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬにエーテル・エネルギーを注いだらああなるんだよ！）
不意に藤島がエーテル・カードを三枚取り出す。そして三枚とも宙に放り投げる。

「エーテル・カード、オープン。“プロテクトガード”“ウェリスタンの加護”“ナハルマガダの黙示録”」
カードが光を放ち、その光が藤島を取り巻く！
ズォオオオォオオォオ……！
藤島を包む闇がさらに濃く広くなった。それは信じられないような現象だった。
エーテル・カードが藤島を強化しているのだ。
「どうなってるんだ!?　エーテル・カードは人間には作用されないはずだろッ！」
悼矢は思わず一歩退く。
逃げたい。
逃げ出してしまいたかった。
「落ち着いて、トウヤ！　おそらくあれがＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬの能力なのよ……！」
「クハハハハ……！　ソのトオりだ！　ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬの能力ハ“寄生”！　生物に“寄生”すルコとでＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬガ持つ能力！　体質！　そノ総てヲ与えル！」
それはつまり藤島自身がエーテルと同等の力量を持つということだった。
ズズズ……。
闇と影を広がらせて藤島が悼矢とリタに近づいてくる。その藤島の影はすでに人の形をしていなかった。藤島の姿以上の大きさをともなって複数の触手をうねうねと地面に伸ばしている。
闇が――近づいてくる。
「トウヤ！」
「あ、ああ！　エーテル・カード発動！“ウェリスタンの加護”！　リタのエーテルエネルギーの総量を増加しろ！」
カッとカード煌き、リタの周りを光が包む！
そしてすっと眼を閉じるリタ。
瞬間、リタの周りを陽炎が立ち昇り、赤い灯火がメラメラとリタ

の周囲で燃え上がる。その揺らめきと同じようにリタの金髪が広がり、ゆらゆらと漂っていた。

それは最初出会った時のようなか弱い光ではない。まるで暗闇の中での炎。悼矢にとってこれほど頼りがいのある光はなかった。

地面に突き刺さっていたアルデヴァインが光の粒子に分解されたと思うと、リタの手元で再び構成されて形を成す。

「さァ、お前ラの歌声を聞かセろォ！」

リタがすっと眼を開き、愛剣を構えた。

「……藤島！　あんたを倒す！」

ズダンッ！

リタが跳ぶ！　いや疾ぶ！

それは悼矢が今まで見た中で最速。

砂埃を巻き上げて滑空してくるリタを見て藤島の顔がにやりと笑みになる。

「はあああああああああ！　アルデヴァイン！」

赤く染まったリタの愛剣アルデヴァインが主の呼びかけに応えるように光を放つ！

ずおおおっとその存在感を増した大剣をリタがめい一杯振りかぶった！

カッとアルデヴァインが赤い閃光を放つ！

「敵を切り裂け！　アルデ・ブレイバアアァァアッ！！」

「ヌるイわあアア！」

ジュワアアアアァァァンンッ！

藤島がギターを掻き鳴らすと一点に黒のエネルギーが収束する！

そして赤と黒が衝突した！

ズジャギィィイィィアアァァァンッ！

閃光と火花、暴風を撒き散らし、地を揺るがす！

それでも二人の攻防は止まっていない！

（藤島、なんて野郎だ……！　リタの必殺の一撃を軽々と受けやがった！）

藤島がさらにギターを奏でる！
黒いエネルギーの塊が蠢いてまだ中空のリタへ迫る！
ズゴォオォオォオン！
それをリタはアルデヴァインを横に薙いでガードする。しかし力負けしてリタの体が天井へと吹っ飛んでいく！
「クハハハ！　どウやら力ハ俺のホうが上ラしいナ！」
だが素直に吹っ飛ばされるリタではない。リタは吹っ飛んでいる途中でくるりと体を回転させ、その勢いのままアルデヴァインを構える！
（あいつ、何する気だ！？　あの距離からじゃ攻撃は届かないぞ……！）
だがそんな悼矢の予想など知ったこっちゃないってな風にリタは愛剣にエーテル・エネルギーを注ぐ！
「アルデ――！」
アルデヴァインが赤い陽炎に包まれる！
「――スラッシャァァァァッ！」
瞬間、大剣を振るったのと同時にアルデヴァインから赤い斬撃の波動が放たれた！
「！？」
その鋭い三日月型の波動は空間を切り裂き藤島へと滑空する！
予想していなかった中距離攻撃に藤島は反応できていない。かろうじてできたのは少しでも防御の足しにと黒い塊を自分の身に纏わせることだけだった。
ズバアアァァァッ！
藤島の左肩口から右のわき腹まで一筋の斬り傷ができる！
「アギゃグっ！」
リタはといえば天井に背中からドガーンと派手にぶつかって、瓦礫と一緒にどさっと地面に落ちた。
「っく……！」
「大丈夫か、リタ……！」

リタがふらつく足で立とうとするので悼矢は腕を掴んで支えてやる。
「ざ、ざまぁーみろよ。こっちが中距離攻撃技を持ってないと思ったら大間違いなんだから！」
「キ、キさマぁ……！　ぶっ殺ス……！　ブっ殺ス、ブッ殺す、ブッ殺ス、ブッコロス……！」
そう何度も危険な発言をして胸を掻きむしる。服がボロボロと破れ、皮膚に爪が食い込んで剥がれる。
「グアアアアァァァァッ！」
それはまさに獣の咆哮だった。
じゅばっ！
瞬間、藤島の体を突き破って何本もの触手が飛び出した。よく見れば藤島の体を血管のようにＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬの触手が浮かび上がっていた。
「おいおい……！　あいつ本当に人間かよ……！」
あまりにも異様な体に成り果てた藤島。その様は人間というよりもすでに化け物であった。
そしてその触手がびゅるんっと伸びてリタと悼矢に迫る！

Ｄａｎｃｅ３　其の５－３

「トウヤ、離れてっ！」
リタが悼矢を突き飛ばした。迫りくる触手をリタがアルデヴァインを振るって払い除ける！
ズギャンッ！
触手とアルデヴァインが接触するとエネルギーの奔流とともに光が弾けた。だがあまりにも触手の数が多い。アルデヴァインを再び振るう前にリタのお腹に触手たちがぶつかった！
ずどんっ！
あえなく吹っ飛ぶリタ。しかも触手はさらにその吹っ飛ぶリタを追いかけていく。
（まずい……！　連戦に加えて大技を二回も使ったんだ……！　もうリタにほとんど体力は残って無い……！）
そして壁に背中を打ちつけたリタの元へ何本もの触手が襲いかかる！
「エーテル・カード発動！　“カダックの盾”！　リタを触手から守れ！」
リタの前に土の壁が地面から伸びる！
だが――
ズドゴォォオォォン！
触手は一瞬でその壁を粉砕してリタに続々とぶつかっていった！
壁が崩れてもうもうと土埃が巻きあがる。
「くそっ、リタ……！」
触手はリタの体をうねうねと巻きついていく。その腕を脚を腰を逃げられないように絡みついていく。そして壁から剥がして空中へ吊り上げた。
リタは気を失っているのだろうかだらんと首を垂れている。
「コロス、コロス、コロスコロスコロス……！」

藤島がリタに右手を向けた。するとそれに倣うように新たな触手が藤島の右肩から生えてくる。しかもその先が槍の矛先のように鋭くなっているではないか。

（あんなもので貫かれたら……！）

「やめろ、藤島ぁあああッ！」

悼矢の叫びなどどこ吹く風。

鋭い触手はリタへと一直線に突き進む！

刹那ッ！

柔らかい声が響いた。

「エーテル・カード、セット！　“ウィンド・カッター”！」

斬ッ！

リタを縛っていた触手が真空の刃によって切断される！

「ヌゥ！？」

さらに凛とした声が響く。

「エーテル・カード、オン！　“ハイ・ドライブ”！」

自然落下の法則に従って落ちるリタのドレスの首元をレオが口でくわえてキャッチする。

「河上さん！　八神！」

思わず悼矢はその頼りになる二人の名を呼ぶ。

「やあ、苦労しているみたいだね。力を貸しにきたよ」と微笑む河上。

「エーテル使いならばもっとスマートに戦え。底が知れるぞ」

悼矢の視線を受け『ふん』と顔を反らすきづな。

そこへすたりとレオが着地した。すぐさま悼矢がリタを抱きかかえる。もう戦闘服はボロボロになっていてリタの頭からは血が流れていた。

「リタ！　おい、リタ！」

リタはぼーっと眼を開けた。

「あー、体中痛い……。あいつ強すぎるわ……」

「悼矢くんはリタさんと安全なところへ。後は私たちに任せて下さ

い」
「は、はい！」
　悼矢はリタを持ち上げようとした、だがそれをリタは振り払う。
「冗談じゃないわよ……！　ここまでやられて引き下がれるわけないじゃない……！」
「な、何言ってるんだ、リタ！　もう充分だって……ほらもうふらついてるじゃねーか！」
　悼矢の肩を支えにして立ち上がったリタの足取りは酔っ払ったサラリーマンのように危ういものだった。
「何言ってるんだ、ってのはこっちの台詞よ！　あんた、悔しくないの！？」
「悔しいに決まってるだろ！　だけど今の俺たちがいても足手まといになるだけだ！　この状態で藤島の相手なんかできねぇよ！」
「できるかできないかじゃないでしょ！　やるかやらないかよ！　確かにここに私たちがいたって二人の力になれないかもしれないわ！　でもそれは可能性の中だけの話でしょう！　もしかしたら何かまだ役に立てるかもしれないじゃない！　それなのにここで逃げたら絶対に二人の力にはなれないわ！　それならここに残ってちょっとでも力になれるよう努力したらどうなの！」
　呆気に取られる悼矢。
　だがすぐにふっと笑う。
「な、なに笑ってんのよ！　私は真剣に――」
「いや、俺たちの相性って最高なんじゃないかと思ってな」
「は、はあっ！？　あ、あんた、ここ、こんな時に何言ってるのよ！」とリンゴのように顔を真っ赤にするリタ。
「お前が凹んだら俺がお前を奮い立たせて、俺が凹んだらお前が俺を奮い立たせる。これって最高のタッグだろ。おかげで眼が覚めた」
　悼矢は河上ときづなに眼をやる。
「ふふふ。どうやら私の眼は節穴だったみたいですね」

嬉しそうに笑って眼鏡の位置を戻す河上。
「フン。勝手にしろ。お前がいようがいまいが奴を倒すのは私だからな」
腕を組みそっぽを向いたままのきづな。
「決まったな……。やるぞ、リタ！」
「そうこなくっちゃ！」
リタが一歩前に出てアルデヴァインを構える。
それに倣ってレオが、ゲートキーパーがリタの隣に並ぶ。
そして三人のエーテル使いはその眼に敵を見据えて叫んだ。
『最終決戦だ！』

Ｄａｎｃｅ３　其の６－１

「キサマラッ！　ドレダケ俺ノ邪魔ヲスレバ気ガ済ムンダッ！」
ぎろり、とこちらを睨んだ藤島の眼は真っ赤になっていた。
「ちょっと眼を離した隙にひどい姿になりましたね、藤島」
「哀れだな。装備型エーテルを持つ者の成れの果てか」
「ダマレ、ダマレ、ダマレエエエェ！」
藤島の体からじゅぱっと触手が四方八方に広がる。
そして三人のエーテル目掛けて雨のように降り注いだ。
しかしそれに反応して三人のエーテルたちはそれぞれの方向に散らばる。
くるんっ！
だがそれを追って触手は自由自在に方向を変える！
『！？』
触手はどこまでも伸びて最後には三人を捕まえるだろう。ならばその前に本体を叩けばいい。そう判断し、それぞれが三方向から藤島へと接近する！
「カンガエガアマインダヨォオオッ！」
藤島がギターを掻き鳴らした。
ジョワアアァァンンッ！
藤島を覆う黒い闇のエネルギーが接近してきた三人を迎え撃つ。
カッ！
倉庫内が真っ白に染まる！
火を、風を、雷を、自然界のあらゆるエネルギーを逆らせて黒い塊とぶつかり合う。
しかし――！
追いついてきた触手が背後から三人を襲う！
ゲートキーパーは自分の体をバラバラにすることでそれをやり過ごした。

レオはその自慢のスピードで横へと移動して回避する。
リタはバック転で触手をかわし、お返しにとばかりに触手を斬りおとす。
「今です！　ゲートキーパー！」
その時、河上が指示を送った。
それに応えゲートキーパーが瞬時に組みあがる。組みあがった銀色のリビングメイル、その手は触手を掴んでいた。
ゲートキーパーから灰色のエーテル・エネルギーが放出された！
瞬間、触手の動きがピタリと止まる。“封印”の能力が発動されたのだ。
「リタ殿！」
「分かってるわ！」
その好機を逃すリタとレオではない。
三人のエーテルはまるで組むのが初めてではないかのように連携が取れていた。
そして好機を逃すまいとしているのは悼矢ときづなもだった。
「エーテル・カードを……って“ウェリスタンの加護”はもう使ってるし、クソッ！」
悼矢の手元に他の強化系エーテル・カードはない。
そこへすっとエーテル・カードを持った手が伸びてきた。
きづなだった。
「使え。チャンスを逃されても困る」
悼矢はそれを受け取ってきづなを見た。
「八神、お前……実は優しいよな」
「だ、黙れ！　さっさと使え！」
顔を紅潮させながらきづなは自分のエーテル・カードを取り出す。
「エーテル・カード、オン！　“ハイトップ・ドライブ”！」
「エーテル・カード発動！　“ジェネタクトの加護”！」
「はあああああああああっ！」
リタがアルデヴァインにエーテル・エネルギーを注ぎ、藤島へと

跳んだ！
　レオが背後の壁に着地し、その身を縮め、弾かれたように藤島へと突撃する！
「アルデ・ブレイバアアアァァッ！」
「獅子吶喊ッ！」
　二人の最高の技でもって藤島の黒いエネルギーとぶつかり合う！
　バヂバヂバヂバヂバヂバヂバヂッ！
　黒いエネルギーが放電する。
「グウッ！？」
　初めて藤島の顔に焦りが生じる。
「いける！　いけえええええ、リタアァァ！」
　だが――
「コンナモノデ……！　オレヲトメラレルモノカアァァァッ！」
　バチンッ！
「バカな！　ゲートキーパーの“封印”を無理やりこじ開けた！？」
（俺より奴の意志の方が強いとでも言うのか……！）
　ゲートキーパーはその反動で吹っ飛ぶ！
　瞬間、触手が再び動き始めた！
「エーテル・カード、オープン！　“ナハルマガタの叱咤”！」
　さらに藤島がエーテル・カードを使う！
　限界以上に引き出された藤島のエーテル・エネルギーがリタとレオを弾き返した！
　ズドーンッと音をたてて壁にその身を叩きつけられる三人のエーテル。
　すぐに触手が伸びてきて痛みに苦しむ間もなく三人は慌ててその場を離れる！
　また最初の触手に追いかけまわされる状態に戻ってしまった。
「キツいな」
　そんな様子を見ながらぽつりときづなが呟く。
「そうですね。藤島の力がこれほどまでとは」

河上の頬には汗が流れていた。
「何か策はないんですか！？」
悼矢のその言葉に河上は首を横に振る。
「せめてあともう一人、エーテルがいれば……」
「あと……一人……」
悼矢はそれを噛み締めるように呟き、自分の右拳を見た。
そうだ。悼矢にはエーテル並の身体能力がある。
リタとレオの攻撃は藤島を押していた。あと一歩。あの黒のエネルギーを破るまであと一歩なのだ。悼矢が戦闘に加わることでもしかしたらこの状況を打開できるかも知れない。だが――
（できるのか……？　俺に……）
その時だった。
「トウヤ！」
リタが叫んだ。
呼ばれてリタの方を見るとリタはこくりと頷く。
彼女は眼でこう言っていた。
『叩きのめすのよ』
それを受けて悼矢の眼に光が灯る。
「河上さん！　俺に考えがあります！」
「考えだって？　それは……？」
「説明している暇はありません！　いいから俺の言うとおりにしてください！」
悼矢の真剣な表情に頷く河上。
「は、はい。分かりました……！　悼矢くんの策に賭けましょう！」
「八神っ！」
「勝算はあるんだろうな」
「ああ、もちろんだ！　藤島に一泡吹かせてやる！」
数秒黙ったまま悼矢を見つめるきづな。そして不意にくるっと背中を見せる。
「ふん、いいだろう。私は何をすればいい」

「河上さん、もう一度あの触手を止めることはできますか？」
「ええ、大丈夫です。だけどそれほど長い時間は無理ですよ。長くて二〇秒」
河上はゲートキーパーの様子を見て答える。
「充分です。八神はもう一度全力で藤島に攻撃してくれ」
「ああ、分かった。それでお前のエーテルは？」
「持てるすべての力で藤島を攻撃する」
「どんな策かと思えば……さっきと同じじゃないか」
きづなはため息とともに悼矢を睨んだ。
「いいからやるんだよ！　河上さん、タイミング良くお願いします！」
「はい！　任せて下さい！」
「チッ！　やるぞ、レオ！　すべての力を使って奴を“吶喊”する！」
「応！」
きづながエーテル・カードを取り出し宙に放る！
そしてレオに左手を向けた！
「エーテル・カード、オン！　“オーヴァードライブ”！」
レオが壁に向かって跳躍し着地する！
ぐっと体全体のバネを縮ませるように身を小さくする！　同時に体内に眠るエーテル・エネルギーを呼び起こしレオの体が黄金に包まれる！
「リタ！　全力でやってやれ！」
「オーケー！　アルデヴァイィィイン！」
リタがその場で横に回転し始めた！
アルデヴァインの切っ先が床に擦れ『ヂヂヂヂッ！』と火花を散らしたその瞬間！
轟ぉぉおおおッ！
リタの大剣が発火し、大きな音をたてて燃え上がる！
切っ先が地面に真っ赤な円を描いて、その中に奇怪な模様が浮か

び上がる！

それは紛うことなきリタの右肩に刻まれた紋章だった。

思えばあの紋章が反応したのがきっかけだったのかもしれない。

悼矢は眼を閉じてふと笑う。

（この数日だけで俺の周りの環境は劇的に変化したよなぁ）

悼矢は手を藤島に向け、ゆっくりと拳を握る。

（知らなかった人物と知り合い、知らなかった世界を知り、知らなかった事実を知った）

それに反応するかのように体の中から未知のエネルギーがじわじわと滲み出していく。

（まだ俺が知らないことはいっぱいある。親父のことも禍魂のこともイデアのことも！　だけど今はどうだっていい！

今はただ――！）

体が分かっていた。

まるで今まで何度もそうしてきたかのようにスムーズにエネルギーが体の中を満たしていく。

「今はただあいつをぶん殴ることができればそれでいい！！」

刹那ッ！

ズゴォォオオォォオオオオオオ……！

悼矢の体から白いエーテル・エネルギーが溢れ出す！

『！？』

きづなと河上が悼矢の変化に気づいたのは同時だった。

急に背後に現れた膨大なエーテル・エネルギーの存在に振り返る。

そして二人が驚愕のあまりに目を見開く。

彼らの眼には見えていた。

悼矢の周りに立ち昇る変質したエーテル・エネルギーが。そう、それはただのエーテル・エネルギーではない。人間は純粋なエーテル・エネルギーを発することしかできない。それに対しエーテルたちは自分の体でエーテル・エネルギーを変質させて発している。悼矢が今、発しているエーテル・エネルギーはまさにエーテルたちと

同じ、変質させたエーテル・エネルギーだった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

内に秘めたものを爆発させるように吼える悼矢。

Ｄａｎｃｅ３　其の６－２

（これは……！？　そんなバカな……！　人が自らのエーテル・エネルギーを力量に変換しているというのか……！？　まさか……これが……これこそが――！！）

河上は悼矢から発せられる荒れ狂うような、それでいて心を落ち着かせるような優しい風に胸が熱くなるのを止められない。

驚いたのはきづなとて同じであった。

ぞわりと鳥肌がたった。

（人間がエーテル・エネルギーを力量に変換しているだと……！？　この男……何か違うと感じたが……！　まさかこんな……！）

悼矢から流れてくる緩やかな風が髪をそよそよと揺らす。

人間にはないはずの機能。

エーテルの能力によるものでも装備型エーテルを装着しているわけでもない。

彼は自らの体内でエーテル・エネルギーを変質させている。

不可能なはずのことをやっている人間にきづなの視線は釘づけになっていた。

（一体、何なんだこの男はッ……！）

「こぉおぉおぉ……！」

ゆっくりと息を吐く。

悼矢の口からエーテル・エネルギーを含んだ陽炎が出る。

そして藤島も悼矢の変化に気づいた。

「バ、バカナ……！　ナゼオマエガエーテルエネルギーヲハッシテイル……！」

その問いに悼矢は眼を開けてニヤリと不敵に口元を笑みに変えた。

「驚くのも無理はねぇよなぁ。普通の人間にゃこんなことはできねぇもんな」

「クッ……！　ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬゥウゥッ！」

ギュィオオオオン！
ギターの音が鳴り響き、暗黒の球体が藤島の前に構成されていく！
「イケエエエエッ！」
そして藤島の指示に従い、漆黒の弾丸が発射された！
三人のエーテル使いに迫る弾丸！
「トウヤ……！」
「ぬっ……！」
「……！」
主の危険に三人のエーテルが焦りを顕わにする。
だが――！
悼矢が前に出てぐっと足を踏み込む！
そして、
「うおぉおぉおらあああぁっ！」
ドバチンッ！
下からすくい上げるように繰り出した拳でそのエネルギー弾を弾き飛ばす！
エネルギー弾は野球のボールのように屋根へと滑空し、ぶつかると大爆発を起こした！
ズドォオォォン！
ガラガラガシャーーーーン！
屋根が崩れ、離れたところで瓦礫が地面に降り注ぐ。
それを見てその場の全ての人間が、エーテルが固まっていた。
「ト、トウヤ……あんた……」
それはもちろんリタとて同じ事だった。まさか自分の主がここまでエーテル・エネルギーを発せるとは夢にも思っていなかったのだ。
きっかけはおそらく自分と契約したことだろう。なぜ彼がエーテル・エネルギーを扱えているのかは分からない。しかし、片桐悼矢という人間はきっと最初からこうだったのだ。人間でありながらエーテル・エネルギーを発する存在。それが自分と契約したことでスイッチがＯＮに切り替ったのだ。

「バカナバカナバカナアアァ！　コンナコトガ！　コンナコトガアルハズガナイッ！　アイツハニンゲンダロウ！！」
藤島が発狂せんばかりに悼矢を睨みつける。
（凄い……！　これならいける！）
「ゲートキーパー！　今です！　奴の動きを止めるんだ！」
河上がゲートキーパーに指示を出す！
ゲートキーパーは待ってましたとばかりに反転して、自ら触手の中に飛び込む！
刹那！　触手の動きが止まった！
「コシャクナァァ！　コンナモノデオレヲトメレルトオモウナアアァ！」
藤島が“封印”を解除しようとエーテル・エネルギーを注ぐ。
ぎしりとゲートキーパーの甲冑が軋む！
「悼矢くん！」
呼ばれ、悼矢はこくりと頷いた。
「さあ、着けてやるよ！　この戦いの決着を！」
カアアアアアアアアアアアアッツ！
一段と悼矢を包む白のエネルギーが膨れ上がる！
そして――
ドバンッ！
地面を蹴ると悼矢の体は何かに弾かれたかのように藤島へと飛んでいく！
それは人外の脚力。エーテル・エネルギーにより強化されたことで生み出される俊脚。
「今だ、レオ！　決めてこい！」
悼矢に少し遅れてレオが、そしてリタが藤島へと壁を、床を蹴る！
「獅子吶喊ッ！」
レオが金色をまとい吼える！
「アルデ・ブレイバアアァァァ！」
リタが燃え滾る赤の大剣を振り上げる！

「藤島ぁあああああああああああ！」
そして悼矢が白の右拳を振りかぶる！
「片桐悼矢ァアアアアアアァァッ！」
それに迎え撃つように藤島も黒く染まった右拳を振りかぶる！
そして――
――地が揺れた。
レオの金色の力と藤島の黒の力が激突する！
リタの紅蓮の火炎と藤島の漆黒の闇が激突する！
悼矢と藤島の拳の接触点から黒と白のエネルギーが迸る！
そのエネルギーは辺りに撒き散らされて、天井を突き破り、壁を貫き、地面を割る！
それだけでは飽き足らず自然の摂理を捻じ曲げ、空間が悲鳴をあげ、中空に奇怪な渦を作る！
その時の悼矢の心の中にあるのはただ一つの意志だけだった。
「藤島ぁあああッ！　てめぇをぶん殴ってやらあああああああ！」
「ホザケエエエエエエエエエ！！」
と、その時だった。
ピキッ。
音がした。
それはこの轟音轟く中では蚊が鳴いたように小さい音。
しかし藤島の耳にははっきりと聞こえた。
そして悼矢の眼には見えていた。
藤島の黒の塊にヒビが入ったのだ。
「バ、バカナ……！　コノオレガ……マケル！？」
「そうだ！　てめぇの負けだあああああ！」
黒のエネルギーの中に悼矢の拳が――白のエネルギーがめり込む！
刹那！
どぱぁんっ！
藤島を包んでいた黒のエネルギーが弾けとんだ！
その衝撃で吹っ飛ばされ悼矢、レオが地面に転がり、リタも宙に

吹き飛ばされる！
「ぐわあああああああ！」
「ぬぅっ！」
藤島の右腕の血管が爆発でもしたかのようにブシュウウゥウと血が噴き出る！
だがそれだけだった。藤島の眼はまだ死んでいない！
「まずい！　やり損ねてる！」
河上が焦りを露にして叫んだ。
「ハッハッハァ！　オシカッタナ！　ダガコレデオワリダ！」
藤島が血のしたたる右手でギターの弦に指をかけた。だがその時、藤島は地面に倒れた悼矢がニヤリと笑っていることに気づく。
「言ったろ。お前の負けだぜ、藤島」
「ナ、ナンダト――」
その時、藤島は足元の影に気づいた。それは自分のものではない影。
「やっちまえええええ！　リタアアァァァ！！」
藤島が上を見上げた。
「アルデ――！」
そして彼の瞳孔が開く。
その視界に広がったのは真っ赤な大剣を振り下ろそうとしている金髪の美少女。
「ブレイバアアアアァァァッ！」
ジャギィィイィィィィィィンッ！
リタが振り下ろしたアルデヴァインがＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬを真っ二つにたたっ斬る！
「グガアアアＡａ亜あああアぁぁａａａあああああ！！」
この世のものとは思えぬ叫び声をあげる藤島。
ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＨＥＬＬと繋がっていたためその消滅の痛みが藤島の体にフィードバックしたのだ。
藤島の眼がぐるんっと白目になる。そしてばたんっと背中から大

の字になって地面に倒れた。その体からは黒い煙がもくもくと昇っていた。
その傍らには『はぁはぁ』と息も絶え絶えのリタの姿。
リタはアルデヴァインをガシャンと落とすと、力が抜けたようにへなへなとその場で女の子座りをした。
どうやら宙に吹っ飛ばされたリタは天井を蹴り、再び藤島へと攻撃を繰り出していたらしい。悼矢はあれでリタが諦めないことを理解していたのだった。
「よくやった、リタァァ！」
悼矢がやってきて、リタの頭をわしゃわしゃと撫でた。
「わぷっ！　なにすんのよ！」
リタは顔を赤くして悼矢を睨みつける。
「褒めてやってるんじゃねーか」
「ほ、褒めてなんていらないわよっ！　私は当然のことをしたまでなんだから！」
「なんだよー、もっと勝利の喜びを分かち合おうぜ～！　お前は最高のエーテルだ！」
悼矢は後ろからリタを抱き寄せ、再び頭をわしゃわしゃと撫でる。
「ちょ、ちょっと！　くっつかないでよ、バカ！　恥ずかしいでしょ！？」
「お、終わった……」
河上はふぅと額の汗を腕でぬぐった。
「ふぅ……そのようだな。河上、さっさと藤島を“封印”しろ」
それに比べてきづなはいつもと変わりなくクールだった。
「はい。そうですね」
藤島のところへ駆けていく河上を見送ってきづなは悼矢を見た。
悼矢は笑いながらリタとくんずほつれつじゃれあっていた。
そこにとことことレオが歩いてくる。
「大事ないか」
「ああ、問題ない。少し疲れたがな」

レオはそう言ってきづなの目線の先を追った。
「片桐悼矢か。不思議な人間だ。お前の直感とやらは当たっていたようだな」
レオはきづなが悼矢のことを『普通のエーテル使いとは違う気がする』と言っていたのを思いだしていた。
「そうだな。流石にここまで違うとは思っていなかったが……。あいつの体が一体どうなっているのか深い話を聞かなくてはならないな」
ゲートキーパーが異相空間の“鍵”を開け、藤島を扉の向こうへ閉じ込める。
「ふう。これで“封印”完了。あとは……」
ゲートキーパーがカリエラのもとまで歩いていって優しく少女の体を抱き上げる。
それを見た悼矢が河上に問いかけた。
「か、河上さん。彼女は……カリエラはどうなるんですか？」
「時間はかかるでしょうが藤島と彼女との契約に干渉して解消してもらいます。その後のことは彼女の意志に委ねますよ」
「そ、それじゃあ……」
「はい。彼女は保護という形をとらせてもらいます。元々はＡＥＳ側のエーテルでしたし」
そう言って河上は微笑んだ。それに悼矢はほっと安堵する。
「さて、みなさん。敵の数は予想外でしたが、よく頑張ってくれました。任務はこれにて終了です。お疲れ様でした」
その言葉でやっとみなの緊張が抜ける。
と、その時だった。
パチパチパチパチ……。
不意に拍手の音が聞こえた。
『！？』
その場の全員が音のした方向に眼をやる。
積み上げられたコンテナの上。

そこには見知らぬ少女が立っていた。
身長は一六〇前半。さらさらと靡く銀髪に透き通るような青眼。
まるでフランス人形のように白い肌に端正な顔立ちをした美少女。
ぴちっとした真っ黒の上着に、裾の長いふんわりとしたこれまた真っ黒のスカート。
どことなくクールで大人っぽい雰囲気が漂う少女は不敵な笑みでこちらを見下ろしていた。

Ｄａｎｃｅ３　其の６－３

その隣にはワクナに肩を貸した淡川原の姿。
「いやいや実に興味深いものだったよ。藤島を倒したお前たちを賞賛しよう」
その少女の格好からしてどうやらこの世界の人間ではないようだ。
つまり――
「エーテル……！」
悼矢の言葉に河上は首を振った。
「いや……あれはエーテルじゃない……！」
河上の体が震えていた。
彼は気づいたのだ。
「ディアナ……！　お前がもっと早く来ていればこんなことにはならなかったものを……！」
淡川原は気を失ったままのワクナの顔を見て言う。
「何を馬鹿なことを……。独断で戦ったのはお前たちだろう。それに私たちの目的はＡＥＳＳと争うことではないはずだ」
「くっ……」
ディアナと呼ばれた銀髪の少女の言葉に淡川原は顔を伏せた。その様子から見てディアナは淡川原と契約しいるわけではないらしい。
「さて、話が反れてしまったな。一応は私もこの戦いに参加することになっていたんだが。なにぶん私も急がしくてな。どうやらパーティーに遅れてしまったようだ」
その言葉に悼矢は体にエーテル・エネルギーを込める。
「なんなら後夜祭をしてやってもいいぜ……！」
一歩前に出た悼矢の肩をきづなが止めた。
「……やめろ」
「何言ってんだ！　全員で力を合わせればあいつ一人ぐらい――」
悼矢が振り返ってきづなの顔を見た。そしてその表情に驚く。

きづなの顔はびっしょりと脂汗を掻いていた。
彼女も気づいたようだった。
「……あいつを刺激するな。私たちでは勝てない」
あっさりと負けを認めるきづな。
「何だよ、らしくないじゃないか、八神！　どうしたってんだよ！」
「悼矢くん……やめるんだ。私たちの他に三〇人エーテルが集まったってあいつには勝てませんよ。なぜならあいつはエーテルを超越している……！」
「エーテルを……超越してる？　どういうことですか！？」
河上の言葉に悼矢はオウム返しに問うた。
「オリジン。エーテルの上位存在……！」
その問いに答えたのはリタだった。
エーテルは他のエーテル体を吸収することでその強さを増す。だが器には必ず限界というものがある。その器がエーテル・エネルギーで満ち満ち、抑え切れなくなって自分を昇華させた存在。
それがオリジンと呼ばれる者たちの正体だ。
その熟練度は言うまでもなくエーテルの比ではない。将棋の駒で例えるならばエーテルは『歩』。オリジンは『飛車』や『角行』だ。
オリジンとなった者はその戦術の幅が膨大に広がるのである。
「ハハハ。元気があるというのはいいものだな。片桐悼矢……といったか。それぐらいの胆力がある男のほうが魅力的さ」
「そりゃどうも」と刃向う意志を捨てていない悼矢の返事。
「私たちはこれで去るよ。だがこのまま帰ったのでは私がここまで足を運んだ意味がない」
ディアナが顔の前で右手を上に、左手を下にして突きだす。
刹那ッ！
ディアナの周りをエーテル・エネルギーが立ち昇る。
悼矢はそのエネルギー量を見てやっと気づいた。
勝てない。
そう言われたことの意味を理解する。

まるで底が見えない。ディアナから発せられるエネルギーはそれに触れるだけで人間を死に至らしめるほど高圧なものだった。
（こんな存在がいていいのか！？　反則だろ……！）
人間とエーテルに絶対的な差があるようにエーテルとオリジンにも絶対的な差があるのだ。
ディアナの右手と左手の空間に闇色の珠が出現する。それはまるで総てを吸い込むブラックホールだった。
大きさはサッカーボールほど。しかしその大きさでこの一帯を焼け野原に変えれるほどのエネルギーが込められているだろう。
つまり逃げても意味がない。
あの黒球が放たれれば確実に悼矢たちは一瞬で消滅する。それこそ骨も残らないほどに。
「恨むのなら自分たちの弱さを恨むんだな」
ディアナがその黒球を腰だめにする。
「お前たちの天地を引っくり返してやろう」
そしてついにディアナが黒球を解き放つ！
ジュボオオォォォオォォォオオオ！
黒球は空間を焦がして突き進む！
（ここまでか……！）
誰もが諦めたその時――
「儂の助けが必要か。のぅ、悼矢や」
『！？』
ザッ！
いきなり悼矢たちの前に真っ白の振袖を着た少女が横から割って入った。
頭から白い猫耳が生え、にょろりと二本の尻尾を持つ白の少女。
少女は袖のたもとを翻し、くるりと横に回転すると、持っていた扇で黒球を弾き返す！
どぱんっ！
黒球はディアナの横を通り過ぎ、天井を突き破って遥か上空へと

突き進んでいった。
白の少女はくるくると舞うような回転をぴたりと止め、ディアナを見据えた。
「無粋じゃのぅ。おぬしが手をだすのはちと早いのではないか、ディアナや」
ぱんっと扇を片手で振って開き、口元を隠す振袖の少女。その白い扇には『猫又』と達筆で書かれていた。

Ｄａｎｃｅ３　其の７－１

いきなりの展開に呆然とする悼矢たち。しかし彼らが驚いたのは突然、彼女が登場しただけではなく彼女の格好そのものにもだった。

まず眼につくのはそのやたら袖の長い白の振袖。その振袖には扇がいくつも描かれて彩っている。いわゆる『扇面』と呼ばれる着物模様だ。彼女の身長は悼矢の胸元くらいまでしかない。だというのにやたらと長い振袖を着ているせいで裾を完全に引きずっていた。見た眼はまるっきり子どもだ。その長い黒髪の頭には白い猫耳が生えており、ぴくぴくと動いていた。振袖の中からは白い尻尾がちょろっと二本見え隠れしている。

どう見ても人間ではない。彼女もエーテルなのだろうか。

「やれやれ面倒なのが出てきてしまったな。無粋なのはそちらなのではないか、猫鬼肖（ショウ）。この街の主が何の用だ」

「なに……。月を眺めていれば何やら騒がしかったのでな。少しばかり顔を出しただけじゃて」

ディアナの渋い顔から判断するに、どうやらこちらの少女は悼矢たちの敵というわけではないらしい。

「ただの傍観者を気取っているかと思えばここぞという場面で邪魔をする。お前は一体、何がしたい」

苛立たしげなディアナ。それに対して猫耳の少女はひょうひょうとしている。

「雅ではないのぅ。目的がなければ行動してはいけないのかのぅ。それでは雲に失礼であろう。そのような余裕のない人生など面白くもないだろうに。のぅ、悼矢や」

振り返り悼矢を見上げる白の少女。

いきなり話を振られた悼矢はびっくりしてしまう。彼女が現れた時と同様にまるで従来の友人のような声のかけ方だ。

「へ？　ああ、まあ……」

なんだか分からないがとにかく頷いておく。
そんな戸惑っている悼矢の反応に少女は面白くなさそうに唇を尖らせ『儂が何者か気付いても良かろうに』とか小さく呟く。心なしか耳がしゅんとしなっている。
「そうか。お前の理由も知れない企みに付き合っている暇はないのだが、必要とあらば相手をしよう」
ディアナの左手に光が収束し、ムチを模る。
「この街は血の気の多いものばかりじゃのぅ。おぬしがその気ならば儂とて黙ってはおらぬでな」
すっと扇を構える。どうやらこちらはこちらでやる気満々のようである。
「あ、おいよせ！　あいつはオリジンって言ってエーテルよりも強いんだぞ！」
悼矢のその言葉に少女は不満そうな顔で再び振り返る。
「むぅ悼矢よ。儂とてオリジンじゃ。あんな若輩ものに遅れをとるつもりはないぞえ」
（こ、こいつもオリジンだと……！？）
「ってそれじゃあ余計に駄目だっての！　オリジン同士がこんなところで戦ったら火の海になっちまうじゃないか！」
この辺りを焼け野原にしてしまうほどの驚異的な黒球を大した時間もかけずに作り出してしまうようなオリジンたちが戦えば、もちろんこの倉庫の中での戦いだけに留まるはずがない。文字通りこの街を破壊し尽くす可能性だってある。
「む、むぅ……。ディアナや。今日のところは悼矢に免じて剣を収めてやろう。そちらも去るがよい」
少女は扇をぱちんと閉じた。
それを見たディアナもムチを掻き消す。
「ふん。まるで飼い猫じゃないか」
「何とでも言うがよいわ。おぬしとて同じようなものじゃろう。人間と契約などせぬなどと言ったのはどこのどいつじゃったかの」

「さてな。私にはとんと覚えはないが」
ディアナと猫耳の少女の視線がパチパチとぶつかり合う。
だが、その時、更に新たな声が倉庫内に響いた。
それはあまりにも急だった。
「なんだ……やらないのか、お前たち。
オリジン同士の戦闘なんておもしれーもんが見れると思ったんだがな」
その声を聞いた瞬間、悼矢の心臓が『どくん！』と跳ねる。
なぜかは分からないが額に、背中に、脂汗が滲み出る。
そう、何の前触れもなく“そいつ”は現れた。
その場の全員が――悼矢が圧倒的な存在感を感じながらゆっくりとそちらに視線をやる。
そこに“そいつ”は立っていた。
悼矢の眼球にその存在が刻まれる。
堀の深い顔に無精ヒゲ。
ポマードで整えられたオールバック。
褐色の肌で、何か格闘技でも心得ているのか、ガタイの良い体つきをしている。
そしてその身は真っ黒のスーツに包まれていた。
「グリフォルオ……！」
ディアナが掠れた声でその名を叫んだ。
グリフォルオ。
悼矢の耳に“そいつ”の名が自然と染み込む。
悼矢の心臓がどくどくと鼓動を早めている。
ぴんと張り詰めた空気の中で、悼矢の視線とグリフォルオの視線が絡まり合う。
カチリと運命の歯車が噛み合う音がした。そしてカラカラと回転を始めていく。
これが片桐悼矢とグリフォルオの宿命の出会いだった。

Ｄａｎｃｅ３　其の７－２

「な、なんだ……！？　あいつもオリジンか……！？」
「否。やつは……禍魂じゃ……！　それもとびっきり最悪なのぅ……！」
きづなの問いに猫耳の少女が答える。
「禍魂！？　あれが禍魂だと！？」
それはどっからどう見ても人間の男。あの獰猛で動物的な肉体を持つ禍魂には見えない。
「俺がどんな姿をしようと俺の勝手だろ。もともと禍魂には定まった形なんてねぇんだからよ」
「禍魂に定まった形がない？　どういう意味だ？」ときづな。
「ククク、お前は“八神”きづなだな……。自慢の頭脳で考えたらどうだ、“拒絶された子”」
「！　貴様ッ！」
きづなの表情が怒りに染まる。あまり感情を示さないきづながこれほどまでに憎しみを表に出すのは珍しいことだ。
河上の握った拳ががくがくと震えている。ぐっと食いしばった口から血が出ている。そして激しい怒りと共にその名を叫んだ。
「グリフォルォオォオオオオオ！」
そんないつも冷静な河上の激昂に悼矢ときづなが驚く。
「貴様を！　貴様を殺すッ！」
眼を血走らせてエーテル・カードを取り出した河上を振袖の少女が止める。
「やめい！　おぬしでは勝てぬ！　命を粗末にするでないッ！」
「離せ！　グリフォルオォオッ！　貴様のッ！　貴様のせいでええええぇッ！」
眉をひそめて河上を見る禍魂。
「ああん？　おまえは……。

ああ、そうか。“あの時”のガキか。くくく、これは面白ぇ……。最高じゃねぇか」

だがすぐに合点がいったらしく両手をポケットに突っ込んだまま『ククク』と笑う。

そしてゆらりとしかし真っ直ぐに悼矢に再び視線を定める。

「そんでそっちにいるのが片桐悼矢。あいつらの“子”というのは間違いないようだな。こうして近くで見るとよく奴らに似ている」

「どういう意味だ！　お前、親父とおふくろを知っているのか！」

「ああ。よく知っているさ」

悼矢の問いにニヤニヤとした笑みを絶えさない。そのすべてを知っており、すべてを見透かしたような眼が悼矢を苛立たせる。

「どこだ!?　親父とおふくろはどこで何をしている!?」

「ククク、知りたいか？」

「当たり前だろ！」

「クハハハハ！　面白ぇなぁ！　知りたいってなら教えてやるよ。お前の父親と母親はな――」

すっと指をあげるグリフォルオ。

「いかん、奴の戯言に耳を傾けるな！」

「ダメだ！　聞くな、悼矢くん！」

振袖の少女と河上がグルフォルオの声を掻き消すように叫ぶ。

そしてグリフォルオは自分の腹を指差した。

「こ・こ・だ」

「グリフォルオオオォオォ！」

再び河上が怒りの表情で叫ぶ。

悼矢はぽかんとしていた。

意味が分からなかった。

あの禍魂が言った意味を悼矢は理解することをできないでいる。

いや本当は分かっているのだ。しかし頭が理解することを拒否していた。

「クカカカカ！　最高だぜ、その顔、その表情！」

狂ったようにバカ笑いをするグリフォルオ。
「お前の父親と母親……司とアリスは死んでんだよ！　とっくの昔にな！」
「死んだ？　親父とおふくろが？」
悼矢はゆっくりと首を振る。
認めたくなかった。そんな真実、認めたくない。
グリフォルオは右手を天にかざす。
「俺が！　この手で殺してやったんだよ！　おまえの父親も母親もなぁ！」
「は、ははは……。嘘だ……。嘘に決まってる……！　親父とおふくろが死んでるだと……！？　嘘だ嘘だ嘘だあああああああ！」
ズオオォォォォオオオオォォォ……！
白いエーテル・エネルギーが立ち昇る！
ぐっと悼矢が前傾姿勢になる！
「トウヤ……！」
「い、いかん！　よさぬか、馬鹿者！」
どばんっ！
リタと猫耳の少女の制止を振り切り、悼矢がグリフォルオへと高速で肉薄する！
ぎゅるんっ！
風を巻き込み、全身の筋肉を使って右拳を大きく振りかぶる！
右足で強く地面に踏み込む！
ボゴンッ！
それだけで地面が割れ、蜘蛛の巣のようにヒビが走る！
そしてはち切れんばかりのエーテル・エネルギーが込められた右拳をグリフォルオの顔面に繰り出した！
人間が受ければ跡形もなく頭が吹っ飛ぶほどの力量がその拳には込められているだろう。
だが――！
ズドォオォォオオォォォォンッ！

その強烈な一撃をグリフォルオは呆気なく左手に収めていた。
エネルギーの反動でか、グリフォルオの足場がぼこりと凹んでクレーターになる。
それだけでなく悼矢の拳の風圧によってグリフォルオの背後の壁が悼矢の拳の型に吹き飛ばされる！
しかしグリフォルオにダメージがあるようには見えない。
余裕の笑みのまま悼矢の拳を掴んでいる。
　エーテルでも耐えうるか分からないような一撃をグリフォルオは軽々と受け止めていたのだった。
「期待外れだな。こんなもんじゃねぇだろ。“奇跡の子”の力はよぉ」
「くそおおおお！　グリフォルオオォォ！」
悼矢の中から何かが込み上げてくる。悼矢の中に眠っていた何かがゆっくりと体に染み渡って行く。
「ククク、どうやって死んだか知りたいなら教えてやるぜ。今でも覚えてる。あいつらの味は格別だったからなぁ」
味。
グリフォルオは確かにそう言った。
ギンと悼矢の視線がグリフォルオを射抜く。
「グリフォルオオオオ！　お前えええええええ！」
グリフォルオは口が裂けんばかりの笑みになる。
「そうだ。喰った」
「ああ！！」
怒り。憤怒。激昂。悲しみ。悲哀。不満。孤独。劣情。失望。嫌悪。侮蔑。疑心。未練。
　ありとあらゆる負の感情が悼矢を包み込む。
　その時だった。

どっくん！
悼矢の心臓が大きく鼓動した。
悼矢の中に眠っていたその力がのっそりと動きだす。
バヂ！　バヂバヂバヂ！
悼矢の拳とグリフォルオの手の接触面からエネルギーが迸り、グリフォルオの左腕を放電させる！
それを見たグリフォルオがこれまでにないほど口を歪める。
恍惚とした笑みで悼矢を見つめる。
「くる……！　くるぞ……！　化け物が……！」
ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！
地が大きく揺れる。
それはここら付近だけの話ではなかった。
波科町全体が揺れているのだった。
その揺れを引き起こしているのは何を隠そう悼矢その人だった。
悼矢から溢れだす暴虐なまでの負のエネルギー。
それが街を振動させているのだ。
「な、何!?　なんなの一体!?」
ぐらりとぐらつき、アルデヴァインを杖変わりにするリタ。
「よせ、悼矢……！　心を保つのじゃ……！　街が……！　街が壊れる……！」
振動に耐えられなくなり、手をついて必死に叫ぶ猫耳の少女。
「何が起こっている!?」
きづなは激しく揺れる地面に倒れまいとレオの体を支えにする。
河上は呆けたように悼矢を見ていた。
「こ、これが“奇跡の子”の本当の力！」
悼矢を取り巻くエーテル・エネルギー。
それは人間どころかエーテルをも超越していた。局地的な地震を引き起こすほどのエネルギーを発することなどオリジンにも不可能だろう。しかし悼矢の変化はそれだけに収まらなかった。
悼矢の髪がぞわぞわと長く伸びていく！

それだけでは飽き足らず黒い体毛が彼の体を包み込む！
悼矢の体が筋肉が膨張して服を突き破る！
悼矢の肌の色が変色していく！
眼から瞳が消えうせ、紅蓮の炎のように真っ赤になる！
　その姿はまるで彼が敵対していた生物そのもの。

「――――――――――――――――――――――――――――――――――――ッ！！」

　人語ではない獣の咆哮。
　その咆哮は空間を揺るがし、波動が倉庫の窓を粉々に吹き飛ばしていた。
　その場にいた全員がその謎の波動に吹っ飛ばされる！

Ｄａｎｃｅ３　其の７－３

リタは吹っ飛ばされて、這いつくばりながら、そんな悼矢の姿をじっと見つめていた。
リタは感じていたのだ。悼矢が自分とかけ離れた存在にどんどんと変貌していることを。
「エーテル化、いやオリジン化して……いや違う……あれは……！」
ディアナが信じられないといった表情のまま悼矢を見下ろしている。
きづなの頭はパニックになっていた。悼矢から発せられるエーテル体としての存在、しかし人間としての存在もまた健在する。それはまるでイデアの世界に干渉し力を引き出す人間の体とイデアの力を受け強くなれるというエーテルの体が混合したような、そんな無限の広がりを見せている強烈なエネルギー。
「なんということじゃ！　これほどまでに強大なものじゃというのか……！」
猫耳の少女は扇で予想よりも遥かにかけ離れた強烈なエネルギーを防いでいた。
（司よ……！　ぬしの“息子”に対する願い！　ちと儂には荷が重いやもしれんぞ！）
ズドォオオオォオオオン！
悼矢からエネルギーが真上に放出された。
その白い光の柱は屋根を吹き飛ばし、雲を掻き消し、高々と天を突く！
まるで何かを告げる狼煙のように――！

◇◇◇

「これが“奇跡”の力なんやな。えらいこっちゃで、ほんま。どこ

のどいつや。藪をつつきよったんわ」
俵衛助は意識を集中した。そしてその存在を見つけ、眼がすっと鋭くなる。
「グリフォルオ……。あの阿呆……。余計なことをしよってからに……」
その表情は普段の彼からは想像できないほど真剣なものだ。
俵衛助は揺れるビルの屋上からずっと真っ白の光の柱を見続けていた。

◇◇◇

「あれが悼矢くんの本来の力……」
少女もまた白い柱を見ていた。窓から見えるそれからは圧倒的なエネルギーを感じる。
「まさかもう覚醒するなんて……」
少女は机に置いてあった写真立てを見た。そこには恥ずかしがっている悼矢とそんな悼矢に抱きつき笑顔でピースしている自分の姿が写った写真が飾られてある。
「ここからが本番よ、悼矢くん。自分に負けないで」
少女は再び窓から見える柱に視線をやった。

◇◇◇

「……」
中年の男は高層ビルの最上階の窓からそれを見ていた。
「あ、あれが片桐悼矢の力ですか。恐ろしいほどのエーテル・エネルギーですね」
その男の秘書らしい若い女性が言った。
「この時が……ついにこの時がきたのだな……」
そこで秘書は男の強く握った拳が震えていることに気づいた。

「重和……様……？」
「……」
男はずっとその光の柱を眺め続けていた。

◇◇◇

まだ幼い少女はぱちりと眼を開けた。
「お気づきになりましたか、巫女様」
そこは神社の一室。
少女は布団から飛び出すと、障子を開けるのが面倒だったのか、足で蹴り破る。
ばたーん！
「巫女様！　なんとはしたない！」
侍女の一人が顔を真っ赤にして怒鳴る。
だがそんなことなどどこ吹く風。巫女装束に包まれた幼い少女はくりんくりんの大きな瞳で白い光の柱を見ていた。
「……おー」となんだか感嘆しているご様子。
そして、何を思ったのかすぅぅっと大きく息を吸い込んだ。
瞬間、周りの侍女たちがさっと耳を塞ぐ。
「たーまやー！」
少女の大声が山に反響し、山彦となって帰ってくる。
「……。巫女様、あれは花火ではありませんよ」
「がーん！　しょっく！」

◇◇◇

それは森の中だった。
「ガッハッハ！　こりゃすげぇ！　“奇跡の子”ってのもなかなかやるじゃねーか！　なあ、“風の冬”！」
そう言って岩に座っている大男が一升瓶に口をつける。

「そうだね。“奇跡の子”が相手なら“角笛”や“ヘズ”には荷が重すぎたかな」

“風の冬”と呼ばれた金髪青眼の青年はやれやれといった感じで肩をすくめる。

「……」

「？“剣の冬”？　どうかしたのかい？」

“風の冬”は後ろで木に持たれ腕を組んでいる盲目の男に声をかけた。

「……俺の覇道に立ち塞がるなら“斬る”までだ」

そう言うと振り返ってどこかへ歩いてく。彼の眼は光を受け付けないというのにそれはしっかりとした足取りだった。

「ったく、あいつは陰険で好かねぇ。酒がまずくなるってもんよ」

「“狼の冬”。君は豪快すぎるけどね」

「ガッハッハッハ！　違ぇねぇや！」

バンバンと岩を叩いて笑う大男。本人は大して力を入れているつもりではないのだが、岩が砕けて手形がべたべたとついていく。

そんな様子を見て“風の冬”はやはりやれやれと首を振って肩をすくめるのであった。

◇◇◇

こよりはカーテンを開けて、白い光の柱を見ていた。

「……悼矢ちゃん……」

ぎゅっと握った手を胸に当てる。

胸に宿っているのは不安だった。

きっと今、あの人は苦しんでいる。自分の中に眠っていたものと戦っている。

私に心を教えてくれた優しい人。

私の大切な、私だけの“お兄ちゃん”。

「……負けないで……お兄ちゃん」

◇◇◇

光の柱が収まると、悼矢の体がくらりと揺らぐ、そしてどさっと地面に倒れてしまった。

力を解放しきって気を失ったようだ。

同時に地震もゆっくりとおさまる。

「クハハハハハハ！　素晴らしい！　これこそ俺が求めていた力！　世界を貫く力！　片桐悼矢！　お前こそ俺が求めていた存在！　概念をひっくり返す禁断の存在！」

ゴゴゴゴゴゴ……！

屋根を吹き飛ばしたせいか倉庫が崩れ始める！

「まずい！　みんな退避しましょう！」

河上のその声で誰もが我を取り戻す。

「トウヤ……！　トウヤ……！」

リタが悼矢を抱きかかえた。

悼矢の体は普通の人間の体に戻っていた。伸びた髪も膨張していた体も元に戻っている。

それに少しほっとするリタ。

「リタくん……！　早く！」

河上に促されてリタは悼矢を抱えたまま出口へと走り出した。

河上が出口に走りながらグリフォルオの方に視線をやる。

グリフォルオは倉庫が崩れることなど関係なく笑い続けていた。

その姿はまさに狂人。

降り注ぐ瓦礫とその土煙でグリフォルオの姿が見えなくなってしまう。

（グリフォリオ……！　お前が何をしようとしているのかは知らない……。だが必ず阻止してやる……！　どんな犠牲を払おうとも……！）

そしてついに倉庫はがらがらと崩れ去った。

エピローグ　ＴｏＢｅＮｅｘｔＤａｎｃｅ・・・

「ふーん。“奇跡の子”がそんな力をね。あの夜の光の柱はそれが原因だったんだね」

金髪青眼の青年は報告を聞いてそう呟いた。

そこはどこかの一室だった。

青年は王様のような背もたれの長い椅子に深く腰をかけている。

「ああ。覚醒というよりも暴走といった感じだったがな。あの力をものにされるとお前の計画とやらに支障が出るんじゃないか」

男の計画に邪魔が入るだろうことを楽しそうに話す黒のオリジン。

「……ディアナ。君は僕に忠誠を誓ったんじゃなかったのかい？」

「便宜上は……だ。お前と違って片桐悼矢は面白そうな男だったよ。興味が沸いた」

「リタを取られたばかりか君まで取られてしまったら流石の僕も落ち込むんだけどな」

「そうやってエーテルを何人もはべらせている男が吐く台詞ではないな。しかも女性のエーテルばかりを集めるとは趣味がいい」

ディアナはやれやれとため息を吐く。

彼女の言うとおり、青年の周りには何人ものエーテルの少女が付き従っていた。あるエーテルは青年の膝にしなだれかかり、あるエーテルは青年の首に腕を回して抱きつき、あるエーテルは孔雀の扇で青年にゆるやかな風を送っていた。

一体、この青年は何体のエーテルと契約しているのだろうか。その部屋だけで五人のエーテルが青年に付き従っている。

「すぐに君も僕の魅力を理解できるさ。君が気に入っている片桐悼矢を殺せば嫌でもそれに気づくだろうね」

「それは楽しみだな」

ディアナは興味なさそうに言って扉に向かった。

扉を閉めるとフと笑い廊下を歩きだす。

思い出すのは圧倒的な力を前に抵抗の意志を捨てなかった男の顔。
「……片桐悼矢……。早く私の元へ来い」
カツカツとヒールの音が長い廊下に反響した。

◇◇◇

「以上が昨夜の出来事です」
河上の報告書に視線を落としたままの中年の男。
そこはあるビルの最上階。
「藤島はまるで私たちが来ることを知っていたような話ぶりでした。つまり、ＡＥＳＳには――」
「エーテル犯罪組織……“ラグナロク”と内通している者がいる、か」
「……はい」
「合界派、別界派の件もある。問題は尽きそうにないな。それにしても……」
男は席から立ち上がり、窓から外を眺めた。
「時の流れは不思議なものだ。あの“子供”がここまで成長したのだからな。司とアリスも喜んでいることだろう」
「しかし、問題は多そうです」
「そのようだな」
男は報告書をぱらぱらとめくる。
「治。できるだけ彼をサポートしてやってくれ。これから先、彼がキーマンとなる時がくるだろうからな」
「はい。元よりそのつもりです」
河上はそう言って微笑んだ。

◇◇◇

ひゅおおおおおお……。

風が少女の長い黒髪を靡かせる。
そこはビルの屋上だった。
少女は崩れた倉庫を無感情に眺めていた。
その瞳には何が映っているのだろうか。ただその瞳が崩れた倉庫を見ていないのは確かだった。
彼女のエーテルが戻ってきて、やっと少女の瞳に色が戻る。
「どうだった？」
「駄目だな。あの禍魂の匂いはあの場所で消えている」
「そうか」
少女は再び倉庫に眼をやった。
「何を考えていた」
ライオンのその問いに少女は一拍置いて呟いた。
「いや大したことじゃない。ただあの男は……片桐悼矢は禍魂に両親を殺されたのだな、と思ってな……。それだけだ」
その言葉にレオは驚いた。
今まで他人に興味を示さなかった少女が、そんなことを考えているとは。どうやらあの男の存在は思った以上に少女に影響を与えているらしい。
思わずフと笑ってしまう。
「な、何がおかしい……！」と少女は顔を赤くしてライオンを睨みつけた。
「いや大したことじゃない。ただある頑固な少女の成長を微笑ましく思ってな。それだけだ」
そんなライオンの言葉に少女は片手を腰に当ててため息を吐いた。
「……お前は意地悪だな」
「お前のエーテルだからな」

◇◇◇

「ククククク……。あの力、まさに本物……」

グリフォルオは丘の上から波科町を眺めていた。
そこへ後ろから男が姿を現す。
「グリフォルオ。たいがいにせぇよ。人の計画ぜーんぶおじゃんにしてもーてからに」
グリフォルオは振り返り、その人物を見てハッと笑った。
「お前のやり方はまどろっこしいんだよ。待ってなんかられねぇ」
「一歩間違えたらこの街が消し飛んでたんやで。ふざけんなや」
「知ったことか。俺はあいつが覚醒さえすればそれでいいんだよ」
「チッ。ほんま狂っとるで」
グリフォルオの背後にいた赤髪の男は振り返って去っていった。
「ククク……！　片桐悼矢……！　やっと本当のお前が生まれたんだ……！　楽しませてくれよ！　クハハハハ！　ハッハッハッハッハッハッ！　ハァーッハッハッハッハッハ！」
笑い声だけを残してグリフォルオの姿が掻き消えてしまう。
まるで始めからそこには誰もいなかったかのように。

◇◇◇

「……ここは……」
悼矢は眼を覚ましてすぐ周りを見回した。
見慣れた部屋模様にどうやら自分の部屋だということに気づく。
ずきっ……。
頭が痛み、手をあてる。
（俺は確か――）
記憶を辿ろうとしてすぐに思い出す。
昨夜の出来事を。
そしてハッとなった。
がばっと体を起こし自分の体を見回してみる。
肌の色も普通だった。髪の毛も長くなっていない。体も筋肉で膨れ上がったりしていない。

「俺は……一体、何者なんだ？」
自然とそんな疑問が口から出ていた。
と、その時。部屋の扉ががちゃりと開く。
「気がついたみたいね、トウヤ」
リタは部屋に入ってくると悼矢のベッドにぼふっと座る。
「あれからどうなったんだ？」
「大変だったわよ。昨日のことニュースになってるわよ。『ある街で起こった怪奇現象！？　地震と共に現れた光の柱！』なんて感じでね」
「ははは、そりゃそうだろうな。当事者じゃなかったら俺も信じられねぇよ」
「笑い事じゃないわよ」
「はい」
リタに睨みつけられて悼矢はしゅんとなる。
「なあ、リタ」
「なに？」
「俺って人間なんだよな？」
「……。……当たり前でしょ。何バカなこと言ってるのよ」
「はは、そうだよな。悪ぃ」
そこへこよりが部屋にやってきた。
「悼矢ちゃん！　起きたの！？」
「ああ、おはよう、こより」
「もうっ！　おはようじゃないよっ！　昨日どこで何をしてたの！？　服を破いちゃったりして！」
怒り心頭しているこより。
「あ、いや、あれはだな！　その、まあ、ちょっと色々あって！」
なんとか弁解しようとしている悼矢にいきなりこよりが抱きついた。
とさっと胸にきた軽い振動に戸惑う。
「こ、こより……？」

「もう……、あんまり危ないことしちゃダメだからね」
静かにそう言ってこよりがぎゅっと腕に力を入れる。
「ああ、心配かけてごめんな」
悼矢は優しくこよりの頭を撫でてやった。
リタはそんな様子を見てなぜか苛立つ心情に戸惑っていた。
（えーい、落ち着け、私。こよりは妹でしょ。そうよ、妹じゃない。血の繋がった兄妹なんだから当然よね。これくらい。なんだけど――）
「いつまで抱き締めてんのよッ！」
リタの放った右拳が悼矢の顔面にめり込んだ。
「ごはっ！」
もんどりうってベッドから転げ落ちてしまう。
「て、てめぇ！　いきなり何しやがるんだ！」
「っるさいわね！　あんたがいけないんでしょ！」
「なんだと!?　俺のどこがいけないってんだ！　訳の分からないことでいきなりキレやがって！　今日という今日は簡便ならねぇ！」
「やれるもんならやってみなさいよ！　このエセ人間！」
「な、なんだとぉおおお！　てめぇ今言っちゃいけないこと言ったな！　もういっぺん言ったらぶん殴るからな！」
「何度でも言ってやるわよ！　エセ人間、エセ人間、エセ人間、エセ人間！」
「てんめぇ！」
あーだ、こーだ。
今や完全に力が拮抗している二人はどたばたと部屋の中で掴み合いを始める。
こよりはそんな様子を離れたところから眺めてくすくすと笑った。
この時、まだ彼らは気づいていなかった。
とてつもない勢いで様々なことが動き出し始めていることに。
彼らの知らないことは多い。彼らの理解できないことも多い。だが、それでもと彼らは思うだろう。

それでも自分の信じる道を進むだけだ、と。
「ちょっと強くなったからって調子のんな！」
「っるせぇよ、このぺちゃぱい！」
言った後で悼矢は『あ』と呟く。リタにとって胸の話は禁句だったのを思い出したのだ。
「こんのぉ！」
ぎゅるんっとリタが右拳を振りかぶる。
どう見てもその右拳にはエーテル・エネルギーが込められている。
「ちょ、ちょっと待て！　それは流石に洒落に――」
「色情魔あああああ！」
ぼぐぅ！
「ぎょるべえええええ！」
悼矢はリタのアッパーカットを受け、窓を突き破って外に吹っ飛んでいった。

了

エピローグ　ＴｏＢｅＮｅｘｔＤａｎｃｅ・・・（後書き）

今までご愛読有難うございました
これにてＤａｎｃｅ　ｏｆ　Ａｅｔｈｅｒ’ｓ！　一巻（？）は終了です
おっと完結したわけではありませんよ？
張った伏線はちゃんと後々回収していきます　たぶん　おそらくきっと
現在、続編『Ｄａｎｃｅ　ｏｆ　Ａｅｔｈｅｒ’ｓ！～激情のメリーゴーラウンド～』のプロットを作成中です
しかしですね　次はまた違う長編に手を出そうと思っていますのでＤｏＡはその長編が終わった後、つまりは皆様が忘れたころにまた書き始めるかと思います
申し訳ない！ｏｒｚ

ここまで読んで頂き、本当に有難うございました
またよろしければお付き合い下さい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2210e/

Dance of Aether's！

2010年10月8日13時09分発行